Ugetsu monogatari shinkai - Primary Source Edition

Sugii, Kazuo, Ueda, Akinari, 1734-1809

Ugetsu monogatari shinkai - Primary Source Edition

Sugii, Kazuo, Ueda, Akinari, 1734-1809

Nabu Public Domain Reprints:

You are holding a reproduction of an original work published before 1923 that is in the public domain in the United States of America, and possibly other countries. You may freely copy and distribute this work as no entity (individual or corporate) has a copyright on the body of the work. This book may contain prior copyright references, and library stamps (as most of these works were scanned from library copies). These have been scanned and retained as part of the historical artifact.

This book may have occasional imperfections such as missing or blurred pages, poor pictures, errant marks, etc. that were either part of the original artifact, or were introduced by the scanning process. We believe this work is culturally important, and despite the imperfections, have elected to bring it back into print as part of our continuing commitment to the preservation of printed works worldwide. We appreciate your understanding of the imperfections in the preservation process, and hope you enjoy this valuable book.

雨月物語新解

杉井一雄著

東京 白帝社

LIBRARY
FEB 21 1967
UNIVERSITY OF TORONTO

凡例

一、本書は高等專門學校生徒諸氏及び文檢國語科受驗者の研究用として、雨月物語の全譯及び詳註を附したものである。

一、本書は安永五年版「雨月物語」を底本とし、美濃版本その他數種の流行本を參酌して、常に校訂したものである。

一、原本は総篇文章を平押しに書き續けてあるが、讀者の便宜の爲め、假名遣ひ、送り假名などは適宜訂正してある。

一、頭註は人名、地名、官職名、調度等に及び、理解を深からしめ、尚通解に依つて譯し方の見本を示したものである。

一、尚大方讀者の高教を得て完璧を期したいと考へてゐる。

緒言

雨月物語は上田秋成の著である。秋成は享保十九年に大阪曾根崎に生れた。通稱は東作、秋成はその字にて、號を無腸、休西、鶉子と云ひ、家の號を餘齋、三餘亭、菟屋、揚遁家ともいふ。

彼の素性については曖昧であつて明かでないが、或は娼家の子なりと云ひ、或は崇禪寺馬場仇討の敵役生田傳八郎と曾根崎の娼家花家の娘との遺子なりとも云ふが、然しこの說は、彼が享保十九年に生れたことゝ時代が一致しない故に信ずるに足りない。

然し彼が自畫像の賛に書いたといふ次の如き文によつて彼の幼時を窺ふことを得る。

「無腸生浪華、寄于三京師二十六年、無レ父不レ知二其故一、四歳母亦捨、有伴上田氏所レ養、六歳養母逝、性多病、時々發二鬱癇一、後母依二慈愛一成長」云々

四歳にして實母に別れ、次いで第二の母を失ひ、三人の母に養はれたのである。慈愛深き第三の母によつて養はれたのであるが、とにかく、その幼時は悲慘なものであつた。

彼は多病の上に時々鬱癇を發したとの虚弱な體質であつた故か、養父母は彼の養育に可なり放任的態度であつた。このためか彼は學事を放擲し遊蕩に日を暮らした。然しその反面俳文學に趣味をもつたものゝ如く、二十四歳の頃には俳人几圭について俳道を學んだ事が、安永五年に几圭十七回忌追善の一續かけがらす」の文中に見える。

寶暦十二年、二十九歳の時、植山氏と結婚したが尚放蕩は續いたやうである。

然し彼はかゝる中にも俳道に精進するとともに歌道、國文、戯作へと才能を伸ばした。

明和七年三十七歳で養父に死別し、翌八年には火災にかゝつて、大阪を去り、口に糊するために醫術を學んだ。四十二歳のとき大阪にかへり醫業を始めた。未熟ではあつたが親切な醫者としての評判をとつて約六年後には家を新築する迄になつたが、續く薄倖に健康を害し、天明八年五十五歳のときには廢業をするの止むなきに至り、再び長柄川の畔に村居した。

寛政二年五十七歳のときには左眼を失明し、次いで同四年六月には妻の母、十一月には養母を失ふ等の災厄に遭い、同十年六十五歳のときには左眼が稍おさまると右眼の明を失ふといつた憂目を見た。

かくて困阨のうちに京都に轉住した彼は自己の不遇を憤る心のうちに文化六年六月二十七日羽倉信貴の家でその悲慘な七十六年の一生を終つた。

彼の作品は小説、紀行、和歌、俳句等の各方面に亘り、戯作者譯太郎の名で明和三年に著した、「當通腰牛世間猿」「當世容形氣」を始とし、「剪枝畸人の名の下に「雨月物語」があり、其の他「校補古今集打聽」「伊勢物語古意」「冠辭考續貂」「萬葉集目安補正」「靈語通」などは古典研究の述作であり「胆大小心錄」「秋成遺文」等により彼の歌文の才能を知ることができ、彼の處女著書を始として實に九十餘種の多きに達してゐる。

雨月物語新解目次

序……一

卷之一

白峯……一

菊花の約……三

卷之二

淺茅が原……三

夢應の鯉魚……盃

卷之三
佛法僧……一〇九
吉備津の釜……一一三
卷之四
蛇性の婬……一六二
卷之五
青頭巾……二二八
貧福論……二五二

雨月物語新解

杉井一雄著

巻之一

白峯

あふ坂の關守にゆるされてより、秋こし山の黄葉みすごしがたく濱千鳥の跡ふみつくる鳴海がた、不盡の高嶺の煙、浮島がはら、清見が關、大磯小磯の浦々、むらさき艶ふ武藏野の原、鹽竈の和ぎたる朝げしき、象潟の蜑が苫屋、佐野の舟橋、木曾の桟橋、心のとどまらぬかたぞなきに、猶西の國の歌枕見ざほしさて、仁安三年の秋

○あふ坂――近江國滋賀郡にあり、一城國との交通要路にて關所あり。し所、歌の名所。

○黄葉――葉が紅くなり黄になるをもみじと云ふ。

○鳴海潟――尾張國知多郡にある名所、新古今「さよ千鳥聲こそ近くなるみがたかたぶく月に潮やみつらん。」

○浮島原――駿河國にあり。

○清見ヶ關――駿河國庵原郡の南方。

○大磯――相模國、景色

は、霞がちる難波を経て、須磨明石の浦ふく風を身にしめつも、行く行く讃岐の真尾坂の林といふに、しばらく節を植む。草枕はるけき旅路の労にもあらで、観念修行の便せし庵なりけり。

通釈　京都を出て逢坂山の関所の番人に門を通ることを許されてから、伏の・来る山の貴船の景色も見捨てにくく、須に遥ぶ千鳥が足跡をふみつける鳴海潟の景色、富士の山から立ち昇る煙、浮島が原、清見が関、大磯小磯の浜辺、むらさきに映き匂ふ武蔵野の原、鏡山の和いだ風景色、象潟の漁夫が住む苫の家、佐野の舟橋、木曾の桟橋、これ等の名所は何れもなつかしい心のとまらぬ所はないのに、猶ほこれらの東国の名所について、西国の名所を見たいものと、仁安三年の秋には、霞がちる難波を経て、播州の名所須磨、明石の浦を吹く風を身に浴びながら、旅を続けて讃岐の真尾坂といふ林に暫らく節をとどめて逗留した。この宿りは長い旅行の労を休める為めではなくて、仏道修行の為めに便利な假住まであつた。

○小屋―大阪、こゝは立場の間の地をいふ　武蔵野の序詞。

○須磨―兵庫県武庫郡の名　源氏物語の舞台。

○明石―兵庫県明石郡　明石の浦―明石の海岸。

○千賀浦―播磨国加古郡にあり。

○佐野の舟橋―古来歌に詠みこまれた名所。

○象潟―出羽国仁賀保郡にあり。

○木曾の桟―木曾路の桟道。

○鏡山―近江国蒲生郡　安元二年―西暦一一七六年。

○逢坂―山城と近江との境にある関。

○貴船―山城国愛宕郡　伏の入口。

○鳴海潟―尾張国愛知郡　鳴海の海岸。

○富士の煙―駿河国富士郡　富士山。

○浮島が原―駿河国富士郡　浮島沼。

○清見が関―駿河国庵原郡　清見寺。

○大磯小磯―相模国中郡　大磯小磯の浜辺。

○武蔵野―武蔵国　武蔵野の原。

○鏡山―近江国蒲生郡　鏡山。

○和いだ風景色―和いだ風景色。

○象潟―出羽国仁賀保郡　象潟の海岸。

○苫屋―苫で屋根をふいた家。

○佐野の舟橋―上野国佐野に掛ける舟橋。

○木曾の桟―木曾路の桟道。

○播磨―播磨国、今の兵庫県の一部。

○明石―播磨国明石郡　明石の浦―明石の海岸。

○須磨―播磨国須磨郡　須磨の浦―須磨の海岸。

○真尾坂―讃岐国三豊郡　真尾坂の林―真尾坂の林。

○節を植む―竹の杖を止めて逗留する意。

○観念修行―観念は行る為に禅定、智慧の観念と布施、持戒、忍辱、精進の修行をなす事。

この里ちかき白峰といふ所にこそ、新院の陵ありと聞きて、拝みたてまつらばやと、十月はじめつかた彼の山に登る。松柏は奥ふかく茂りあひて、青雲の軽靡く日すら、小雨そぼふるがごとし。兒が嶽といふ嶮しき嶽背に登ちて、千仞の谷底より尖きりおひのぼれば尺尺をも鬱悒きこゝちせらる。木立わづかに間たる所に、土壇く積みたるが上に、石を三かさねに畳みなしたるが、荊棘瓦礫にうづもれて、うらがなしきを、これならむ御墓にやと、心もかきくらされて、さらに夢現をもわきがたし。

通釈　この里の近くの白峯という所に、崇徳上皇の陵があると聞いて、お拝みしたいものだと思つて、十月のはじめ頃にその山に登つた。その山は松や柏の木が奥深く茂り合つてゐて、青空の見えるよい天気の日にすら、小雨がすこしづつ降つて居るやうに思はれる。兒が嶽といふ嶮しい嶽が後に高く立つて、千仞の谷の底からは雲や霧が生じて登つて来るの

○白峰　―「シロミネ」と訓む。
○新院　―七十五代崇徳天皇の尊號。
○青雲云々――萬葉集巻十六「翔彦の、おのれ神さび、青雲の、たなびく日すら、小雨そぼふる」とあり、晴れきつた日でさへ、山中には小雨がしよぼ〳〵降つてゐる意、そぼふるは少しづつふること。
○千仞　高さちひろもあること。
○尺尺　八寸、一尺。
○おぼつかなし　たよりなし。
○荊蕀　茨と同じく刺ある草。
○葛藟　―つる草。
○うらがなしい　―心の中が悲しい。うらは、こゝろ、もひ等の意にて接頭語。

で、八寸一尺の先きへもよく見えない心持がする。かう云ふ所の木立が少しすいてゐる所に、土を小高く積んだ上に、石を三重にたゝみかけてあるのが、荊棘葛蘿等雑草に埋れて、何となく悲しいやうな心がするのに、これが御墓であらうかと思ふと、心もかきくらされるやうに茫然となつて、これは夢であらうか現であらうか一更に分らない。

現にまのあたりに見奉りしは、紫宸清涼の御座に、勅政きこしめさせ給ふを、百の官人は、かく賢しき君ぞとて、詔悪みてつかへまつりし。近衛院に葬りましても、藐姑射の山の瓊の林に禁させ給ふを、思ひきや、麋鹿のかよふ跡のみ見えて、詣で仕ふる人もなき深山の荊の下に神がくれたまはむとは。萬乗の君にてわたらせ給ふさへ、宿世の業といふものの、おそろしくもそひたてまつりて、罪をのがれさせ給はざりしよと、世のはかなきに思ひつゞけて、涙わき出づるがごとし。

○かきくらされて——悲哀とする意、かさには接頭語。
○わきがたし——區別がつかない。

○紫宸清涼——紫宸殿は禁中の正殿、清涼殿は上皇の常の殿。
○勅政——政事。
○藐姑射の山——莊子の逍遥篇に「藐姑射之山有神人居焉」とあるより出でて上皇、法皇の御所を祝しまゐりていふ。
○瓊の林——禁苑の意。
○麋鹿——大鹿小鹿。
○荊——雑草の生え茂り。
○神がくれ——おかくれになること。
○萬乗の君——人主は兵車萬乗を出すべき方千里の地を領し給ふにより天皇の御事をいふ。

○宿生　前世。
○供養　佛に追善すること。
○誦す　一一日にとなへる。
○松山　讃岐にある地名。
○歌の意　松山に打ちよせる浪の景色は昔も今も變らないであるのに、あなたはかくもお變りになつたことのおいたましいことよ。山家集下雜にある西行の歌。

終夜供養したてまつらばやと、御墓の前のたひらなる石の上に座をしめて、經文徐に誦しつゝも、かつ歌よみたてまつる。

松山の浪のけしきはかはらじを
かたなく君はなりまさりけり。

通釋　實に日の前にお見上げ申した新院は、紫宸殿、清涼殿の天子の御座にましまして、政治をおとりになるのを、多くの役人達は誠にかくも賢明にいらせられる君であると、天子の詔を奉じて恐みてお仕へして居た近衛院に御位をお讓りになつた後も、上皇の御所に尊くいらせられたものを、大鹿小鹿が行來をする外には道もなく、お詣りしお仕へする人もない深山の草木の茂みの下に神去りましまそうとは思ひそめもしなかつた。一天萬乘の大君でおいてになつてさへ、前世の因果と云ふものが恐ろしくも付けまとうて、罪をお免れになることが出來なかつたことよと世の中のたよりない事を思ひつゞけて、涙が湧き出るやうである終夜供養をして差し上げたいものだと思つて、御墓の前の平かな石の上に座つて、お經文を靜かに唱へながら、その間に歌を詠んでさし上げた。

松山に打ち寄せる浪の景色は昔も今も變らないであるのに、あなただけはかくもお變りになつたことのおいたましいことよ。

なほ心怠らず供養す。露いかばかり袂にふかゝりけむ。日は沒りしほどに、山深き夜のさま常ならねで石の牀、木葉の衾いと寒く神清み、骨冷えて、物さはなしに凄じきここちせらる。月は出でしかど、茂きが林は影をもらさねば、あやなき闇にうらぶれて、眠るともなきに、まさしく圓位圓位とよぶ聲す。

通釋　猶心に油斷もなく供養をした。悲しさの餘りに袖を濕らす露の深さは如何ばかりであつたであらう。やがて日が暮れたから、深山の夜の様子は普通でなく、石の床に、散り積つた木の葉を衾とするだけで誠に寒く、心も澄み渡り、骨迄も冷え冷えして、何ということなく恐ろしくすごい心持がした。月は出たけれども、茂りに茂つた林は月の光さへ洩さないので、物の色目も分らない暗さに心愛くなつて、眠るともなくうとうとしてゐると、たしかに圓位圓位と云つて呼ぶ聲がする。

○衾　衣具。
○物とはなしに　自然に、何とはなしに。
○神清み　心が澄む。
○茂きが林　一度つた密林。
○あやなし　一物の色目も分らない
○うらぶる　一心愛く思ふ。
（圓位　一西行法師の別稱。

眼をひらきてすかし見れば、其の形異なる人の、背高く痩せ衰へたるが、顔のかたち、着たる衣の色紋も見えで、こなたに向ひて立てるを、西行もとより道心の法師なれば、恐ろしさもなくて、こゝに來たるは誰そと問ふ。かの人いふ、前によみつる言葉のかへりごと聞えむとて見えつるなりとて、

板山の浪にながれて、こし船の、
やがてむなしく、なりにけるかな。

嬉しくもまうでつるよと聞ゆるに、新院の靈なることを知りて、地にぬかづき、涙を流していふ。さりとていかに迷はせたまふや。濁世を厭離し給ひつることのうらやましく待りてこそ、今夜の法施の隨緣したてまつるを、現形し給ふはありがたくも悲しき御心にし待り。ひたぶるに隔生卽忘して、佛果圓滿の位に昇らせ給へと、

○色紋……色合、色調、模様。
○道心……佛道に歸依する心、道念。
○よみつる言葉……西行の詠みたる歌。
○かへりごと……返答の言葉、言に出ないふ。
○やがて……そのまま。
○まうでる——來るの敬語。
○ぬかづく……額を地につけて禮する。
○濁世を厭離……濁りたる現世を死して去る事。濁世は五濁惡世の略。厭離は「イン リ」と訓みいとひ離れる事。
○法施の隨緣——法施は諸佛妙善の法を以て演說すること。隨緣は佛法に從ふ緣。
○ひたぶる……ひたすら
○隔生卽忘——一生を隔てる卽ち死せる時は前世の事を忘れる。

○佛果圓滿　佛になる事願が缺けたことのない。

情(こゝろ)を盡して諫め奉る。

通釋　眼を開いてすかして見ると、其の形常と異つた人で、背が高くて痩せ衰へてゐる人が、顏のかたちや、又衣の色合も模樣も見えないが、こちらに向つて立つて居るのを見たが、西行法師は素より佛道を悟り得た修行の心のかたい法師であるから、恐ろしいとも感じないで、こゝに來たのは誰かと問ふたところ彼の人が言ふには、前に(西行の)詠んだ歌の返答をしようと思つてこゝに現れたのだと云つて、

松山に打ち寄せる浪に流れて來た私は、都に歸ることも出來なくてそのままにこの地に果敢なくなつた。

懇しくもお訪りしてくれたことだと仰せられるので、新院の靈であることを知つて、地に額をつけて、次のやうに涙を流して申し上げた。それはそうとしてもどうしてかく迄もお迷ひになりますか　この濁つた惡世をお去りになつたことを羨しく思ひますので、今夜の法事を營んで佛に緣を結び奉つて居りますのに、現世に未練を殘して形をお現はしなさいましたのは、有り難い事ではあるが、悲しいお心であると思はれます。專らあの世にお隱りになり、現世の事はお忘れになつて、佛の果報を圓滿にお受けになる位にお昇りなさいますやうにと、眞心を盡してお諫め申

し上げた。

新院呵々と笑はせ給ひ、汝知らずや、近來の世の亂は朕がなす事なり。生きてありし日より、魔道に志を傾ぶけて、平治の亂を發させ、死して猶朝家に祟をなす。見よ見よ、やがて天が下に大亂を生せしめむといふ。西行この詔に涙をとゞめて、こは淺ましき御心ばへをうけたまはるものかな。君はもとよりも聰明のきこえましませば、王道のことはりはあきらめさせたまふ。こゝろみに申ね請すべし。そも保元の御謀叛は、天の神の敎へ給ふことわりにも違はじとて、おぼし立たせ給ふか。又みづからの人慾より計策給ふか。詳に告せ給へと奏す。

通釋　新院は呵呵とお笑ひになつて、汝は知らないか、近頃の世の中の戰亂は我がする事である。生きて居た頃から魔道に志を向けて、平治の亂を發させ、自分が死んだ後にも矢張り朝廷に祟つてゐる、見よ見よ今に天

○魔道：佛法を妨ける惡魔の邪道。外道。
○平治の亂：源義朝が平氏の強んなるを憤り藤原信賴と謀りて平氏を亡ぼさんとして起れたる戰爭。
○御心ばへ——お心柄。御料簡。
○王道　天子の道。
○ことわり——道理。
○天の神——天祖天照大神。

下に大亂を起させやうと仰せられた。西行はこの詔を聞いて涙を止めて申上げた、これはあまりに殘念なお心柄を承はるものであります。君(新院)は古より御賢明の評判高いお方なる故、天子の道の道理をよく御存知の事でおありになる。試みにおたづね申しませう、さて保元の御謀叛は、皇祖天照大神のお教へ道になつた道にも違はないとのことで、お思召なされたのですか、又は、御自身の慾から計畫をなさいましたのでありますか、詳細に仰せ下さいと申し上げた。

其の時院の御けしきかはらせ給ひ、汝さけ。帝位は人の極なり。若し人道上より亂す時は、天の命に應じ、民の望に順うて是を討つ。抑々永治の昔、犯せる罪もなきに、父帝の命を恐みて、三歳の體仁に代を讓りし心、人慾深きさいふべからず。體仁早世ましては、朕皇子の重仁こそ國しらすべきものをと、朕も人も思ひをりしに、美福門院が妬みにさへられて、四の宮の雅仁に世を簒はれしは、深き怨にあらずや。重仁國しらすべき才あり。雅仁何らのうつは物ぞ。

○御けしき　御樣子。
○人道——人の行ふべき道
○永治の昔——崇德天皇の御宇の年號。
○父帝——七十四代鳥羽天皇。
○雅仁　近衛天皇の御諱。
○しらす——治める。
○美福門院——關白太政大臣長實の女得子、鳥羽法皇の皇后。

人の徳をえらばずも、天が下のことを、後宮にかたらひ給ふは父帝の罪なりし。されど世にあらせ給ふほどは、考信をまもりて、勤色にも出ださざりしを、崩れさせ給ひては、いつまでありなむと、武きこゝろざしを發せしなり。臣として君を伐つすら、天に應じ民の望にしたがへば、周八百年の創業となるものを、まして亡るべき位ある身にて、牝鶏の晨する代を取つて代らむに、道を欠ふといふべからず。汝家を出でて佛に婬し、未來解脫の利慾を顯ふ心より、人道をもて因果に引入れ、堯舜の教を釋門に混じて脫に説くやと、御聲あらゝかに告せ給ふ。

通釋　その時に院はお怒りの御様子にお變りになつて仰せられるには、汝間け、天子の位は人としての最上の極である、若し人のふむべき道から亡ら亂す時は、天の命令により、民の望むところに從つて是を討つべきである。そもそも永治年間の昔に、犯した罪もないのに、父天皇の御命令を

（さへられ―遮ざられ
○雅仁―七十七代後白河天皇の御名。四の宮は第四の皇子。
○後宮―后妃宮人の御住所。此處にては皇后の御事。
○かたらひ給ふ　御相談なされて。
○勤―「ゆめ」の當字。強く禁止するを云ふ語。多く「ゆめ～～と重ねて用ふる。
○臣として君を伐つ―周の武王、紂王の臣下の身でその君殷の紂王を討つたことを云ふ。
○牝鶏晨す―詩經の牧誓篇に「牝鶏之晨、惟家之索也」とあるに本づく。「一家内にて、婦人の勢ひ強ければ、災の基なり。牝鶏が晨を告げるを常とすればいふ。
○解脫（げだつ）　梵語。（木文）の譯語。生死の苦しみから逃れて、眞如を悟ること。

捉しと敬つて、三歳の體仁に天皇の御位を譲つた心は自分に我慾が深くあるとは云はれまい。體仁が早く世を去られた後は、我が皇子の重仁こそは國を治めるものだと、我も人も思つて居たのに、美福門院の妬の心に逆きられて、第四の皇子雅仁に世を取られたのは、深い怨ではないか。重仁は國を治めるべき才能がある。雅仁はどう云ふ器量のある人か。人の徳を選ばないとしても、天下の大事を后妃に御相談なされたのは父天皇の罪であつた。けれども父天皇が御在世の内は、父に對する孝道、又信義を守つて、假にも顔色に出さなかつたか、御崩御になつた後は何時までもそのやうに堪へてゐることが出來やうかと思つて、武々しい志を起したのである。周の武王が臣たる身分で主君の紂王を伐つたことでさへ、天の命令に適ひ人望に順つてすれば、周八百年の治世の基の創めとなるものであるのに、況んや世の中を治めるべき位のある身で、女性か天下の政事に嘴を容れるやうな世を取つてこれに代らうとするのであるから、人の道にはづれたと云ふ事は出來まい。それより汝こそは家を捨てゝ佛道に心を亂し、未來の世に罪を遁れることを願ふ利慾の心から人道を佛道の因果の道に引入れ、堯舜の教へた道を佛道と混じて自分に説くのは何故かと、御聲もあらゝかしく仰せられた。

○因果——善を行へば善き報あり、惡を行へば惡しき報ありと云ふこと、即ち佛教の因果説。
○堯舜——支那古代の聖人。
○釋門——釋迦の説いた佛教。

○慾塵　人間の煩惱。
○震旦――支那。
○譽田天皇――十五代應神天皇の別稱。
○大鷦鷯の王――仁徳天皇の御諱。
○兎道の王――菟道稚郎子皇子。
○日嗣　天位の尊稱にて日嗣の太子は皇太子
○寶算――天子の御齢の敬語にてここでは菟道の王の御齢。
○天業　我が國の天子の御政事を指す。
○孝悌――親に對する孝道、兄長に對する道。
○堯舜の道　聖人の道
○王仁――百濟の人、應神天皇十六年に論語十字文を獻ず。
○浪士の聖　堯舜等の人格者。

西行いよ〳〵恐る〳〵色もなく、座をすゝみて、君が告せたまふ所は、人道のことわりをかりて、慾塵をのがれ給はず。遠く震旦をいふまでもあらず、皇朝の昔譽田の天皇、兄の皇子大鷦鷯の王をおきて、季の皇子兎道の王を日嗣の太子となし給ふ。天皇崩御たまひては、兄弟相譲りて位に昇り給はず。三とせをわたりても、猶果つべくもあらぬを、兎道の王深く憂ひ給ひて、豊久しく生きて、天が下を煩はしめむやとて、みづから寶算を斷たせ給ふものから、罷事なくて兄の皇子御位に即かせ給ふ。是れ天業を重じ、孝悌をまもり、忠をつくして人慾なし。堯舜の道といふなるべし。本朝に儒教を傳みて、專ら王道の輔とするは、兎道の王、百濟の王仁を召して學ばせ給ふをはじめなれば、此の兄弟の王の御心ぞ、即て浪士の聖の御心ともいふべし。又周の創、武王一たび怒りて、天下の民を安くよ。

臣として君を弑すといふべからず。仁を賊ひ義を賊む。一夫の紂を誅するなりといふ事、孟子といふ書にありと人の傳へに聞き侍る。

通釋　西行法師はいよ〳〵恐れる様子もなく、正を述べて云ふには、君の宣ふ所は人道の道理を借つて、人間の卑しい慾心を免れることがお出きにならない。遠い支那のことを云ふまでもない事で、我が王朝の昔に應神天皇は、御兄の皇子大鷦鷯の王をさし措いて、季の皇子菟道の稚郎子を皇太子となされた。天皇崩御の後、御兄弟互ひに相譲り合つて位にお昇りにならない、三年の年月を經てもお譲り合が終りそうにもないのを、菟道の皇子は大變お憂ひになつて、どうして久しい間生きて居て天下を煩はさうかと仰せられて、御自身で御生命をお縮めになつたものだから、仕方がなく兄の皇子が御位におつきになつた。このやうな御行爲は天下の政治を重んじ、孝の道、兄弟の道を守り眞心をお盡しになつたもので人慾ではなく、聖人の道に適つたことと云ふべきである。我が國で儒教を尊んでひたすらその教を王道の助とするのは、菟道の皇子が百濟の王仁をお召しになつてお學びになつたのが始めであるから、この御兄弟の皇子の御心こそは即ち支那の聖人の御心に適つたものと言つて宜しい。

○一夫の紂云々　君としての紂ではなく、一個の人間としての紂。

○孟子といふ書にあり　孟子巻一、梁惠王章句下に「齊之一大臣殺一大豕、未聞弑君也」とあり。

又周の代の初めに、武王が一度天下の爲に怒つて、殷の代を滅して天下の人民を安くしたが、これは臣の身分で君を殺したとは云はれない、にの道を害ね人の道を害した、只一人の紂と云ふ人間を誅するものであると云ふ事が、孟子と云ふ書物に書いてあると人傳に聞いて居ります。

されば渡士の書は、經典、史策、詩文に至るまで渡さざるはなきに、かの孟子の書ばかり、未だ日本に來らず。此の書を積みて來る船は、必しも暴風にあひて沈むよしをいへり。それをいかなる故そと問ふに、我が國は天照すおほん神の開闢知しめしゝより、日嗣の大王絶ゆることなきを、かく口賢しき教をつたへなば、末の世に神孫を奪うて、罪なしといふ敵も出づべしと、八百よろづの神の惡ませ給うて、神風を起して船を覆へしたまふと聞く。されば他國の聖の教も、ここの國土にふさはしからぬことすくなからず。且つ詩にもいはざるや、兄弟牆に鬩ぐとも外の侮を禦げよと。さるを骨肉の

○經典――聖人の書、即ち經書。
○史策――歷史や諸種のかきもの。
○未だ日本に來らず――一五雜組に出す。
○おほん神――人神。
○開闢――「肇國」の意にて國ひらきになること。
○日嗣――日神の詔命にて大業を承け嗣させて知ろしめすこと、日嗣の大王に天子。
○神孫――天照大神の御子孫。
○兄弟云々――兄弟が一家の内で仲惡しく互に爭ふとも外部の障害は一所になつて禦ぐ。

愛を忘れ給ひ、あまさへ一院崩御たまひて、殯の宮に肌膚もいまだ寒させたまはぬに、御旗なびかせ弓末ふり立て、寶祚をあらそひ給ふは、不孝の罪これより劇しきはあらじ。天下は神器なり。人のわたくしをもて奪ふとも得べからぬことわりなるを、たとひ重仁王の即位は民の仰ぎ望む所なりとも、徳を布き和を施し給はで、道ならぬわざをもて代を亂したまふ則は、きのふまで君を慕ひしも、けふは忽ち怨敵となりて、本意をも遂げたまはで、いにしへより例なき刑を得給ひて、かゝる鄙の國の土とならせ給ふなり。たゞ〳〵哀れをわすれ給うて、淨土にかへらせたまはむこそ願はまほしき叡慮なれと、はゞかることなく奏しける。

通釋　それであるから支那の書物は、經典、史策、詩文に至るまで渡つて來ない書物はないのに、この孟子といふ書物だけは未だ日本に來ない。この書物を積んで來る船は、必ず暴風に遭つて沈沒すると云ふことを云つ

○一說——鳥羽法王の御號。

○世の宮——天子崩ぜられて、未だ葬送し奉らぬ間、假に御棺になさめて安置し奉る宮殿。

○天下は神器——老子の語。天下神器、不レ可レ爲也。又漢書の敍傳に不レ知二神器有一レ命、不レ可下以二智力一求上也。

○例なき刑——吉今に例なき刑に、上皇四國に幸せられし事。

○淨土——清淨なる國土の意。一般道にて、佛の過去の修行圓熟せるにより出現し來れる國土。佛國。

てゐる。何故かと云ふと、我が國は天照大神が國をお開きになり治め給ふて以來、天皇の御系統の絶えた事のないのに、こんな利口ぶつた教を傳へたならば、末の世には大神の御子孫の御位を恋つても罪はないといふ謀叛も出でやうといふので、八百萬神がお悪みになつて、神風をおこして船を覆されるのだと聞いて居ります。それだから他國の聖人の教でも、我が國に適應しない事はすくなくありません。それに詩にも云つて居るではありませんか、兄弟が我が家の牆の内では爭つてゐても、外敵は共に力をあはして防けと云つて居ります。然るに御血脈の情をお忘れになり、その上一院（鳥羽法皇即ち御父帝）がお崩れになつて、まだ御葬りさへもしないで殯の御殿で御肌さへも冷えきつておいでにならない位であるのに、御旗を靡かせて弓を執つて、御位をお爭ひになるのは、不孝の罪、これより甚だしい事はありますまい、天下は個人のものではなく神の器であります。人が私勝手に奪ふとも奪ふことが出來ないのが道理でありますのに、例ひ重仁親王が御即位なさるのは民が仰ぎ望んでゐる所であつても、天下に德政を布き平和な政治をお施しなされないで道理をはずれた行爲を以て世をお亂しになる時には、昨日まで君をお慕ひして居たものも、今日は忽ち怨敵となつて、衆々御素志をお遂しにな

らないで、古から例もない罪を得られることになつて、こんな田舎の国の土とおなりになつたのである。ただ〳〵古い仏をお忘れになつて、極楽の浄い地にお帰りになることこそはお願ひしたいお心であると、遠慮なく申し上げた。

院、長嘯をつかせ給ひ、今事を正しく罪をとふ。ことわりなきにあらず。されどいかにせむ。この島に謫れて、高遠が松山の家に囚められ、日に三たびの御膳すゝむるよりは、まゐりつかふる者もなし。只天さぶ雁の小夜の枕におとづるゝを聞けば、都にや行くらむとなつかしく、暁の千鳥の洲崎にさわぐも、心をくだく種となる。島の頭は白くなるとも、都には還るべき期もあらねば、定めて海畔の鬼とならむずらむ。ひたすら後世のためにとて、五部の大乗経をうつしてけるが、貝鐘の音も聞えぬ荒磯にとどめむもかなし。せめては筆の跡ばかりを洛の中に入れさせたまへと、仁和寺の御室の許へ、

○今事なたいして　事なゝじて若悪を定める

○高遠　貞文の郷士、保元物語には名季とあり。

○おもの　御食事

○洲崎　砂洲の長く海中へさし出して崎となつたもの。

○鳥の頭白くなり　那智の太子丹が秦に質たり時、不可能を求めに、秦王「烏の頭白くなり、馬に角の生ぜん時帰るこそ許さんと答へかば、丹天を仰いで哭せしに、忽ちにして、烏の頭白くなり馬に角生じければ、より出る

○五部大乗経——唯識経、大集経、大品般若経、

法華經、涅槃經の併稱。一乘經は佛教中最も深玄なる眞理を說く法門、卽ち一切智が開き、その力量を以て、無量無數の衆生を救濟する教法。

○貝鐘　法螺貝と鐘、佛具にて寺院に用ふ故、其の音も寺院のなきをいふ。

○仁和寺　一和はナと發音す」山城國葛野郡北村大字御室にある眞言宗の寺。鳥羽法王の第五王子本仁親王御出家後に和寺にありて御性法親王と申す。

經にそへてよみておくりける。

濱千鳥、跡はみやこに、かよへども、

身は松山に、音をのみぞなく。

通釋　新院は長息をおつきになつて、今道理を正して其が出來ることは、道理でないことではない、然し次のやうな事は何うだらう、この島に流謫せられて、高遠の松山の家で苦しめられ、日に二度の食事を進める外には傍に仕へる者もない、貝宮を飛ぶ雁が夜の枕におとつれるのを聞くこと、あの雁は都に行くのかと思ふと戀しくなり、曉の千鳥が泣いて鳴き暮ぐにつけても心を碎く基となる　異い鳥の頭が白くなる時があらうとも、自分が都に還る時はないのであるから、定めしこの海邊に露命を終ることであらう、專ら後の世の爲めと思つて、五部の大乘經を寫したが貝の音、鐘の聲も聞えない御寺もない荒波寄せる海邊にお經を留めて置くのも悲しい、せめての事には筆の跡だけも都の中に入れて下さいと云つて、仁和寺の御室の許へ、その經にそへて、

濱千鳥のふみ附た足跡である自分の書いた五部の經文は都に通ふが、自分の身體は都に歸ることが出來ないで、徒にこの松山で寢をあけて

○濱千鳥云々　古へ鳥の足跡を見て文字を作りたれば、文字の異稱に云ふ。

泣いてゐるのである。

といふ歌を詠んで送つた。

しかるに、少納言信西が計らひとして、若呪詛の心にやと疑しけるより、そがまゝにかへされしぞうらみなれ。いにしへより佞漢士ともに、國をあらそひ兄弟敵となりし例は希らしからねど、罪深きてさかなと思ふより、悪心懺悔の爲にとて寫しぬる御經なるを、いかにさゝふる者ありとも、親しきを議るべき仐にもたがひて、筆の跡だも納れたまはぬ叡慮こそ、今は偕しき誓なるかな。所詮此の經を魔道に回向して、恨をはるかさむと、一すぢにおもひ定めて、指を破り血をもて願文をうつし、經とともに志戸の海に沈めてし後は、人にも見えず深く閉籠りて、ひとへに魔王となるべき大願をちかひしが、はた平治の亂ぞ出できぬる。まづ信頼が高き位を望む驕

○信西＝藤原通憲、博學にして儒道に通じ平治の亂の犠牲となりて亡ぶ。

○呪詛＝のろふこと。

○懺悔＝梵語、諸書なき所にて、懺は梵語「懺摩」と記し、悔過と譯す）の略。過去の罪惡を悔りて悔い、又はこれを佛に告げしらすこと。

（叡慮＝天子の御心）

○回向＝自己の修めたる功德を以て、一切衆生の佛道を成すること

○はるかす＝はらす。

○願文＝神佛等に立願する文章。

○志戸の海＝九劍山の東麓から小串崎の間を云ふ。今は志戸町の辺海。

慢の心をさそうて、義朝を語らはしむ。かの義朝こそ悪き敵なれ。父の爲義をはじめ、同胞の武士は皆朕が爲に命を捨てしに、彼一人朕に弓を引く。爲朝が勇猛、爲義忠政が軍配に風目を見つるに、西南の風に燒討せられ、白川の宮を出でしより、如意が嶽の嶮しきに足を破られ、或は山賤の椎柴をおほひて雨露を凌ぎ、終に僧はれて此の島に謫られしまで、皆義朝が姦しき計略に因しめられしなり、

通釋　然るに少納言信西のとりはからひだといふことで、あるひはこれも世を呪ふ心ではあるまいかと申し上げたので、そのまゝ御經を都にをかず返された事は恨めしいことだ、昔から日本でも支那でも國を爭つて兄弟が仇敵となつた例は珍らしい事ではないないが、自分のした事は罪の深いことであると思ふから、惡心を悔ひ改める爲と思つて寫した御經であるのに、どんなにお經を朝庭に入れるのを邪魔するものかあらうとも親しい間柄のものゝ爲にするべき道に從はずに、筆の跡さへも納れられない天子の御心こそは、現在では解く事の出來ない永い仇である。結局は此の御經を魔道に手向して恨を晴らさうと專ら思ひ決めて、指を破つ

○平治の亂　平治元年藤原信頼が二條院をおびやかし參らせた事件
○さそうて　の音便
○軍配　「タバカリ」計畧といふに同じ。
○山賤　山の人の義にて仙人の稱。
○椎柴　椎の木の一名柴は雜にする雜木の小枝をいふ。
○虎狼の心　虎や狼の如き暴虐な心を云ふ。

て血を以て願文をうつし、經と共にこの志戸の海に沈めた後は、人にも會はないで深く閉ち籠つて、只管魔王とならうとする大願を誓つたが、やがて思ひ通りに平治の亂が出て來た、先づ信頼が高位を望むおごりの心を誘つて義朝を同腹させた。彼の義朝こそは悪い仇だ。義朝の父爲義を始めとし彼の兄弟の武士は皆自分の爲に命を捨てたのに、彼一人は我に反してリを挽いて敵對した。そして戰の様子は、爲朝が勇ましく猛々しいこと、爲義や忠政かはかりごとに巧みなので勝色が見えて居たのに西宮の風に乘じて焼討をせられて、白川の宮殿を出てから、如意が嶽の嶮しい山に遁れては足を傷つけ、或は木樵が切つた杵の木や柴を覆うて雨露を凌ぎなどして、終に捕はれて此の島に流されるに至つたまで、義朝の悪い計略に困しめられたのである。

これが報を虎狼の心に消化して、信頼が陰謀にかたらはせしかば、地祇に逆ふ罪、武に賢からぬ清盛に逐ひ討たる。且つ父の爲義を殺せし報遁りて、家の子に謀られしは、天神の祟を蒙りしものよ。又少納言信西は常に己を博士ぶりて、人を拒む心の直からぬ、これを

○虎狼の心――慈深くして能くことを知らざるもの、又殘忍なる者の譬にいふ語。
○地祇――國土の守護し給ふ神
○家の子――木流の同族若しくは家の召仕の意にて、義朝敗北して昵

田に出で、更に尾張に行き、その臣長田庄司平忠致の家に潜みしが忠致欺きて義朝を殺す

○天神　天にいます神。

○獄門にかけらる　獄門は罪人の首をさらす所。

○諫言　こびへつらひの詞。

○應保の夏　二條天皇の御字、應保元年美福門院薨。

○長寛　二條天皇の御字、長寛二年關白忠通薨。

○冥王　冥は梵語。殺生や破壊者と譯す。此の類に種々の冥あるに依り三百餘類といふ。

○眞火　怒りの烟。

○けんぞく　うからやから、親族、配下のもの。

○人果　人たる果報。

さそうて信頼義朝が讐となししかば、終に家をすてて宇治山の穴に窟れしを、はた探し獲られて、六條河原に梟首らる。これ縛をかへし諫言の罪を治めしなり。それがあまり、應保の夏は美福門院が命を窮り、長寛の春は忠通を黜りて、朕も其の秋世をさりしかど、猶嗔火熾にして盡きざるまゝに、終に大魔王となりて三百餘類の巨魁となり。朕が眷屬のなすところ、人の福を見ては轉して禍とし、世の治まるを見ては亂を發さしむ。只清盛が人果大にして。親族氏族ことごとく高き官位につらなり、おのがまゝなる國政を報行ふといへども、重盛忠義をもて輔くる故、いまだ期至らず。汝見よ、平氏も亦久しからじ。雅仁朕につらかりしほどは終に報ゆべきぞと、御聲いやましに恐ろしく聞えけり。西行いふ。君かくまで魔界の惡業につながれて、佛土に億萬里を隔て給へば、ふたゝびいはじとて、

只默してむかひ居たりける。

通釋　この返報をば虎狼の如く殘忍な心に化せしめて、信賴の謀反に共謀させたので義朝は、地神に反した罪で、武道に通じて居ない清盛に討たれた。その上に父の爲義を殺した罪が報ひて、自分の部下に謀られ殺されたのは、天神の祟を受けたものである。又小納言信西は平常自分自ら學者振つて、人をよせつけないで心が正直でない、これを誘つて、信賴や義朝等の敵としたから、信西は遂に家を出て宇治山の穴に隱れて居たのを、又探し出されて捕へられ六條河原で獄門にせられた。これは經を都に止めないで返した誤言の罪に報いたのである。その上に、應保の夏には美福門院の御齡を縮め、長寬の春には忠通に祟つて、自分も共の秋に世を去つたけれども、死んでも猶怒りの焰は盛んに燃えて盡きないので終に大魔王となつて、三百餘類の頭となつた。自分の率るてゐる一族のする仕事は、人の幸福を見てはこれを回轉して禍とし、世の中が治まるのを見ては亂を起さすのであるが、只清盛だけは此の世の幸福が大きくて、親族一族の者の全部が高位高官に列し、自分勝手な政事を行つて居るが、子の重盛が忠義で輔佐して居るから、未だ亡す時機が來ない、併し見て居よ、平氏も亦久しくはないであらう。我は雅仁親王が自分につ

○重盛―清盛の長子、小松内大臣と稱し。智德兼備の人。

○領界―勢威の及ぶ區域。

○佛土に億萬里云々―極樂淨土は現世から西方十萬億土にありと、ふより億萬里といふ。

らく當つたゞけのことは何時かは報ひてやるといはれた御座は、前にもまして恐ろしく聞えた。それで西行がいふには、君はこれ程までに惡魔世界の惡事と結びついて、佛の淨土に億萬里もお隔りになつてお居でになるから、もう二度と申し上げますまいと云つて只默して居た。

時に峰谷ゆすり動きて、風靄林を傾すがごとく、沙石を空に卷上る。見るみる一段の陰火君が膝の下より燃上りて、山も谷も晝のごとくあきらかなり。光の中につらつら御氣色を見たてまつるに、朱をそゝぎたる龍顏に、荊の髮膝にかゝるまで亂れ、白眼を張あげ、熱き噓をくるしげにつかせ給ふ。御衣は柿色のいたうすゝびたるに、手足の爪は獸のごとく生伸びて、さながら魔王の形あさましくもおそろし。空にむかひて相模々々と叫せ給ふ。あと答へて、烏のごとくの化鳥翔來り、前に伏して詔をまつ。院、かの化鳥にむかひたまひ、何ぞはやく重盛が命を奪りて、雅仁崇盛をくるしめざる。化鳥

○陰火——妖怪の火。鬼火。
○龍顏——天子の御顏の尊稱。
○柿——雜草のむらがり生ひたる處より轉じて物事のみだれたる意。
○柿色——修驗者の衣の色。
○いたう——いたくの音便。
○すゝびたる——ふるびて黑く色がついたる。
○相模——謠曲鞍馬天狗に「扨も〳〵天狗はたれ〳〵ぞ、彦山の花前坊四州には白峰の相模坊とあるによる。

こたへていふ。上皇の幸福いまだつきず、重盛が忠信ちかづきがたし。今より支干一周を待たば、重盛が命數既につきなむ。彼死せば一族の幸福此の時に亡ぶべし。院手を拍つて怡ばせ給ひ、かの御歎改盡く此の前の海に盡すべしと、御聲谷峰に響きて、凄じさいふべくもあらず。魔道の淺ましきありさまを見て、涙しのぶに堪へず。復び一首の歌に隨緣のこゝろをすゝめたてまつる。

よしや君、昔の玉の、床とても、

かゝらむのちは、何にかはせむ。

刹利も須陀もかはらぬものをと、心あまりて高らかに吟ける。

通釋　その時に峯や谷は搖れ動いて、風は林を倒すやうに強く吹き、砂や石を空に卷き上げたり。そして見てゐる内に一團の陰火が新院の膝の下から燃上つて、山も谷も晝のやうに明るくなつた。その光の中でよく〳〵御樣子を伺ひ申し上げると、朱をそゝいだやうな赤いお顏に、星の度つた

○支干一周——陰陽道にて木、火土、金水、の五行を各兄（エ）と弟（ト）とに分ちて、甲、乙、丙、丁、戊、己、庚、辛、壬、癸、と呼ぶものを十干と云ひ、別に子、丑、寅、卯、辰、巳、午、未、申、酉、戌、亥、なる鼠、牛、虎、等十二の動物に配せるものあり、これを十二支と稱し、十干と十二支とを順次にあはせて日等を數ふ。此處にては十二支一周の意にて十二年後の事ならん、支干一周は十と十二の最少公倍數六十年。

○刹利——梵語帝利の略にて印度四姓中の第二位、即ち貴族門に次ぐる種族。「セツリ」と訓む。

○須陀——梵語首陀羅の略、印度四姓中の最下級のものにて農業を以て職とする種族。

やうに亂れたお髮が膝の上にかゝるまでのび亂れ、白眼が吊り上つて、熱い嘘を苦しさうに吐いておるでになる。御衣は柿色が非常に古くなつて黒みがかつてゐるし、手足の爪は獸のやうに延びてゐて、丁度魔王の形で誠に恐しい。やがて新院は空に向つて相模々々とお叫びになると、あと答へて鳶のやうな化鳥が翔けて來て、御前に伏してみことのりを待つた、新院はその化鳥に向はせられて云はれるには、どうして早く重盛の命を取つて雅仁や清盛を苦しめないのか、と仰せられると、化鳥が答へて、上皇の御幸福がまだお盡きにならないし、又重盛の忠信の心には近づきにくい、今から十二年間を待つたならば、重盛の御命も最早盡きるでせう、重盛が死ねば平家一族の幸福はその死と共に亡びませうとお答すると、新院は手を拍つておよろこびになつて、彼の平家といふ仇敵は凡て此の前の海で殺してしまへと、御聲が谷や峯に響いて、すごいことは口に云へない。この惡魔道の恐ろしい有樣を見て、涙を止めることが出來ないで、又一首の歌を詠んで佛緣にお從ひになるやうにとおすゝめ申し上げた。

例ひ君は昔のやうに玉の床即ち皇位にお即きになつているとしても、このやうに魔道にお入りになつては何にしませう、所詮無用のことで

ありませんか。

刹利の如く身分の高い者も須陀のやうに卑しい者でもかうなれば別に変りはないものをと、心に思ひ餘つて高く吟つた。

此のことばを聞しめして感させ給ふやうなりしが、御面も和らぎ、陰火もやゝうすく消えゆく程に、つひに龍體もかきけちたるごとく見えずなれば、化鳥もいづち去きけむ跡もなく、十日あまりの月は峰にかくれて、木のくれやみのあやなきに、夢路にやすらふがごとし。ほどなくいなのめの明けゆく空に、朝鳥の音面白く鳴き渡ればかさねて金剛經一巻を供養したてまつり、山をくだりて庵に歸り、閉に終夜の事どもを思ひ出づるに、平治の亂よりはじめて、人々の消息年月のたがひなければ、深く愼しみて人にも語り出でず。其の後十三年を經て、治承三年の秋、平の重盛病に罹りて世を逝りぬれ

○かきけち——かきけし
○木のくれやみ——暗が夜つてくらくなつてゐる事。
○いなのめの——曉と云ふ意から、明くの枕詞。
○金剛經——金剛般若波羅蜜經の略、一般若の處理をもて一切の苦厄を除く功徳の經一巻。法相、華嚴、天台、眞言等の諸宗にて用ふ。
○治承三年——八十代高倉天皇の御宇の年號。
○福原——太政大臣の唐名。
○鳥羽の離宮——山城國乙訓郡鳥羽にあり、城南離宮といへり。即ち京都の南方。

ば、平相國入道、君を怨みて鳥羽の離宮に籠めたてまつり、かさねて福原の茅の宮に囚しめたてまつる。頼朝東風に競ひおこり、義仲北雪をはらうて出づるに及び、平氏の一門ことごとく西の海に漂ひ、途に讃岐の海志島八島にいたりて、武きつはものども、おほく蒼魚のはらに葬むられ、赤間が關壇の浦にせまりて、幼主海に入らせ給へば、軍將たちも、殘りなく亡びしまで、露たがはざりしぞおそろしく怪しき話柄なりける。其の後御廟は玉もて飾り、丹青を彩りたして稜威を崇めたてまつる。かの國にかよふ人は、必ず弊をさゝげて齋ひまつるべき御神なりけらし。

通釋　この歌をお聞きになつて御感動なさる樣子であつたが、やがて御顏が和らいで、鬼火も次第に消えて行く內に、遂に新院の御身體もかき消すやうに見えなくなると、化鳥も何處へ去つたのか跡かたもなく、十日過ぎの月は峯にかくれて、木暗い闇で物の色目も分らないなかで、夢路を

○福原の茅の宮——攝津福原の三間の板屋に押籠め奉りし故事。
○賴朝——源義朝の子平治の亂に敗れ伊豆に流され後兵を起して鎌倉に幕府を開く。
○義仲——源義賢の子、木曾より起り平家を追討せし人。
○幼主——八十一代安德天皇の御事を指す。
○稜威——御威光。
○話柄——話しの種。
○丹青云々——丹は赤色青は碧、にて彩色したるを云ふ。
○弊——神に奉る幣帛。

辿つて居るやうな氣がする。程なく夜が明けゆく空に、朝の鳥が音も面白く鳴き渡るので、重ねて金剛經一卷を供養の爲によんで、山を下つて家に歸り、閑かに一晩中のことを思ひ出すと、平治の亂を初めとしてから、人々の樣子時日も新院のお言葉と違ひがないから、深く愼んで人にも話さないで居た。その後十三年を經て治承三年の秋に、平の重盛が病氣に罹つて世を去つたから、平太政大臣清盛入道は重盛がゐないので、君をお恨みして、鳥羽の離宮におしこめ、重ねて福原の茅茸の御殿に籠め奉つてお苦しめした。この時に源賴朝は東風に乘じて東國に起り、義仲は北國の雪を拂つて立ち上り、共に平氏を滅しに來るに及んで、平氏の一門は悉く西海の波の上にたゞよひ、遂に讃岐、志戸、八島と追ひつめられて、武士達は多く龜や魚の腹中に葬られ、赤間が關壇の浦に至つて遂に運極まり、安德帝が海にお沈みになると、その餘の將卒共も、殘りなく亡んで終つたことまで、豫言に少しも違はなかつたのは恐ろしくも不思議な話である。其の後新院の御廟は玉をもて飾り、彩色を施し立派にして、新院の御威光を尊ふんだ、彼の國に行く人は必ず弊を捧げてお祀りすべき御神でいらせられる。

菊花の約

青々たる春の柳、家園に種ることなかれ。交は輕薄の人と結ぶことなかれ。揚柳茂り易くとも、秋の初風の吹くに耐へめや。輕薄の人は交り易くして亦速なり。揚柳いくたび春に染むれども、輕薄の人は絶えて訪ふ日なし。播磨の國加古の驛に、丈部左門といふ博士あり。清貧を甜心ひて、友とする書の外はすべて調度の類を厭ふ。老母あり。孟氏の操にゆづらず。常に紡績を事として、左門がこゝろざしを助く。其の季女なるものは、同じ里の佐用氏に養はる。此の佐用が家は頗る富榮えてありけるが、丈部母子の賢きを慕ひ、娘子を娶りて親族となり、慶事に托て物を餉るといへども、口腹の

○驛つぎ。「馬屋の義にうまや宿驛」
○博士　物知り。
○清貧——貧ることなくして、貧に甘んじて世を送ること。
○甜心ふ　甘んずること。
○調度　道具。
○孟子の操——支那孟軻の母は、孟軻の教育に心を碎き、遂に孟軻をして賢人たらしめし人、その孟軻の母の如き賢き心情。

○紡績――麻をうむと糸をつむぐ、即ち好人の仕事。
○日腹――日や腹を肥やす、即ち飲食。

爲に人を梁さむやとて、敢へて承くることなし。

通釋　青々とした春の柳は庭園に植えてはならない、人との交際は眞實のない薄情な人と結んではならない、川柳や柳は茂り易くても、秋の初風の吹くのに耐へられやうか。薄情な人は交り易くて、又交りの破れるのは迚かである。楊柳は幾度もの春に會へば葉を綠に染めるが、輕薄な不人情な人は一度交が破れると又訪ねて來る日はない。

播磨の國加古の驛に、丈部左門と云ふ學者があつた。行ひ清らかで貧乏に安んじて、友とする書物の外は總て道具などを持つといふ頑ふて厭ふて居た。左門に老母があつたが、その人は孟軻の母の操に劣らない立派な人で、平常糸を紡ぐことを仕事として、左門の素志を貫かさうと助けて居た。その季の娘は同じ里の佐用氏に養はれて居た。この佐用氏の家は頗る富み榮えて居たが、丈部氏母子の賢者であるのを慕つて、その娘を娶つて親族となり、度々何かの事にかこつけて物を贈つたが、丈部は飲食のため、人に面倒をかけやうかと云つて、その贈物を受けることがない。

一日左門同じ里の何某が許に訪ひて、いにしへ今の物がたりして

興ある時に、壁を隔てゝ人の喘む聲、いともあはれに聞えければ、主に尋ぬるに、あるじ答ふ、これより西の國の人と見ゆるが、伴なひに後れしよしにて、一宿を求めらるゝに、士家の風ありて卑しからぬと見しまゝに、逗留らせしに、其の夜邪熱劇しく、起臥も自は任せられぬをいとほしさに、三日四日を過しぬれど、何地の人ともさだかならぬに、主も思ひかけぬ過し出でて、こゝち惑ひ侍りぬといふ。左門聞きて、悲しき物がたりにこそ。あるじの心安からぬもさる事にしあれど、病苦の人はしるべなき旅の空に、此の疾を憂へ給ふは、わきて胸窮しくおはすべし。其の様をも看ばやといふを、あるじとゞめて、瘟病は人を過つ物と聞ゆるから、家童らもあへてかしこに行かしめず。立よりて身を害し給ふことなかれ。

通釋　ある日左門は同じ里の何某の家を訪ねて今昔の話をして興味のある時

○西の國――播磨より西の國、即ち山陰道の國。
○伴ひ　同伴者。
○いとほしさに――不憫さに。
○わきて　殊に。
○瘟病　急性傳染病の總名。瘟は本は家畜の傳染病の名。

に、壁を隔てゝ人の苦しむ聲が、非常に不憫に聞えたので、その主人に尋ねると、主人が答へるに、此處より西の方の國の人と思はれるが、同伴者に後れたといふことで、一夜の宿を求められたので、その人は士家の風貌のある人で人品も卑しくないと思つたので、お宿めした處が、其の夜悪い熱が劇しく起つて、起臥も自分の自由にならないのを氣の毒に思つて、三日四日を過ごしましたが、何處の土地の人ともはつきりしないのに、こんなことになつて自分も思ひがけない失敗をしたと思つて心配して居りますと云つた。左門はこれを聞いて、悲しい物語である。御主人の心配も尤もなことであるが、病に苦しんで居る人は知人もない旅の途中で、この病にかゝられたのは、殊に心苦しいことであらう。其の病の様子を見たいものだといふのを、主人はこれを止めて、瘟病は人を害するものと云はれてゐるから、家の子供等も絶對に彼處には行かせない、病室に立寄つて、身を害されるやうなことのないやうになさいと云つた。

左門笑うていふ、死生命あり、何の病か人に傳ふべき。これらは恐俗のことばにて、吾們（ともがら）はとらずとて、戸を推して入りつも其の人

○死生命あり――「論語の顔淵篇に、子夏曰、死生有命、富貴在天、とあるに本づく」人の生

を見るに、あるじが語りしに違はで、倫の人にはあらじを、病深きと見えて、面は黄に、肌黒く痩せ、古き衾のうへに悶え臥す。人なつかしげに左門を見て、湯ひとつ恵み給へといふ。左門ちかくよりて、士爰へ給ふことなかれ。必ず救ひまわらすべしとて、あるじと計りて、薬をえらみ、自方を案じ、みづから煮てあたへつも、猶粥をすゝめて病を看ること、同胞のごとく、まことに捨てがたきありさまなり。

通釋　左門が笑つていふには、人の生きるも死ぬも皆天命である、何の病が人に傳染しやうか、これらの話しは世間のつまらない人達の言葉で、我等はこんな説は用ひないといつて、病室の戸を押し開けて入りながら、その人を見ると、主人の話したことと異る所なくて、普通の人ではなく相當の身分ある人らしいが、病氣が重いと見えて、顔は黄色に、肌は黒く痩せて、古い夜具の上に患ひ苦しんで臥してゐる、人なつかし相に左門を見て、湯を一杯恵んで下さいといつた、左門は病床に近寄つて、お

死は皆天命にして、人力にて左右されずとの意。
○倫の人――通常の人。倫は類の義にて、普通の意に用ふ。
○悶え――病ひ苦しみて。
○自方を案じ――自身で投薬處方を考へる。
○看る――看病する。
○同胞――同母の兄弟姉妹。

武家よ御心配し給ふな、必ずお救ひ致しませうといつて、その家の主人と相談して、薬を選み、自分で處方を考へて、自ら薬を煮煎じて與へたり、猶粥をすゝめて看病をすることは、眞の兄弟のやうであつて、誠に感ずべき情景であつた。

かの武士、左門が愛憐の厚きに泪を流して、かくまで漂客を恵み給ふ。死すとも御心に報い奉らむといふ。左門諫めて、ちからなきことは、な聞えたまひそ。凡疫は日數あり。其の程をすぎぬれば誰命をあやまたず。吾日々に詣でてつかへまゐらすべしと、寛やかに約りつゝも、心をもちひて助けけるに、病漸愈じて心地清しくおぼえければ、あるじにも念比に詞をつくし、左門が陰徳をたふとみて、其の生業をも尋ね、己が身の上をも語りていふ。故出雲の國松江の郷に生長りて、赤穴宗右衛門といふものなるが、わづかに兵書の旨を窮めしによりて、富田の城主鹽治掃部介、吾を師としてもの學び

○漂客――行方を定めぬ旅人。本條にては行すりの旅人の意。
○な聞え云々――な…副詞にて、動詞の連用形の上に副ひ動作を禁止す。
○寛やかに――親切に。
○念比――「ねもころ」の音便。眞心を以て取扱ひ、又互ひに親しむ貌。
○陰徳――人に知られんことを求めずに行ひたる善事。
○兵書――軍學の書、支那にては古來孫子、呉子、司馬法、六韜、三略、尉繚子、太宗問對等を七書と云ふ。

○富田の城――出雲國にありしなり。
○鹽治掃部介――尼子經久始め六角貞賴の命を用ひすして富田城を攻めし故貞賴大に怒つて鹽治掃部介に命じて富田城を守らしむといふ。
○佐々木氏綱――富田城を治めし人にて後之を失ふ。
○尼子經久――雲州の人文明十八年鹽治氏を亡して富田城を復す、後隱岐、因幡伯耆を隨へ安藝、備後を呑食して尼子氏強大となる、天文十一年八十四にて卒す。
○山中鹿――山中入道の一類にて出雲の士族なり。
○大三十日――十二月三十日。
○不慮――突然、不意。
○守護代――守護職の代官、もと私に補せしが、

たまひしに、近江の佐々木氏綱に密の使にえらばれて、かの館にとどまるうち、前の城主尼子經久山中鹿をかたらひて、大三十日の夜、不慮に城を乘取しかば、掃部殿も討死ありしなり。もとより雲州は佐々木の持國にて、鹽治は守護代なれば、三澤、三刀屋を助けて、經久を亡ぼしたまへとすゝむれども、氏綱は外勇にして內怯たる思將なれば果さず、かへりて吾を國に逗む。故なき所に永く居らじと、己が身ひとつを竊みて國に還る路に、此の疫に罹りて、思ひかけずも師を勞はしむるは、身にあまりたる御恩にこそ。吾半世の命をもて、必ず報いたてまつらむ。左門いふ、見る所を忍びざるは人たるものゝ心なるべければ、厚き詞をさむるに故なし。猶逗りていたはり給へと、實ある詞を便にて日頭經るまゝに、物みな平生に遷くぞなりにける。

一國の政治を執るもの故守護より幕府に申告して命ぜられし官。

○三澤、三刀屋――出雲の豪族、三澤は三澤城主爲幸、三刀屋は彈正左右衛門爲虎。

○見る所を忍びざるは云々　見捨つるに堪へざる同情は人の本性なり、孟子に義を見てなさざるは勇なきなりとあり。

○なさむ――受入れる。

通釋　かの武士は左門の愛し憐む心の厚い事に涙を流して、かくまでも漂流の人間を恵み給ふお志は、死んでも忘れないでこのお心に返禮しませうと云つた。左門はこれを諫めて、元氣のないことは仰せられるな、凡て疫病には日數があつて、其の日數を過すと壽命を失ひません、私は毎日來て看病しませうと、眞實を盡めて約束をしながらも、心を用ひて看病して居ると、病勢も少し衰へて心地もよくなつたので、その家の主人にも鄭重に詞をつくして禮を云ひ、又左門の陰徳を尊みて、其の生業をも尋ねたり、自分の身の上の事をも語つて次の如く話した。

自分はもと出雲の國松江の村に生長したもので、赤穴宗右衛門といふ者であるが、少しばかり兵書の趣を研究し解したので、富田城の主塩治掃部介が私を先生として兵學を學ばれてゐたが、近江の佐々木氏綱の處へ密使に選ばれて使ひし、佐々木の館に逗つてゐる内に、富田の前の城主尼子經久が山中鹿を誘ひ仲間として、十二月の晦日の夜不意に塩治の城を乘り取つたので、掃部介殿も戰死せられたのである。元來出雲の國は佐々木の持國で、塩治はその守護代であるから、三澤とか三刀屋とかを助けて、經久を亡ぼされるやうにと佐々木に勸めたのであるが、氏綱は外面は勇氣があるが、内心は卑怯な愚將であるので、それを果たすこと

が出來ないで、却つて自分を佐々木の國に逗めた。自分はわけもない所には永く居まいと思つて、やつと自分の身だけで逃げ出して國に還る途中に、此の病氣にかゝつて、思ひがけずもあなたを煩はすのは、身にあまる御恩であります。私はこれから後の命を以てこの御恩に必ず報ひませうと云ふ。左門が云ふには、人が窮して居るのを見て堪へられないでこれに盡すのは、人たるものの心であるから、お禮の厚い詞は私が受け入れる譯のものではない。猶ほこの上も逗つて養生なさいと云ふ眞實ある詞を便りとして、日數が經る内に、赤穴の容態が平常に復して來た。

此の日頃左門は、よき友もとめたりとて、日夜交りて物語りするに、赤穴も諸子百家のこと、おろ〳〵語り出でて、問ひわきまふる心恩ならず。兵機のことわりは、をさ〳〵しく聞えければ、ひとつとして相ともにたがふ心もなく、かつ感で、かつよろこびて、終に兄弟の盟をなす。赤穴五歳長じたれば、伯氏たるべき禮義ををさめて、左門にむかひていふ。吾父母に離れまゐらせていとも久し。賢弟が

○日頃——日數の重なること。
○諸子百家——支那上代諸家の著はしたる書の類。漢書藝文志の顔注に、諸子百八十九家、言百家舉成數也。
○おろおろ——ほぼ、不十分。
○をさをさ——シカト誠らしく。

老母は卽て吾母なれば、あらたに拜みたてまつらむことを願ふ。老母あはれみてをさなき心を肯け給はむや。左門歡びに堪へず、母なる者常に我が孤獨を憂ふ。信ある言を告げなば、齡も延びなむにと作ひて家に歸る。老母よろこび迎へて、吾子不才にて學ぶ所時にあはず。靑雲の便りを失ふ。ねがふは捨てずして伯氏たる敎を施したまへ。赤穴拜していふ、大丈夫は義を重しとす。功名富貴はいふに足らず。吾いま母公の惠愛をかうむり、賢弟の敬を納むる、何の望かこれに過ぐべきと、よろこびうれしみつゝ、又日來をとゞまりける。

通釋　この間中左門はよい友を求め得たと云ふので、晝夜交つて話をすると、赤穴も亦諸子百家のことを、不十分ながら話し出して、問答するのに心も愚でなく、兵法の道理もしつかりしてゐて、何一つとしてお互に違ふ事がなく、互に感心し、喜びもして、終に兄弟の約束をした。赤穴が五

○相ともに云々――意見の相違がないこと
○伯氏――長男。兄弟の順序を伯、仲、叔、季と定めたるに因る。
○孤獨――孤は幼にして父なきもの、獨は老いて子なきもの。又ひとりぼつちにてたよりなきもの。
○不才――學才なきを云ふ。
○靑雲――高位高官に登るをいふ。
○靑雲の便――靑雲は高位高官に登るをいふ。便は機會。

つ年長である爲に、兄となる禮義を受け入れて、そして左門に向つて云ふには、自分は父母に離れ申してから非常に永いことになる。君の老母はやがて自分の母であるから、改めてお目にかゝりたいと思ふ、老母も哀れに思つてこの幼稚な心を受け入れて下さるだらうかと云つたので、左門は喜びに堪へないで、母は常に自分が孤獨であるのを心配して居る、眞實のある詞を告げたならば、母も喜んで、壽命も延びるであらうと、連れ立つて家に歸つた。老母は赤穴を喜んで迎へて、吾が子は學才も無くて、又學んだ學問は昨世に適はない、そして立身する便宜もない、願はくばお見捨なく兄たる教を授け給へといふと、赤穴幷禮していふには、立派な男は人の行ふべき道を重んずるもので、勳功、名聲、富貴といふやうなことは言ふに足らない。自分は今母君の慈愛を受け、又弟から兄としての尊敬を受けてゐる、これ以上の望があらうかといつて、喜びうれしがりつゝ、又日數を重ねて逗まつて居た。

昨日今日咲きぬると見し尾上の花も散りはてゝ、涼しき風による浪に、とはでもしるき夏の初になりぬ。赤穴、母子に向ひて、吾近江を遁れ來りしも、雲州の動靜を見むためなれば、一たび下向てや

○尾上　山の高き處、峰〻
○とはでも——訪はでも
○しるき——著るしき。

が て歸り來り、菽水の奴に御恩をかへしたてまつるべし。今のわかれを給へといふ。左門いふ、さあらば兄長いつの時にか歸り給ふべき。赤穴いふ、月日は逝き易し。遲くとも此の秋は過さじ。左門云ふ、秋はいつの日を定めて待つべきや。願ふは約し給へ。赤穴云ふ、重陽の佳節をもて歸り來る日とすべし。左門いふ、兄長必ず此の日をあやまりたまふな。一枝の菊花に薄酒を備へて待ち奉らむと、互に情をつくして赤穴は西に歸りけり。

通釋　昨日今日咲いたと思つた牽の花も散つて終つて、涼しい風に寄る浪を見ても、間はずとも著しき初夏の候となつた。赤穴は丈部母子に向つて、私が近江を通れて來たのも、出雲の國の樣子を見やうがためであるから、一度出雲へ下つて直ぐに歸つて來て、貧しくとも親に孝養を盡すものとなつてこの御恩をお返し奉るべし、何卒今しばらくの暇を給へといふに、左門がいふには、然らば兄君は何時頃歸つて來給ふか。赤穴は、月日は過ぎ易い。遲くとも今年の秋を過さぬうちに歸らふと。左門いふには、

○菽水の奴――菽は大豆にて菽を以て粥として常に之を啜り、且つ水を飲む意にて、貧にして善く親に孝ふるをいふ。禮記檀弓下篇に、子路曰、傷哉貧也、生無二以爲一レ養、死無二以爲一レ喪也、孔子曰、啜二菽飲一レ水、盡二其歡一斯之謂レ孝。」とあるに本づく。奴は下賤なる者の意。

○重陽の佳節――陰曆九月九日の異稱にて、九は陽の數で、月と日とが陽に九なる故にいふ。

秋のいつの日を決めて待てばよいか、願はくば約束をし給へ。赤穴は、九月九日の重陽の佳節の日を以て歸り來る日としやうと云ふ。左門は兄君きつと重陽の日を違へ給ふな、佳節に用ふる一枝の菊花に相應な酒を用意して待ち奉らうと、互に眞情を盡して赤穴は西の方へ歸つた。

あら玉の月日はやく經ゆきて、下枝の茶黄色づき、垣根の野ら菊艶やかに、九月にもなりぬ。九日はいつよりも蚤く起き出で、草の屋の席をはらひ、黄菊白菊二枝三枝小瓶に挿し、盞をかたぶけて酒飯の設をす。老母いふ、かの八雲たつ國は山陰のはてにありて、こゝには百里を隔つるときけば、けふとも定め難きに、其の來しを見て物すとも遲からじ。左門云ふ、赤穴は信ある武士なれば必ず約を誤らじ。其の人を見てあわたゞしからむは、思はむことの恥かしとて、美酒を沽ひ鮮魚を宰て厨に備ふ。

○あら玉――年、月、日、春等の枕詞。
○茶黄――秋圃長な實を結ぶ胡頽子科の樹物。
○盞をかたぶけて――貯蓄の金錢を悉皆出して盞は財布。
○八雲たつ國――出雲の國、八雲たつは出雲の枕詞。
○物すとも――用意をするとも。
○沽――酒を買ふ義。
○あざらけき――あたらしき魚の意。
○宰――肉を料理する義。

通釋　月日は早くも過ぎゆきて、下枝に實つた茱萸は色づき、垣根の野菊もあでやかに咲いて、もう九月にもなつた。九日の日には何時もよりは早く起き出して、小屋の室を掃除し、黄菊白菊の二枝三枝を小瓶に挿して、財布の底を拂つて酒食の設備をした。老母がいふには、彼の八雲たつ出雲の國は山陰道の果にあつて、此處からは百里の道を隔てゝ居ると聞いてゐるから、今日歸るとも決めにくいのに、赤穴が來たのを見て用意してゐても遅くはあるまい、といつた。左門は、赤穴は信ある武士であるから、きつと約束を間違へないであらう。其の來るのを見てあはたゞしい樣子をするのは、赤穴に自分の不信を思はれることで恥かしいと云つて、美酒を買ひ新しい魚を料理して爰所に用意をして置いた。

此の日や天晴れて千里に雲の立居もなく、草枕旅ゆく人の群々語り行くは、けふは、誰某がよき京入なる。此度の商物によき徳とるべき祥になむとて過ぐ。五十あまりの武士、廿餘りの同じ出立なる、日和はかばかりよかりしものを、明石より船もとめなば、この朝びらきに、牛窓の門の泊りは追ふべき。若き男は却物怯して、錢おほ

○京入――入洛。
○よき徳――徳は得にて利得。
○祥――しるし。前兆。
○朝びらき――朝港より船の漕ぎいづること。萬葉集卷三「世の中なにたとへむ朝びらき漕ぎにし船の跡なきごとし」。

く費やすことよといふに、殿の上らせ給ふ時、小豆島より室津のわたりし給ふに、なまからきめにあはせ給ふを、従に侍りしものゝ号りしを思へば、このほとりの渡りは必ず怯のべし。な悪みたまひそ。魚が橋の蒿麥ふるまひまうさむにと、いひなぐさめて行く。日とる男の腹だたしげに、此の死馬は眼をもはたけぬかと、荷物押しなほして追ひもて行く。午時もやゝかたぶきぬれど、待ちつる人は来らず。西に沈む日に、宿り急ぐ足のせはしげなるを見るにも、外の方のみまもられて心酔へるがごとし。

通釋　此の日は天が晴れて、千里の遠きまでも雲一つなく、旅行する人の群が語りながら行くのを聞くと、今日は何某がよい部入りの日になる、此の度の商賣にはよい利得をするめでたい前兆であらうなどといつて過ぎて行く。又五十歳位の武士と二十歳位の同じ出立である人たちが、話しながら行くには。日和はこんなによかつたのだから、明石から船を廻つ

○牛窓——備前國邑久郡牛窓の港、岡山市の東南約六里。
○即　かへつて。
○小豆島——讃岐にあり瀬戸内海中の一小島。
○室津——播磨國にあり。五泊の一。今の室津村。
○なまからきめ　なまなまのつらい目。なまは接頭語。
○な悪みたまひそ　左様に憎り給ふな。
○魚が橋——播磨國印南郡阿弥陀村にあり。
○「そばむぎ」——「そばむぎ」の古名。
○にたけぬ——聞けぬ。

たならば、この早朝の出船で牛窓の港で泊まることが出來たであらうにといふと、若い男は却つて怒いて、それでは陸を歩んだのは錢を多く費すことだらうといふと、殿様が京へお上りになる時に、小豆島から室津にお渡りになつたのに、非常につらい目にお遭ひになつたといふことを、お伴した人がいつて居たのを思ふと、この邊の海路は必ず恐ろしいことであらう。左様に憤り給ふな、その代りに魚が橋の蕎麥を馳走しようと、いひ慰めながら行くのもある。又馬の口とる馬子が腹立たしけに此の死馬は眼さへも開けぬかと、荷鞍を押しなほして追つて行くのもある。正午も大分過ぎ行くが、待つてゐる赤穴は來ない。西に日が沈むので、宿りを急いで行く人の足音の急がし相なるを見るにつけても、外の方ばかり注意して居て、心は酔つたやうに夢中である。

老母左門をよびて、人の心の秋にはあらずとも、菊の色こきはけふのみかは。歸り來る信だにあらば、空は時雨にうつりゆくとも、何をか怨むべき。入りて臥もして、又翌の日を待つべしとあるに、否み難く、母をすかして前に臥さしめ、もしやと戸の外に出でて見れ

○人の心は秋にはあらず——人の心は秋の空のやうに變らないでも。

○銀河——天の川のことなり。白帖に、天河曰二銀河一。

ば銀河影さえ〳〵に、氷輪我のみを照して淋しきに、軒守の犬の吠ゆる聲すみ渡り、浦波の音ぞこゝもとにたちくるやうなり。月の光も山の際に陰くなれば、今はとて戸を閉て一入らむとするに、只看るおぼろなる黒影の中に人ありて、風の隨々來るを。おやしと見れば、赤穴宗右衛門なり。

通釋　老母は左門を呼んで、人の心は秋の空の如く變り易くないとしても、菊花の色の濃いのは今日に限つたことではない、歸つて來る眞實の心さへあれば、空は時雨の雨に變つてゆくとしても、何を怨むことがあらうか、入つて臥でもして、又明日を待つがよいと云はれるので、これを拒絶することも出來ず、母をなだめすかして先に眠らせ、もしや來はしないかと戸の外に出て見ると、天の河の光りがきれ〳〵で、月は自分のみを照して淋しさうで、家の軒を守る犬が吠える聲も澄み渡り、浦をうつ波の音が足元までも打つて來るやうである。そうするうちに、月の光りも山の端にかくれて暗くなつたので、もうこれ迄であると思つて戸を閉ぢて入らうとすると、偶然に見えるぼんやりとした黒い影の中に人が居

○氷輪　月の異稱なり　蘇軾の詩に、夜半老僧呼、客起、雲峰缺處湧二氷輪一。

て、風の吹くまに〳〵來るのを不思議と思つて見て居ると、赤穴宗右衛門である。

躍りあがるこゝちして、小弟蚤くより待ちて今に至りぬる。盟たがはで來り給ふことのうれしさよ。いざ入らせ給へといふめれど、只點頭て物をもいはである。左門前にすゝみて、南の窓の下にむかへ、座につかしめ、兄長來り給ふことの遲かりしに、老母も待ちわびて、翌こそと臥所に入らせ給ふ。さまさせ參らせむといへるを、赤穴又頭を振りてとゞめつも、更に物をもいはでゐる。左門云ふ、既に夜を續ぎて來し給ふに、心も倦み足も勞れたまふべし。幸に一杯を酌みて歇息給へとて、酒を温め下物を列ねて侑むるに、赤穴袖をもて面を掩ひ、其の臭ひを嫌放るに似たり。左門云ふ、非臼の力はた歇すに足らざれども、己が心なり。いやしみ給ふ事なかれ。

○盛、つとに、にやし。

○點頭―頭を前へ揺かす。昔ふ意なぶすなり。

○下物（サカナ）菜（ナ）の義―酒を飲むとき、添へて食ふ食物。

○井臼―水を汲み、又は臼を挽きて、家事に勉むること。後漢書列傳に、「妻悍、不レ得レ有二膝客一、兒女皆常自操二井臼一。」と見えて自ら家政の勞に服する義。

○陽世―顯身（ウツシミ）の轉語、生涯は當字。世に生きてある身、

赤穴猶答もせで、長嘘をつきつゝ、しばししていふ。賢弟が信ある応答を、などいなむべきことわりやあらむ。欺くに詞なければ、質をもて告ぐるなり。必すしもなおやしみ給ひそ。吾は陽世の人にあらず。きたなき霊のかりに形を見えつるなり。

通釋　左門は嬉しさに躍り上る心地がして、私は早くから待つて今迄になつた、約束を違へないで歸り來られたことの嬉しさよ、さあ這入り給へと云ふけれども、只うなづく丈で物をも云はないでゐる。左門は前に進んで、南の窓の下に迎へて、座につかせ、兄君の來られることが遲かつたので、老母も待ちくたぶれて、明日は遣へるであらうと臥所に入られた、お起ししませうと云ふのを、赤穴は又頭を振つて止めながらも、少しも物を云はないでゐる。左門が云ふには、之まで日に夜をついで來られたので、心も倦み足も勞れられただらう、何卒一杯の酒を呑んでやすみ給へと云つて、酒を温め肴を列べて進めると、赤穴は袖で顔を掩つてその臭氣を嫌つて避けるやうである。左門が云ふには、貧しい生活をしてゐる自分が自身で仕度したのだから、これでは歡待するに足らないが、白

死にたる身のきたなきに對して美しとほむるより起りて「世」の枕詞とす。後に轉じて「現世」の意とす。

分の心であるから、卑み給ふな。赤穴はやはり答もしないで、長嘆をしながち、暫くして云ふには、弟君の誠心ある應對をどうして拒絶する道理があらうか、欺く詞もないから、事實を話すのである、必らず怪しみ給ふな、自分は最早現世の者でなく、けがらはしい霊魂が假りに形を表はして居るのである。

左門大に驚きて、兄長何故にこのあやしきこと語り出で給ふや。更に夢ともおぼえ待らず。赤穴いふ、賢弟とわかれて國にくだりしが、國人大かた經久が勢ひに服て、鹽治の恩を顧みるものなし。從弟なる赤穴丹治、富田の城にあるを訪ひしに、利害を說きて吾を經久に見えしむ。假に其の詞を容て、つら〳〵經久がなす所を見るに、萬夫の雄人に勝て、よく士卒を習練すといへども、智を用ふるに狐疑の心おほくして、腹心爪牙の家の子なし。永く居りて益なきを思ひて、賢弟が菊花の約ある事を語りて去らむとすれば、經久怨める

○たならす―手馴らすに同じ。

○狐疑―物を疑ひ決定せぬを云ふ。狐は疑ひ深き獸なりとて云ふ。

色ありて、丹治に令し、吾を大城の外にはなたずして、遂に今日にいたらしむ。此の約に違ふものならば、賢弟吾を何ものとかせむと、ひたすら思ひ沈めども通るゝに方なし。いにしへの人のいふ。人一日に千里をゆくことあたはず。魂よく一日に千里をもゆくと。此のことわりを思ひ出でて、みづから及に伏し、今夜陰風に乗りて、はるゞ〳〵来り、菊花の約に赴く。此の心を憐み給へといひをはりて、泪わき出づるがごとし。今は永きわかれなり。只母公によくつかへ給へとて、座を立つと見しが、かき消えて見えずなりにける。

通釋　左門は大いに驚いて、兄君は何故こんな不思議な事を話し給ふのか、一向に夢とも思はれない。赤穴がいふには、君と別れて出雲の岡に下つた處が、國の人は大抵經久の勢ひに從がつて、鹽治の恩を顧みるものはない、自分の從弟の赤穴丹治が富田の城に居るのを尋ねて行つた處が、丹治は利害を說いて自分を經久に面會させた、假りにその詞をきゝ入れ

○腹心爪牙　腹心に心を同じくし德を同じくするもの。詩經に、趙武大、公侯腹心。趙武爪牙に比敵がその身を衛るものなり、因つて國家の輔弼の臣に喩ふ。詩經に、斬父、予王之爪牙。

○方――方法、手段。

て、つく〳〵経久の日常の行爲を見ると、多くの人に勝れた勇氣があつて、よく士卒を手馴らしては居るが、智を用ふる場合には疑ひの心が多くて、經久に心服してその爪となり、牙となつて働かうとする家來はない。永く逗まつて居ても益なしと思つて、君と菊花の約束がある事を話して去らうとすると、經久は怨んだ様子で、丹治に命令して自分を城の外に出さないやうにして、遂に今日に至つた。此の約束を違へたならば君は自分を何者と思ふかも知れないと思つて、專ら考へ沈んだけれども逃れる方法がない、古の人が云ふには、人は一日に千里の道を行く事は出來ないが、魂は一日に千里をも行く事が出來ると、この道理を思ひ出して、自殺して、今夜陰風に乘じてはる〳〵と來て、菊花の約束を果たすのである。此の心を憐れみ給へと云つて、涙は湧き出るやうである。そしてもう永久の別である、只母君によく仕へ給へと云つて座を立つたかと思つたが、たちまち姿はかき消えて見えなくなつた。

左門慌忙止めむとすれば、陰風に眼くらみて行方をしらず。傍向につまづき倒れたるまゝに、聲を放ちて大に哭く。老母目さめ、驚き立ちて、左門がある所を見れば、座上に酒瓶魚盛りたる皿共あま

た列べたるが中に臥し倒れたるを、忙がはしく扶け起して、いかにと問へども、只聲を呑みて泣く泣くさらに言なし。老母問うていふ、伯氏赤穴が約に違ふを怨むさならば、明日なむもし來るには言なからむものを、汝かくまでをさなくも思なるかと、強く諫むるに　左門漸答へていふ、兄長今夜菊花の約に特來る。酒殽をもて迎ふるに再三辭み給うて云ふ、しかくのやうにて約に背くがゆゑに、自刀に伏して、陰魂百里を來るといひて見えすなりぬ。それ故にこそは母の眠をも驚かし奉れ。只々赦し給へと、潸然と哭き入るを、老母いふ、牢裏に繋がるゝ人は夢にも赦さるゝを見、渇するものは夢にも漿水を飲むといへり。汝も亦さる類にやあらむ。よく心を靜むべしとあれども、左門頭を振りて、まことに夢の正なきにあらず。兄長はこゝもとにこそありつれと、又聲を放ちて哭き倒る。老母も

○なむ　助詞、物事を示す意にて、「ぞ」よりは弱し。

○酒殽　殽はさかな。すべて穀物以外の食物。

○しかくのやう　赤穴宮田の城にとどめられたるを指す。

○陰魂——亡魂に同じ。

○漿水——飲料水。

○夢の正なきにあらず——夢のやうに不正確なものではない。

今は疑はず。相叫びて其の夜は哭きあかしぬ。

通釋　左門があわてゝ止めやうとすると、陰風に眼がくらんで、赤穴の行方も分らない。俯向につまづいて倒れたまゝで、聲を放つて大いに泣いた。その聲に老母は眼がさめて、驚いて起き出て左門の居る所を見ると、座席の上に酒瓶や魚を盛つた皿等が多くならべてある中に、倒れ臥して居るので、忙はしく扶け起して、どうしたのかと問うても、只聲を呑んで泣くだけで、少しも物を言はない。老母が左門に問ふには、兄君の赤穴が約束を違へたことを怨むのであれば、もしも明日にでも來たならば云ふべき詞がないであらう、汝はこれほどまで心幼く愚かなのであるかと、強く諫めると、左門かやうやく答へて云ふには、兄君は今夜菊花の約束を果たすためにわざ〳〵來られた、酒殽を以てお迎へすると、再三斷り給ふていふには、かやう〳〵の次第で約束に背くから、自刎して、魂が百里の遠い此所に來たといつて見えなくなつた、それだからこそ、母君の眠りを覺した、何卒許し給へと云つて、さめ〴〵と泣き入るのを、老母がいふに、牢屋に繋がれて居る人は夢にさへも赦免されるのを見　渇して居るものは夢にでも水を飲むといふ言葉がある、汝も亦それの類で、會ひたいと思ふからそんなことがあつたのであらう、よく心を落ち付け

よ、といふけれども、左門は頭を振つて、誠に夢のやうな不正確なものではない、兄君が此所に來たのは誠であつたと、又聲をあげて泣き倒れた。老母ももう疑ひはなくなつて、共に共の夜は泣きあかした。

明る日左門母を拜していふ。吾幼なきより身を翰墨に托るといへども、國に忠義の聞えなく、家に孝信をつくすことあたはず。徒に天地のあひだに生るゝのみ、兄長赤穴は一生を信義のために終る。小弟けふより出雲に下り、せめては骨を藏めて信を全うせむ。公尊體を保ちたまうて、しばらくの暇を給ふべし。老母云ふ、吾兒かしこに去るとも、はやく歸りて老が心を休めよ。永く逗りてけふをひさしき日となすことなかれ。左門いふ、生は浮きたる漚の如く、旦に夕に定めがたくとも、やがて歸りまゐるべしとて、泪を振うて家を出で、佐用氏にゆきて老母の介抱を苦にあつらへ、出雲の國に

○翰墨――筆墨といふに同じ。翰は支那上古雉の赤羽を筆としよりいふ。轉じて文學の義。
○母なき子云々――長者にものを云ふ時禮を正すを云ふ。
○けふをひさしき云々――今日の別れを永久の別れとするな。
○生は浮きたる漚――法華經方便品に人生泡沫如露夢幻。
○あつらへ――しかせよと依賴をする。
○飢ゑて云々――目的に熱中して、衣食のことなどが念頭に起らない義。

まかる路に、飢ゑて食を思はず、寒きに衣を忘れてまどろめば、夢にも哭きあかしつゝ、十日を經て富田の大城（おほぎ）にいたりぬ。

通釋　翌日左門は老母を拜していふには、自分は幼少の時から身を學問に委ねては居るものゝ、國に於て忠義をしたといふ評判もなく、家にあつては孝行を盡すといふことも出來ないで、たゞ役にも立たずに天地の間に生れたばかりである、それに引かへ兄君の赤穴は一生を信義の道を盡す爲に終つた。自分は今日から出雲に下つて、せめての事には兄の骨を葬つて義兄弟の眞心を報さうと思ふ、母上は御體を大切にせられて、しばらくの間の暇を給はりたし、と云ふ。老母が云ふには、汝出雲に行くとも、早く歸つて來て老人の心に安心をさせよ、永く逗つて今日の別を永久の別れとなるやうなことはして呉れるな。左門が云ふには、人生は水に浮んだ泡のやうなものであつて、朝に、夕に、何時生を終るか定め難いものであつても、直ちに歸り參るべしと云つて淚を拂つて家を出て、佐用氏の家に行つて老母の世話を丁寧に依頼して、出雲の國に行く路すがらも、飢ゑても食はうと思はず、寒くても衣を着ることも忘れて晝し眠れば、夢にも泣き明かしながら、十日を經て富田城に着いた。

先づ赤穴丹治が宅にゆきて、姓名をもていひ入るに、丹治迎へ請じて、翼ある物の告ぐるにあらで、いかでしらせ給ふべきと訶なしとて頻りに問ひ尋む。左門いふ、士たる者は富貴淫慾の事、ともに論ずべからず。只信義をもて重しとす。伯氏宗右衛門一旦の約をおもんじ、むなしき魂の百里を來るに報いすとて、日夜を遂うてこゝに下りしなり。吾學ぶ所について士に尋ねまるらすべき旨あり。ねがふは明かに答へ給へかし。昔魏の公叔座病の牀にふしたるに、魏王みづから詣でて、手をとりつも告ぐるは、若し諱むべからずのことあらば、誰をして社稷を守らしめむや。吾が爲に教をのこせとあるに、叔座いふ、商鞅年少しといへども奇才あり。王若しこの人を用ひ給にすば、これを殺しても境を出すことなかれ、他の國にゆかしめば、必ずも後の禍となるべしと吾に教へて、又商鞅を私にま

○翼あるもの云々——雁の便にあらずしてといふ意、匈奴が、支那前漢の蘇武を使して拘はれし時、雁の脚に書狀を結び、通信したる故事に因る。

○公叔座——史記商君傳にあり。

○諱む云々——人の死するをいふ、死は人の諱み避くる可らざることなる故なり。史記商君傳、公叔病、如有レ不レ可レ諱、將奈二社稷一何。

○社稷——國家と云ふに同じ。社は土の神、稷は穀の神にて、國は土穀に資りて以て人を養ふ故に、古對をつくれば列國必ず之を祀る。

ねき、吾汝をすゝむれども王許さゞる色あれば、用ひずばかへりて汝を害し給へと教ふ。これ君を先にし臣を後にするなり。汝速く他の國に去りて害を免るべしといへり。この事士と宗右衛門に比べてはいかに。丹治只頭を低れて言なし。

通釋　先つ赤穴丹治の家に行つて姓名を告げて刺を通ずると、丹治が迎へ入れて、翼のある鳥が告げたのでもないのに、どうして御存知になつたか、そんな理由がないと云つて頻りに諄ねた。左門が云ふには、武士たるものは富貴消息の事等は共に云ふべきではない、只信義を以て重大なものとする、兄宗右衛門は一度の約束を重んじて、寂しい魂が百里の遠方に来たのに報いん爲めに、夜に日をついでこゝに下つて来たのである。自分が學んで居る所を以て貴君に諄ねたいことがある、どうか明らかに答へ給へ。昔魏の公叔座が病氣の床に臥したので、魏の王が自ら公叔座の許に行つて子を執りながら告げるには、若しもおん身に萬一の事があれば、誰れに國を守らせようか、自分の爲めに教へて呉れといはれると、叔座がいふには、商鞅は年は若いが才が勝れて居る、あなたは若し商鞅

を用ひなさらずば、これを殺しても國境から外へ出し給ふな、他の國に行かせると、必ず後に災禍となるだらうと丁寧に教へて、又商鞅をこつそりと招いて、吾は汝を王に用ひ給へとすゝめたが、王は用ひない様子があつたので、お用ひにならないならば却つて汝を殺し給へと教へた、これは君が大切故先にして臣を後にしたのだ、汝は早く他國に去つて害を免れよといつた。この故事をあなたと宗右衛門とに比較するとどうだらうか。丹治は頭を垂れて詞もない。

左門座をすゝみて、伯氏宗右衛門鹽治が偕交を思ひて、尼子に仕へざるは義士なり。士は舊主の鹽治を捨て尼子に降りしは士たる義なし。伯氏は菊花の契を重んじ、命を捨て百里を來りしは信ある極なり。士は今尼子に媚びて骨肉の人を苦しめ、此の横死をなさしむるは友とする信なし。經久強ひて止め給ふとも、偕しき交りを思はゞ、私に商鞅叔座が信をつくすべきに、只栄利にのみ走りて、士家の風なきは即ち尼子の家風なるべし。さるから、兄長何故この

○義士——高節の人。

○骨肉——同じ血族のもの。骨と肉との密接な關係ありて、離れがたきに因りて云ふ。

○横死——殺害又は災害などにて死ぬること。非命の死。

○士家——武士たるもの。

國に足をとゞむべき。吾今信義を重んじて、態々こゝに來る。汝は又不義のために汚名を遺せとて、いひもをはらず拔打に切り附くれば、一刀にてそこに倒る。家僮ども立騒ぐ間に、はやく逃れ出でて跡なし。尼子經久このよしを傳へ聞きて、兄弟信義の篤きをあはれみ、左門が跡をも強ひて追はせざるとなり。吝輕薄の人と交は結ぶべからずとなむ。

通釋　左門は座を進めて、兄宗右衛門が鹽治氏との昔の交りを思つて、尼子に仕へないのは義士である。あなたは舊主人の鹽治を捨てゝ尼子に降つたのは士としての義がない。兄は菊花の約束を重んじ、命を捨てゝ百里の遠方に來たのは誠のある極である。あなたは今尼子に媚びへつらつて血族の人を苦しめ、この横死をさせたのは友とする誠がない、たとひ經久が強ひて止められても、宗右衛門との久しい交りを思つたならば、私に商鞅と叔座との如き誠心を盡して、宗右衛門を逃がすべき筈であるのに、只名譽利益にのみ走つて、武士としての風のないのは、これが尼子

○家風　その家の風儀。
○拔打――刀を拔くや否や、切りつくること。
○家僮――家の子に同じ、家臣。
○吝――吁に同じ。なげく。又は吝嗇、吝欲とし遣れ用ふる。

の家風なのであらう。それであるから兄が何故この國に逗まつてゐやうか、又自分は今信義を重んじて態々來た、汝は又人の道にはづれた爲めに悪名を殘せといひ終らないうちに拔打に切りつけると、丹治は一刀の下に倒れた。一家のものが立ち騒いでゐる間に、早く逃け出してあとかたもなかつた。尼子經久はこの次第を傳へ聞いて、宗右衛門等兄弟の信義の篤いのを不憫に思つて、左門の跡を强ひて追はさうとしなかつたといふことである。あゝ心の薄い人との交りは結んではならない。

巻之二

淺茅が原

下總の國葛飾郡眞間の郷に、勝四郎といふ男ありけり。祖父より宿しくこゝに住み、田畠あまた主づきて、家豊に暮しけるが、生長て物にかゝはらぬ性より、農作をうたてきものに厭ひけるまゝに、はた家貧しくなりにけり。さるほどに親族おほくにも疎んぜられけるを、口惜しきことに思ひしみて、いかにもして家を興しなむものをと右右にはかりける。其の頃雀部の曾次といふ人、足利染の絹を交易するために、年々京よりくだりけるが、此の郷に氏族のありけるを屢々來訪ひしかば、かねてより親しかりけるまゝに、商人

○主づきて——持主即ち領主となつて。
○うたてき物——非常にいとはしき物。
○はた——副詞「將」にて又次第にの意。
○思ひしみて——思ひ染みて。
○足利染の絹　下野國足利産の染絹、古來有名なり。
○交易——互ひに品と品とを替へて、商ひすること。

○まかる――退さ去るの我(参るの反對)より轉じて往來すの敬語となり去、來、共にいふ。
○たのもしき　侍とするべく見ゆる。
○絹素　白絹。
○催しける――始まらむとする意にて、本條にては待設けてゐた。

となりて京にまうのぼらむことを頼みしに、雀部いとやすく肯がひて、いつの頃はまかるべしときこえける。他がたのもしきをよろこびて、殘る田をも販つくして金に代へ、絹素あまた買ひ積みて、京にゆく日を催しける。

通釋　下總の國葛飾郡眞間の里に、勝四郎といふ男があつた。祖父から久しい間此の地に住んで、田畠を多く持つて家が豊に暮して居たが、勝四郎は生長して物に頓着しない性質であるから、農業を嫌なものに思つて嫌つて居たから、又次第に家が貧しくなつた。さういふ狀態であるから、親族の多くのものにも疎縁にされて居るのを、殘念なことに思ひ込んでどうにかして家を興したいものだと、いろ〳〵考へて居た。其の頃雀部の曾次といふ人が、足利染の絹を取引する爲めに、毎年都から下つて來たが、此の眞間の里に親族があるのを、度々訪ねて來たので、前々から勝四郎と親しくして居たから、この曾次に、商人になつて都に登りたいと云ふことを頼んだ處が、雀部は早速承知して、何日頃には都へ參るといふことを話した。勝四郎は曾次が恃みになるのを喜んで、殘つてゐる

田をも賣つて仕舞つて金に代へて、白絹をたくさん買ひ積んで、都に行く日を待設けて居た。

勝四郎が妻宮木なるものは、人の目とむるばかりの容に、心ばへも思ならずありけり。此度勝四郎が、商物買ひて京にゆくといふをうたてき事に思ひ、言を盡して諫むれども、常の心のはやりたるにせむ方なく、梓弓末のたづきの心ぼそきにも、かひ〳〵しく調らへて、其の夜はさり難き別をかたり、かくては、たのみなき女心の、野にも山にも惑ふばかり、物うきかぎりに侍り。朝に夕にわすれたまはで、遠く歸りたまへ。命だにとは思ふものゝ、明日をたのまれぬ世のことわりは、武き御心にもあはれみたまへといふに、いかで浮木に乘りつも、知らぬ國に長居せむ。葛のうら葉のかへるは此秋なるべし。心強く待ち給へといひなぐさめて夜も明けぬるに、鳥が

○容　容貌。
○心ばへ　心もち。氣だて
○うたてき――一方ならず心配（嫉な）こと。
○梓弓　末の枕詞。弓の名どころにより一もと「すゑ」「つる」にかけていふ。萬葉集十二なし梓弓末のたづきは知らねども心は君によりにしものを」
○末のたづき　將來の生活方法。
○心ぼそき　たのみすくなく思はれて、淋しい。
○かひ〳〵しく――こまめ〳〵しく心丈夫に。
○物うきかぎり――之以上のや憂さはないとの意。

○命だにと思ふ云々――命さへあれば又あふこともし出來るものの。
○浮木云々――知らぬ國に流浪する喩。
○葛のうら葉――かへるの序詞。
○鳥が啼――東の枕詞。

啼く東を立ち出でて京の方へ急ぎけり。

通釋　勝四郎の妻の宮木といふものは、人の目を引く程の美貌で、氣だても愚ではなかつた。今度勝四郎が商品を買つて都に行くといふのを一方ならず心配し嫉なことに思つて、詞のあらん限りを盡して諫めたが、勝四郎は平常にまして心がはやつてゐるのであるから、一向聞入れないので仕方もなく、末々の生活の方法の心配な中にも、まめ〳〵しく仕度をして、其の夜は別れにくい別れを告げ、こんな風にして、たよりのない女心であるから、野にも山にも迷ふばかりで、之以上つらいことはない。どうか朝も夕も妾をお忘れなく、早く歸り給へ、命さへあれば又會へるとは思ふけれども、人の命は明日の日でさへもたのみにならない世の習はしであるから、男の勇ましい御心にもあはれと思ひ給へといふと、勝四郎は、どうして浮いた木に乘つたやうにして、知らない國に長居をしようか、歸るのは此の秋であらう。心強く思つて待ち給へといひ慰めて夜も明けたので、東國を立ち出でて都の方へと急いだ。

此の年享德の夏、鎌倉の御所成氏朝臣、管領の上杉と御中放て、

館兵火に跡なく滅びければ、御所は總州の御味方へ落ちさせたまふより、隅の東忽に亂れて、心々の世の中となりし程に、老いたるは山に逃げ匿れ、弱きは軍民にもよほされ、けふは此所を焼き拂ふ、明日は敵のよせ來るぞと、女わらべ等は東西に逃げ惑ひて泣き悲しむ。勝四郎が妻なるものも、いづちへも遁れむものをと思ひしかどこの秋を待てと聞えし夫の言を頼みつゝも、安からぬ心に日を數へて暮しける。秋にもなりしかど、風の便りもあらねば、世とともに憑みなき人心かなと、恨みかなしみおもひくづをれて、

身のうさは、人しも告げじ。あふ坂の、

夕づけ鳥よ。秋も暮れぬと。

かくよめれども、國あまた隔てぬれば、いひ送るべき傳もなし。

○享徳――百一代後花園天皇の御宇の年號。
○御所――天皇、上皇、三后等の御座所をいふ、後將軍家等にも僭稱するやうになれり。
○成氏――鎌倉管領持氏の第四子。
○管領――關東管領の略にて、室町幕府の職名にて、關東に關する軍國の庶政を總攬する職なり。下に執權あり。持氏の時より京都の將軍に疑して管領を公方又は御所と云ひ、執權を管領と云ふ。
○心々の世云々――思ひ思ひに世の中を勝手に治めるとの意。
○もよほす――催促する意。
○女わらべ――女、子供。
○いづち――何處。
○風の便――うはさ、風聞。
○くづをれて――心の屈する事。
○うさ――憂さ（うれひ）

○夕づけ鳥――鶏の異名。夕づけ鳥は當字にて、正しくは木綿着鶏と書く。古代天下戦乱の時、四境祭といつて朝廷より鶏に木綿（ユフ）を着けて四方の関に祭られしより、轉じて鶏の異名となる。

通釋　此の年享徳年間の夏に、鎌倉の御所成氏朝臣と管領の上杉とが不和になつて、成氏朝臣の館は兵火にかゝつて跡形もなく滅びたので、御所は總州の味方のもの、方へ遁けられたので、關東は忽ちの間に亂れて、世の中は人達が思ひ〳〵の政治が行はれるやうになつたので、老人は山に逃け籠れ、年若いものは軍民に召出され、今日は此所を焼き拂ふ、明日は敵がよせて來るぞといふので、女や童兒たちは東西に遁け迷うて泣き悲しんで居る。勝四郎の妻である宮木も、何處へでも遁れようと思つたけれども、この秋を待つて居れと言つた夫の詞を恃みとして。不安心な日を數へ乍ら暮して居た。秋にもなつたけれども、勝四郎からは風の便りさへもないから、うつり變る世の中と同じやうに人の心も恃みにならないものだと、思ひ悲しみ考へくずれて、

自身のつらいことは人に告げることも出來ないが、逢坂といふ西京に近いなつかしい坂に住む鶏よ、秋も暮れたと夫に告げてほしいものだ。

と、かう詠んだけれども、國を多く隔てゝ居ること故、云ひ送る方法もない。

世の中騒がしきにつれて、人の心も恐しくなりにたり。適間とぶらふ人も宮木がかたちの愛たきを見ては、さまざまにすかしいざなへども、三貞の賢き操を守りてつらくもてなし、後は戸を閉てゝ見えざりけり。一人の婢女も去りて、すこしの貯もむなしく、其の年も暮れぬ。年改まりぬれども猶をさまらず。あまさへ去年の秋、京家の下知として、美濃の國郡上の主、東の下野守常綠に御旗を給びて、下野の領所にくだり、氏族千葉の賀胤と誅りて攻むるにより、御所方も固く守りて防ぎ戦ひける間に、いつ果つべきとも見えず。野伏等はこゝかしこに寨をかまへ、火を放ちて財を奪ふ。八州すべて安き所もなく、淺ましき世の費なりけり。

通釋　世の中が騒がしくなるのにつれて、人の心も恐しくなつて來た。たまたま訪ねて來る人があつても、その人達は宮木の容貌の愛らしいのを見

○すかしいざなふ　―欺き誘ふ。

○三貞の賢き操　―女の固く志を守りて變へぬ事をいふ。唐陽國志に永初中漢中羌寇、虐及三川都。有二郡妙所妻義、王元慎妻姫、趙叔台妻延等一。執二共妾之都一。賊曰二守二節之婦一。遺二亂兵追一匹三貞一。遺二亂兵追一匹憶見二拘係一。三人同時。自沈二於四池水一而死。

○京家　京都室町幕府。

○下知　―命令。

○野伏　―野武士にて、上野なき烏合の兵の、山野などにさすらふ者。

○淺ましき　―事の以外なるに驚く語。

ては、いろ〳〵に欺き誘ふけれども、妻たる貞操を守つて無情にあしらつて、その後は戸を閉めて人にも會はない、一人の下女も此の家を去つて少しの貯蓄もなくなつて、其の年も暮れた。年は改まつたが兵亂は猶をさまらない。その上に去年の秋に京都室町幕府の命令と云ふので、美濃の國郡上の城主、東の下野守常綠が征討の御旗を給はりて、下野の領地に下つて、一族の千葉實胤と謀つて關東を攻めたので、御所方も固く守つて防戰したから、戰爭は何時終るとも分らない。野武士等はこゝやかしこにとりでを設けて、火を放つては人の財産を奪ひとる、こんな樣子で關東八ヶ國には安心して居られる所もなく、あきれ果てた時世の無駄事であつた。

勝四郎は雀部に從ひて京にゆき、絹ども殘りなく交易せしほどに、當時都は華美を好む節なれば、よき德とりて東に歸る用意をなすに、今度上杉の兵鎌倉の御所を陷し、尙ほ御跡を慕うて攻め討てば、古郷の邊は干戈みち〳〵て、涿鹿の岐となりしよしをいひはやす。まのあたりなるさへ僞おほき世說なるを、ましてしら雲の八重

○干戈――支那上代戰時に用ひし干（タテ）、戈（ホコ）にて、後武器の總名となり、又戰爭をも云ふやうになれり。

○涿鹿――支那太古黃帝が蚩尤を誅したる山の名、今の直隸涿鹿縣東南といふ。本條は戰場の意。

○まのあたり云々――眼の前のことさへの意。

に隔たりし國なれば、心も心ならず、八月の始め京をたち出でて、岐曾の眞坂を一暮しに踰えけるに、落草ども道を塞へて、行李も殘りなく奪はれしが上に、人のかたるをきけば、是より東の方は所々に新關を据ゑて、旅客の往來をだに宥さゞるよし。さては消息をすべきたづきもなし。家も兵火にや亡びなむ、妻も世に生きてあらじ、しからば古郷とても鬼のすむ所なりとて、こゝより又京に引きかへすに、近江の國に入りて、にはかにこゝちあしく、熱き病を憂ふ。

通釋　勝四郎は雀部に從つて京都に行き、絹などを殘らず賣つた處が、當京都は華美を好む時であつたから、よい利益を得て關東に歸る用意をして居ると、今度上杉の軍が鎌倉の御所を陷れて、猶その御跡を追うて攻め討つたので、故郷の邊は武器が滿ちて、全く戰場となつたといふことを人々が云ひ囃して居る。眼の前のことでさへ僞の多い世間沙汰であるのに、それにまして白雲の八重も隔てゝゐる遠國のことであるから、心配で氣が氣でなく、八月の初めに京都を立ち出でて、木曾の眞坂を日が暮

○心も心ならず——氣が氣でない。
○行李——行李は旅行に携ふる荷物。今は別に竹又は柳にて造りし旅行用具あり。
○熱き病——熱病。

れたのに越すと、盜人どもが道を塞いで、荷物も全部奪はれた上に、人の話しを聞くと、これから東の方は所々に新しい關所を設けて、旅人の往來でさへも許さないと云ふことで、それでは便りをする方法もない。家も兵火に亡ぼされたであらう、妻も世に生きてはゐまい、さうすると故郷だといつても鬼の住む所だといふので、こゝから又都に引きかへすと、近江の國に入つて、急に心持が惡くなつて熱病に罹つた。

武佐といふ所に、兒玉嘉兵衛とて富貴の人あり。これは雀部が妻の產所なりければ若にたのみけるに、此の人見捨てずしていたはりつも、醫を迎へて藥の事專らなりし。やゝこゝち清しくなりぬれば、篤き恩をかたじけなうす。されど歩む事はえだはかゞ〳〵しからねば、今年は思ひがけずも、こゝに春を迎ふるに、いつのほとか此の里にも友を求めて、揉ざるに直き志を賞せられて、兒玉をはじめ誰々も賴もしく交りけり。此の後は京に出でて雀部を訪ひ、又は

○產所——生れたる家。牛家。實家。
○篤き恩云々——篤き恩に對して感謝の意を表はす。
○はかばかし云々——しつかり歩ゆめないとの意。
○揉ざるに云々——荀子勸學篇、蓬生麻中不扶自直の文によりて云ふ。天性直なるを云ふなり。
○寛正二年——百一代後花園天皇の御宇の年號。

近江に歸りて兒玉に身をよせ、七とせがほどは夢のごとくに過しぬ。寛正二年畿内河内の國に、畠山が同根の爭果さゝれば、京ちかくも騒がしきに、春の頃より瘟疫さかんに行はれて、屍は衢に豐み、人の心も今や一劫の盡くるならむと、はかなきかぎりを悲しみける。勝四郎熟思ふに、かく落魄てなす事もなき身の、何をたのみとて遠き國に逗り、由緣なき人の惠をうけて、いつまで生くべき命なるぞ。古郷に捨てし人の消息をだに知らで、荒草おひぬる野邊に、長々しき年月をすごしけるは、信なき己が心なりける物を、たとへ泉下の人となりて、ありつる世にはあらずとも、其の蹤をもとめて墳をも築べけれと、人々に志を告げて、五月雨のはれ間に手をわかちて、十日あまりを經て古郷にかへりつきぬ。

○同根――兄弟の異稱。魏の陳思王の七步之詩に本づく、煮レ豆持作レ羹。漉レ菽以爲レ汁。萁在二釜底一然。豆在二釜中一泣。本是同根生。相煎何太急。

○一劫――劫は梵語、人時分又は分別時節と譯す。人壽八万四千歳より百歳を經ることに一歳づつ減じ、以て十歳に至り、更に百歳を經ることに、一歳づつ增し以つて之の八萬四千歳に腹するを一小劫、小劫の二十倍を一中劫、中劫の四倍を一大劫とする説りがたい長き時間を云ふ。

○瘟疫――流行病。

○落魄――零落に同じ、魄は音「タク」訛と同義又史記鄒氏の注には、「ハク」とあり。元の地位を離れて苦しむ義。

○由緣――ゆかり。

○萱草――毛詩の傳に、萱草令二人忘一レ憂とあり。本條にては故郷を忘るゝといふ意にとりてかけり。

○泉下――黄泉のした。よみぢ。

○ありつる世　妻の生きて居た昔の世。

通釋　武佐といふ所に兒玉嘉兵衛といつて富貴の人がある。この人は雀部の妻の生家であるので丁寧に頼むと、此の人は勝四郎を見捨てないで勞はつて、醫者を迎へて藥の事を一心にしてくれた。稍々心持が快方に向つたので、手厚い恩を感謝したけれども、歩む事はまた充分でないので、今年は思ひがけなくも、此所で年を越すと、何時の間にか此の里にも友人を求め得て、勝四郎の生來正直な心を人に賞されて、兒玉を始めとして誰れも〳〵親しく交つた。此の後は京都に出て雀部を訪れ、又は近江に歸つて兒玉の家に身を寄せなどして、七年程は夢のやうに過した。寛正二年に畿内河内の國での畠山氏兄弟の爭ひが果てないので、京都に近い邊も騒がしい上に、春の頃から流行病が盛に流行して、民は巷に積み重なつてゐて、人の心も今こそ人の世も盡きるのであらうと思はれて、無常の極みを悲しんだ。勝四郎はよく〳〵思ふに、このやうに安落して爲すべき事もない身を、何を恃みとして遠國に逗まつて、ゆかりもない人の惠をうけて、何時まで生きてゐる命か。故郷においた妻の様子をも知らないで、忘れ草が生えてゐるやうに、故郷を忘れ果てゝ、此の地で、長々しい年月を過したのは、誠心のない我が心であつた、たとひ妻はもう泉下の人となつて、生きてゐた昔の世でなくても、其の跡でも探して

墓をも築く可きだと思つて、人々にもこの心を告げて、五月雨の降る時季に、雨の晴間に手を分つて、十日餘りの日を過ごして故郷に歸り着いた。

此の時日は早や西に沈みて、雨雲はおちかゝるばかりに閉けれど、寂しく住みなれし里なれば、迷ふべうもあらじと、夏野わけ行くに、いにしへの繼橋も川瀬におちたれば、げに駒の足音もせぬに、田畑は荒たきまゝにすさみて、舊の道もわからず、ありつる家居もなし。たま〳〵こゝかしこに殘る家に、人の住むとは見ゆるもあれど、昔には似つゝもあらね、いづれか我が住みし家ぞと立惑ふに、こゝ二十歩ばかりを去りて、雷に摧かれし松の從えて立てるが、雲間の星の光に見えたるを、げに我が軒の標こそ見えつると、先嬉しき心地してあゆむに、家は故にかはらでであり。人も住むと見えて、

○繼橋――眞間の繼橋とて名所。繼橋とは稍廣い川の眞中に柱を一本立て、それに橋木を結びて、その橋木へ向岸よりも此方よりも、板を架けおく橋を云ふ。萬葉集十九卷一足の音せず行かむ駒しが蹄の音の眞間の繼橋やまず通はむ」。

○川瀬――川中の瀬。

○げに駒の足音云々――前出の歌より、橋も落ちて音もなしと云へるなり。

○松の從えて――古代、家の前に松を植えて標とせし風習あり。

○其の人――妻を指す。

古戸の間より燈火の影もれて煇々とするに、他人や住む、もし其の人や在すかと心躁しく、門に立ちよりて咳すれば、内にも速く聞きとりて誰ぞと咎む。いたうねびれたれど、正しく妻の聲なるを聞きて、夢かと胸のみ騒がれて、我こそ歸りまゐりたれ。かはらで獨自淺茅が原に住みつることの不思議さよといふを、聞き知りたれば、やがて戸を明くるに、いといたう黒く垢づきて、眼はおち入りたるやうに、結げたる髪も背にかゝりて、故の人とは思はれず。夫を見て物をもいはで潜然となく。

通釋　勝四郎が故郷へ着いた時には日は既に西に沈んで、雨雲は今にも落ちかゝるほどに擴がつて四邊は暗いが、久しい間住み馴れてゐた里のことであるから、迷ふこともないだらうと思つて、夏草の茂つた野を分けて行くと、昔の繼橋も川瀬に落ちてゐるので、如何にも昔「足の音せずゆかん駒もが云々」と詠まれた歌の如く、踏みならす駒の足音もなく、田畑は荒れる儘に荒れて、昔の道も分らず、又昔あつた人家もない、たま

○咳――咳（セキ）をする。自然に病にて發する様にこわづくるにも云ふ。本條にては後者にて訪れる爲の咳拂。
○れびれたれど――年深けたれどの意。
○淺茅が原――萱（カヤ）が繁つた原。本條は草深く荒れたる原の意。
○聞き知りぬ々――聲を聞いて、勝四郎だと知つたとの意。
○結げたる――結髪するを、髪を上ぐと云ふ。

に此所や彼所に殘つてゐる家に人が住んでゐると見えるのもあるが、昔の様子には似ても似つかない、何れが自分の住んでゐた家かと立ち迷つてゐると、そこから二十歩ばかり離れた所に電の爲めに擁かれた松が聳えてゐるのが雲間の星の光りで見えたので、誠に自分の家の軒の標だつた松の樹が見えると、先嬉しい心地がして、歩んで行くと、家は昔と變らずにある。人も住んでゐるものとみえて、古い戸の隙間から燈火の光がもれてきら〳〵としてゐるので、若しや他人か住んでゐるのであらうか、又は妻が住んでゐるのかと、心がいら〳〵して門に立つて咳をして訪れると、家の内でも耳早く聞きつけて、誰れだと尋ねた。大變に年は老いたが、確かに妻の聲なのを聞いて、夢ではないかと胸ばかりがさわいで、吾が歸つて來た、昔と變らないで只獨り雜草の茂つた原に住んでゐることの不思議さよといふ聲を聞いて、勝四郎だといふ事を知つたので、直ぐに戸を明けたので見ると、妻は非常に色黒く垢がついて、眼は落ち窪んだやうで、結んだ髪も昔にたれかゝる程亂れて、昔の妻とは思はれない。妻は夫を見て物をも云はないでさめ〴〵と泣いてゐる。

勝四郎も心くらみて、しばし物をも聞えざりしが、やゝしていふは、今までかくおはすと思ひなば、など年月を過すべき。去ぬる年京にありつる日、鎌倉の兵亂を聞き、御所の師潰えしかば、總州に避けて禦ぎ給ふ。管領これを責むる事急なりといふ。其明年部に別れて、八月の始め京を立ちて、木曾路を來るに、山賊數多に取りこめられ、衣服金銀殘りなく掠められ、命ばかりを辛勞じて助かりぬ。且里人のかたるを聞けば、東海東山の道はすべて新關を据ゑて入を駐むる由、又きのふ京より節刀使もくだり給ひて、上杉に與し、總州の陣に向はせたまふ。本國の邊は疾くに燒き拂はれ、馬の蹄尺地も間なしとかたりたるによりて、今は灰塵とやなり給ひけむ、海にや沈みたまひけむと、ひたすらに思ひとゞめて、又京に上りぬるより、人に餓口て七とせは過しけり。近曾すゞろに物のなつかし

○心しくらみて――理非の辨別を失する意。
○など――「何（ナニ）と」の略。何とて。なにゆゑに。
○潰えしかば――破れたから。
○掠む――盜む。
○辛勞じて――辛（カラ）うじての當字。辛くしての音便。
○東海東山　東海道東山道の略。
○木曾路　中山道に同じ。
○節刀使　天子より征伐の命を受けたる將軍。上古將軍出征に際し、天子より、その行節（ソルシ）として太刀、旗、鈴などを賜ふ例なり、節度使。
○尺地――わづかばかりの地面。
○餓口　「口貧ふの義」他人より養ひを受くること、餓は粥を食ふこと。

○すゝろ――何故ともなく。

○巫山の夢――巫山は、今の四川省巫山縣の東にあり、巫山の神女の故事に本づきて、男女相會して綢繆を結ぶことを云ふ。宋玉の高唐賦に、昔者先王嘗遊高唐、怠而晝寢、夢見一婦人、曰、妾巫山之女也、爲高唐之客、聞君遊高唐、願薦枕席、王因幸之、去而辭曰、妾在巫山之陽、高丘之岨、旦爲朝雲、暮爲行雨、朝朝暮暮、陽臺之下、旦朝視之如言、故爲立廟、號曰朝雲。

○漢宮の幻――漢の武帝が李夫人を喪ひて後、方士に命じて、返魂香を作らしめて李夫人を呼び還らしめたりといふ故事。

○くりごと――同じ事を繰り返していふこと。

くありしかば、せめて其の蹤をも見たきまゝに歸りぬれど、かくて世におはせむとは努々思はざりしなり。巫山の雲、漢宮の幻にもあらざるやと、くりごとはてしぞなき。

通釋　勝四郎も心がくらんで、しばらくの間は物も云はなかつたが、やゝしばらくしていふには、今までこのやうにゐられると思つたならば、どうして長い年月を他國で過さうか、去る年都に居つた時に、鎌倉の戰亂を聞いて、御所方の軍が破れたから、御所は總州に逃げて敵を禦ぎ給ふ。又管領がこれを責める事が急だと云ふことだつた。これを聞いて翌日雀部に別れて、八月の始めに都を立つて、木曾路を來ると、山賊追の多くに取り圍まれて、衣服金銀等を全部奪ひ取られて、命ばかりは漸くのことに助かつた。その上にその土地の人が話すのを聞くと、東海道東山道は凡て新しい關所を設けて、人を止めると云ふことである、又昨日京都から節度使が下つて上杉と共同して、總州の戰陣に向はれたから、本國は早くに焼き拂はれて、軍馬の蹄で寸尺の餘地もないと話したので、もう今はおん身も灰になられたであらうか、淵に沈まれたのであらうかと、一途に思ひ止まつて、又京都に上つてからは、人に袋はれて七年を過し

た。處が近頃になつて何故となく物なつかしくなつたので、せめてのことには、亡くなられた跡でも見たいと思つたので歸つたのであるが、かうして世に生きて居られやうとは、夢にも思はなかつた。これは昔の巫山の夢や漢宮の幻の如く、夢や幻ではないかと、過ぎて返らぬことを繰り返し〳〵云つた。

妻涙をとゞめて、一たび離れ參らせて後、たのむの秋より前に、恐しき世の中となりて、里人は皆家を捨てゝ、海に漂ひ山に隠れば、適々に殘りたる人は、多く虎狼の心ありて、かく寡となりしを便りよしとや、言を巧みていざなへども、玉と砕けても瓦の全きにはならはじものをと、幾度か辛苦を忍びぬる。銀河秋を告ぐれども君は歸り給はず、冬を待ち、春を迎へても消息なし。今は京にのぼりて尋ねまわらせむと思ひしかど、丈夫さへ宿さゞる關の鎖を、いかで女の越ゆべき道もあらじと、軒端の松のかひなき宿に、狐狗鼠を友

○虎狼の心――恐ろしき心の喩（前出）。
○やもめ――「屋守女の略、獨居して家を守る意と云ふ」夫なき女。
○玉と砕けても云々――一節なして生を得るよりは、志を變へず死するを貴しとして不義の安樂な願はぬ喩の意。北齊書の元景安傳に、大丈夫寧可二玉砕一何能瓦全。
○軒端の松云々　家の標の松と待つをかけたり。

として今日までは過しぬ。今は長き恨みもはれ〳〵となりぬることの嬉しく待り。逢ふを待つ間に戀ひ死なむは、人しらぬ恨なるべしと、又よゝと泣くを、夜こそ短きにと、いひなぐさめて、ともに臥しぬ。

通行　妻は涙を留めて、一度お別れしてから、恃みにして居た秋より前に、恐ろしい世の中となつて、里人は皆家を捨てゝ海上に漂ひ、又山に隠れたので、寂しい郷となつた。たまに殘つて居る人は、多くは虎や狼のやうに恐ろしい心があつて、このやうに寡婦となつたのを幸ひとしてであらうか、言を甘く巧んで誘ふが、玉となつて砕けても瓦となつて全いのにはなるまいと思つて、幾度か辛い日を忍んだ。そのうちに空には天の河が出て秋の來たのを告げるが君は歸り給はず、冬を待ち過して春を迎へても便りがない。今は京都に上つてお訪ねしようかと思つたが、男でさへも通行を免されない關所の戸締を、どうして女の越える道があらうかと思つて、待つかひのないこの家に、狐や梟を友として今日まで過した。今は歸り來られたので長い間の恨みも晴々となつたのは嬉しいこと

○逢ふを待つ間ゝ々――後拾遺、戀二、平兼盛「人知れず逢ふを待つ間に、戀ひ死なば、何に代へたる命とかいはむ」。

○夜こそ短き――新古今集、戀三、藤原清正「短夜の、殘り少なく、更けゆけば、かれてものうき、曉の空」。

である。逢ふのを待つてゐる間に戀ひ死をすることは人には知られない恨みであらうと云つて、又泣くのを、夜は短いのにと、言ひ慰めて共に寢た。

窓の紙松風を啜りて、夜もすがら涼しきに、途の長手に勞れ熟く寢たり。五更の天明けゆく頃、現なき心にもすゞろに寒かりければ、衾被むとさぐる手に、何物にや籟籟と音するに目さめぬ。面にひや〳〵と物のこぼるゝを、雨や漏りぬるかと見れば、屋根は風にまくられてあれば、有明月のしらみて殘りたるも見ゆ。家は扉もあるやなし、簀垣朽ち頽れたる間より、荻薄高く生ひ出でて、朝露うちこぼるゝに、袖濕てしぼるばかりなり。壁には蔦葛延ひ懸り、庭は雀に埋れて、秋ならねども野らなる宿なりけり。

通釋　窓の障子の紙の破れた處から、松吹く風が吹き込んで、終夜寒かつたが、長途の旅で疲れてよく寢た。夜明頃、眼覺めても居ない夢心にも非

○窓の紙――窓の障子の紙をいふ。
○啜りて――風の吹き込むをいふ。
○途の長手――長い道の意にて、本條にては長い道程をいふ。
○五更――古代の時刻の名にて、一夜を五つに分つ。五更は今の午前四時。
○衾――夜具。
○有明月――夜明けの月。
○簀垣――竹の籬。
○袖濕ちて――袖がぬれて。
○雀――草の生え茂り。
○秋ならねど云々――古今集秋下「里はあれて人はふりにし、宿なれ

や、庭しまがきも、秋の野らなる」とあるにより て草深きをいふなり。

○いづち——何處。
○奥わたり——奥あたり。
○好みたる云々——自分が好んで作つた位の様子である。
○まかる——みまかる。
○塙——土を高く積み上げたる處。
○わが身云々——古今集春上。月やあらぬ、春や昔の、春ならぬ、我が身ひとつは、もとの身にして。とあるよりいふ。

常に寒かつたので、夜具をかけやうとして探る手の先に、何物だかさや〳〵と音がするので目が覚めた。顔にひや〳〵と冷い物がこぼれるのを、雨が漏つたのかと思つて見ると、屋根は風に吹きまくられて居るので、夜明け方の月がしら〳〵と殘つて居るのも見える。家には扉も無く、竹垣が朽ち頽れて居る間から、荻や薄が高く生え出て、門の露がこぼれるので、袖も濡れて絞る位である。壁には蔦や葛が生え懸つて、庭は草の生え茂りに埋められて、秋ではないが野邊の宿である。

さてしも臥したる妻はいづち行きけむ見えず。狐などの所業にやと思へば、かく荒れ果てぬれど、故住みし家に違はで、廣く造り作し奥わたりより、端の方、稲倉まで好みたる儘の形なり。呆自れて足の踏所さへ失れたるやうなりしが、熟おもふに、妻は既に死りて、今は狐狸の住みかはりて、かく野らなる宿となりたれば、怪しき鬼の化して、ありし形を見せつるにてぞあるべき。若し又我を慕ふ魂の返り來りて語りつるものか。思ひしことの露たがはざりしよ

と、更に涙さへ出です。我が身ひとつは故の身にしてと、あゆみ廻るに、むかし閨房にてありし所の簀子をはらひ、土を積みて塊とし、雨露をふせぐまうけもあり。夜の靈はこゝもとよりやと、恐しくも且つなつかし。水向の具物せし中に、木の端を削りたるに、那須野紙に、いたう古びて、文字もむら消して所々見定めがたき、正しく妻の筆の跡なり。法名といふものも年月もしるさで、三十一字に末期の心を哀れにも展べたり。

さりともと、思ふ心に、はかられて、

世にもけふまで、いける命か。

通釋　それにしても共に臥した妻は、何處に行つたのか見えない。昨夜來の出來事は狐などの仕業かと思ふが、こう荒れはてゝは居ても、昔住んで居た家に相違なく、廣く造つた奥の邊りから、端近くの方、稻を入れる

○簀子　竹を編みたる簀にて、床、縁を造れるもの。

○水向　死者に水を手向けるをいふ。又供物をする意。

○那須野紙　那須野より生ずる紙、今の檀紙。

○法名　佛門に入れる人に、別に附くる名にて、又在俗の人にても其宗門歸依の人なれば生前、死後、共に授く。眞宗にて法名といひ、他宗にては、戒名といふ。

○三十一字　和歌の別名。

○さりとも云々——三十六人集の中の敦忠集にあり。

倉さでも自分が好て作つた通りの形である。あきれて、足の踏み所さへも失つたやうであつたが、よく〳〵考へると、妻は最早死去して、今は狐や狸の住み家と変つて、このやうに荒れ果てた野原の宿となつて居るから、怪しい魔か化けて、昔の妻の顔形を見せたのであらう。又は自分を慕ひ慕ふ妻の魂が返つて来て語つたものか、自分が思つた事が少しも違はなかつたことよと、一向に涙さへ出ない。自分の身だけは以前の身だと云ふ古い歌も思ひ出されて、四辺を歩み廻つて見ると、昔寝室であつた室の床をはづして、土を積んで墓とし、雨露を防ぐ設備もしてある。昨夜の霊魂は此所からであらうと思ふと、恐しくもあり又なつかしい。手向の水等具物した中に、木の端を削つたのに、那須野紙か（はり附けてあつてその紙は）大変古くなつてゐて、書いてある文字もところ〴〵消えて、確に見定められないものがある、しかし間違ひもなく妻の筆の跡である。法名といふものも、死んだ年月も記さないで、三十一字の歌に最後の時の心持を悲しくも書いて居る。

それでも若しや歸られることもあらうと、思ふ心に引かされて、たどそれを便りに、この辛い世の中に今日まで生きて居た悲しさよ。

ここにはじめて妻の死にたるを覺りて、大に叫びて倒れ伏す。去りとて、何の年、何の月日に終りしさへしらぬ淺ましさよ。人は知りもやせむと、涙を止めて立ち出づれば、日高く差昇りぬ。先づ近き家に行きて主を見るに、昔見し人にあらず、反りて何國の人ぞと咎む。勝四郎禮ひていふ。此の隣なる家の主なりしが、過活のため京に七とせまでありて、昨の夜かへりまゐりしに、既に荒れ廢みて人も住ひ侍らず。妻なるものも死しと見えて、墳の設も見えつるが、何の年にともなきに、まさりて悲しく侍り。知らせたまはゞ敎へ給へかし。主の男いふ、哀にも聞え給ふものかな。我ここに住むも、いまだ一とせばかりのことなれば、それよりはるかの昔に亡せ給ふと見えて、住みたまふ人のありつる世は知り侍らず。すべてこの里の舊き人は兵亂の初めに逃げ失せて、今住居する人は大方他よ

○禮ひて——うやまひて。
○過活　生活又生業の意。
○さこえ給ふ——申し給ふの意。

り移り來たる人なり。只一人の翁の侍るが、所に稀しき人と見え給ふ。時々あの家にゆきて、亡せたまう人の菩提を弔らはせ給ふなり。この翁こそ月日をも知らせたまふべしといふ。勝四郎いふ、さては其の翁の住み給ふ家は何方にて待るや。主いふ、こゝより百歩ばかり濱の方に、麻おほく種ゑたる畑の主にて、其所に小さき庵して住ませ給ふなりと教ふ。勝四郎よろこびて、かの家にゆきて見れば、七十可の翁の、腰は淺ましきまで屈まりたるが、庭忽の前に圓座敷きて茶を喫り居る。翁も勝四郎と見るより、吾主何とておそく歸り給ふといふを見れば　此の里に久しき漆間の翁といふ人なり。

通釋　こゝで初めて妻が死んだ事を知つて、大いに泣き叫んで倒れ伏した。それにしても、何年の何月何日に死んだのか、時日さへも知らないあさましいことよ。人はその時のことを知つても居らうかと思つて、涙を止めて立ち出ると、太陽は高く昇つた。先づ近くの家に行つて主人を見ると、

○菩提——梵語。正しくは（ボーヂ）なり、智又は覺と譯す。不生、不滅の眞如の理を證悟し、道の本體に到達すること。

○百歩——歩は土地大量の尺度の名目。六尺又は六尺四寸の長さ、本條にては凡そ百間程の意。

○庵——草木にて作れる假屋。

○庭忽——庭に突いた縁。

○圓座——藁等にて圓く渦形に平たく組んで作つた敷物。圓座（エンザ）に同じ。

○尊主——足下。

昔見た人ではない、却つて向ふから何處の國の人かと咎めた。勝四郎は禮儀を正して云ふには、自分は此の隣の家の主人であつたが、渡世の爲めに京都に七年ばかり居つて、昨夜歸つて來た處が、既に荒れ果てゝ人も住んで居ない。妻も死んだと見えて墓の設備もしてあるが、何年に死んだとも書いてないので、殊に悲しくなる。御存知ならば教へ給へと云ふと、その家の主人が云ふには、悲しい事を云はれるものだ、自分は此所に住んで居るのも、まだ一年位の間のことであるから、それよりはよほど以前に亡くなられたと見えて、住んでゐられた人があつた時は知らない。この里の舊い人はすべて、兵亂の初めに逃げて仕舞つて、今住んでゐる人は大抵他所から移つて來た人である。然し、只一人老人がゐるが、その人は此の土地に久しく居る人と思はれる。時々あの隣の家に行つて、亡くなられた人の後世の冥福を祈つて居られる。この老人こそ、その月日等をも知つて居られようと云つた。勝四郎が云ふ、では其の老人が住んで居られる家は何處であるかと、主人が云ふには、こゝから百間ばかり海邊の方に麻を多く植ゑた畑の持主で、其所に小さい庵を造つて住んでゐられると教へてくれた。勝四郎は喜んで、その家に行つて見ると、七十歳ばかりの老人で、腰があきれる程まがつてゐる老人が、庭

道の前に圍坐を敷いて茶を飲んでゐる。その老人が勝四郎を見て、あなたは何故こんなに遠く歩られたのかと云ふのを見ると、此の里に久しく以前から住んで居る漆間の翁といふ人である。

勝四郎、翁が高齢をことぶきて、次に京に行きて心ならずも遁りしより、前後のありさまでを詳にかたりて、翁が龍を築きて祭りたまふ思のかたじけなきを告げつゝも涙止めがたし。翁いふ、吾主遠くゆきたまひて後は、夏の頃より干戈を揮ひ出でて、里人は所々に遁れ、弱き者共は軍民に召さるゝほどに、桑田にはかに狐兎の叢となる。只烈婦のみ主が秋を約ひたまふを守りて、家を出で給はず。翁も又足蹇ぎて百歩を難しとすれば、深く閉ち籠りて出でず。一旦樹神などいふおそろしき鬼の栖所となりたりしを、稚き女子の矢武におはするぞ、老が物見たる中のあはれなりし。秋去り春

○ことぶく―(言祝ぐ)に同じ。喜を言ふ。
○心ならず―本意ならず。
○蹇―躓に同。
○弱き者―年若き者。
○烈婦―賢女にて。かしこき女の意で、しっかりした婦人。
○蹇ぎて―足に病ありて、歩行の自由でないこと。
○樹神―樹木の霊魂。又やまびこをいふ。
○矢武に―氣丈に、又健氣に。
○慚しさ―氣の毒の餘りに。

○蘋繁行潦――心ばかりの供物の意。信實の心ありて供すれば此等の微物も祭祀の供物となるといふこと。左傳隱公三年に、苟有二明信一、澗谿沼沚之毛、蘋蘩蕰藻之菜、(中略)、潢汙行潦之水、可レ薦二於鬼神一、可レ羞二於王公一。

○贈號――死者に贈る法名。

○念佛――佛名を稱念すること。多くは阿彌陀佛の名を稱念する意に用ふ。

來りて、其の年の八月十日といふに死給ふ。悶しさのあまりに、老が手づから土を運びて柩を藏め、其の終焉に殘したまひし筆の跡を壟のしるしとして、蘋蘩行潦の祭も心ばかりにものしけるが、翁もとより筆とる事をしも知らねば、其の月日を記す事もえせず。寺院遠ければ贈號を求むる方もなくて、五とせを過し侍るなり。今の物語をきくに、必ず烈婦の魂の來り給ひて、舊しき恨を聞えたまふなるべし。復びかしこに行きて念頭にとぶらひ給へとて、杖を曳きて前に立ち、相共に壟のまへに俯して聲を放げて歎きつゝも、其の夜はそこに念佛して明しける。

通釋　勝四郎は老人が高齡なのを喜び祝つて、次に自分が京都に行つて本意ならずも逗まつてゐた事から、昨夜の怪しい事までも詳細に話して、老人が墓を築いて祭り給ふ恩のかたじけないことを語り乍らも涙は止めら

れない。翁がいふには、あなたが遠方へ行かれた後に、夏の頃から戰爭が始まつて、里人はところ〴〵に逃げ、殘つた年若い者共は軍兵に召し出される內に、桑畑を耕す人もなく俄かに狐や兎の住む藪となつた。その中で、烈婦の貴下の妻だけはあなたが秋には歸ると約束せられたのを守つて、家を出られない、私も又足がなへて百歩も歩くことが出來難いので、深く家に閉ぢ籠つて外へ出なかつた。一度はこだまといふやうな恐しい鬼の住家となつたのをかまはずに、若い婦人が住んでゐられたのは、健氣な事であつた。私がいろ〳〵なものを見た內の哀れなことであつた。そのうち秋も去り冬が來て、その年の八月十日と云ふ日に死なれた。お氣の毒な餘りに、私が自身で土を運んで柩を埋め、その死なれる時に殘された筆蹟を墓のしるしとして、供物を供へることもほんの心ばかりで行つたが、自分はもとから文字を書く事を知らないから、死なれた月日を記す事も出來ず。寺も遠いので法名をつけて貰ふ方法もなくて五年を過したのである。今の怪しい物語をきくと、必ずそれは烈婦の魂が來て、昔の恨を云はれたのであらう。亦彼所に行つて丁寧に後世を弔ひ給へと云つて、杖を曳いて前に立つて行き、五ひに墓の前に俯して辭をあげて泣き訣きながらも、其の夜は墓の前で念佛をして夜を明した。

○眞野手兒女――昔葛飾の眞間に手兒女といふ女あり、容貌美はしくして、多くの人に戀いられすとて、水に沒しぬ。萬葉集、三、九、十四卷に出す、三卷に「われも見つ人にも告げむかつしかの眞間の手兒名がおくつきどころ」とあり。

○帶衿――裙帶（クンタイ）とて帶の上に飾るもの。

○望の夜――十五夜。

○京女腦――京に住む身分高き女。

○防人――昔邊要警備の爲めに派遣した兵士の名。即ち崎守の義なり。太宰府の被管に防人司（サキモリノツカサ）ありて之を支配す。防人は現役三年の制なり。

○をさなき心――不慣な心。

寢られぬまゝに翁語りていふ。翁が祖父のその祖父すらも、生れぬ遙かの往古の事よ。此の里に眞野の手兒女といふいと美しき娘子ありけり。家貧しければ、身には麻衣に青衿つけて、髮だも梳らず。履だも穿かすてあれど、面は望の夜の月のごと、笑めば花の艷ふがごと、綾錦に包める京女腦にも勝りたりとて、この里人はもとより、京の防人等、國の隣の人までも、言をよせて戀ひ慕はざるはなかりしを、手兒女物うき事に思ひ沈みつゝ、多くの人の心に報いずとて、此の浦曲の波に身を投げし事を、世の哀なる例とて、いにしへの人は歌にもよみ給ひてかたり傳へしを、翁が稚かりしとき、母のおもしろく語り給ふをさへ、いと哀なることにきゝしを、此の亡人の心は、昔の手兒女が稚き心に幾らをか、まさりて悲しかりけむと、かたる〳〵涙さしぐみてとゞめかぬるぞ、老は物えこらへぬ

なりける。勝四郎が悲みはいふべくもなし。此の物語りを聞きて、おもふあまりを田舎人の口鈍くもよみける。

いにしへの、眞間の手兒奈を、斯くばかり、
戀ひてしあらむ。眞間のてこなを。

思ふ心のはしばかりをもえいはぬぞ、ことくいふ人の心にもさきりて、あはれなりとやいはむ。かの國にしば〳〵かよふ商人の聞き傳へてかたりけるなりき。

通釋　寢られないので、翁が話すのには、私の祖父のその祖父さへも、まだ生れない遠い古の事だ。此の里に眞間の手兒名といふ大變美しい娘があつた。家が貧しかつたので、身には麻の衣に青い衿飾のついた粗末な衣服を纏つてゐて、髮も梳ることもなく、履さへも穿かないでゐたけれども、顏は十五夜の月のやうに美しく、笑ふと花が咲き亂れたやうで、綾や錦で身を包んで居る京の上流婦人にも勝れて居ると云ふので、この里の人は勿論、都から來た防人等や、隣國の人までも、言を寄せて繼ひ慕

はないものはなかつたのを、手兒名はこれを憂いことに思ひ沈んで、このやうに自分に心を寄せる多くの人の心に報いることが出來ないと云つて、この海に身を投げた事を、世間の哀れなことの例として、古の人は歌にも詠んで語り傳へたのを、自分の幼時に、母が面白くお話しせられたのさへ、非常に氣の毒なことだと思つて聞いたのに、此の亡くなられた人の心は、昔の手兒名の不憫な心にどれほどか、勝れて悲しかつたことであらうかと、語り乍らも涙が出て止められないのは、老人は物を我慢することが出來ないものである。此の物語りを聞いて、思ひ餘つた心を田舍人が口にふくも詠んだ、

古の眞間の手兒名を人達がこれ程に戀ひしたであらうか、手兒名を戀した心はこの女が夫を慕ふたのには及ぶまい。

思つて居る心の片端も云ふことの出來ないのが、よく物を云ふ人の心にも勝つて哀れなものといつてよからう、かの紹州へ度々往來する商人が聞き傳へて話したのである。

○延長の頃――六十代醍醐天皇の御世の年號。
○三井寺――近江國大津市の西北にある長等山園城寺（オンジャウジ）の別稱。天智、天武、持統の三天皇此の地の井水を以て御産湯となし給ひしに因り三井の名ありといふ。天台宗寺門派の本山。
○湖――琵琶湖をいふ。
○あびき――あみひきの略語。
○泉郎――「海人（アマビト）」の略語。海にて漁りするを業とする人。
○細妙――巧妙。
○大小――色々の魚の意。

夢應の鯉魚

むかし延長の頃、三井寺に興義といふ僧ありけり。繪に巧なるをもて名を世にゆるされけり。常に畫く所、佛像、山水、花鳥を事とせず。寺務の間ある日は湖に小船をうかべて、網引釣する泉郎に錢をあたへ、獲たる魚をもとの江に放ちて、其の魚の遊躍を見ては畫きけるほどに、年を經て細妙に至りけり。或時は繪に心を凝して眠をさそへば、ゆめの裏に江に入りて大小の魚と倶に遊ぶ。覺れば卽て見つるまゝを畫きて壁に貼し、みづから呼びて夢應の鯉魚と名附けけり。その繪の巧なるを感て、乞要むるもの前後を爭へば、只花鳥山水は乞ふにまかせてあたへ、鯉魚の繪はあながちに惜みて、人

毎に戯れていふ、生を殺し鮮を喰ふ凡俗の人に、法師の食ふ魚必ずしも與へずとなむ。其の繪と俳諧とともに天下にきこえけり。

通釋　昔延長年間の頃に、三井寺に興義といふ僧があつた。繪が上手だといふことで、名人として世間でゆるされて居た。常に佛像、山水、花鳥といふやうなものは畫かうとはしないで、寺の務めの暇がある日には、湖に小船を浮べて、網を引いたり釣をする漁夫に金を與へて、その獲た魚を元の江に放つて、其れ等の魚が游ぐのをみては繪に畫いて居る内に、年が經つて非常に巧妙に畫けるやうになつた。或る時には繪に心を寄めて居て睡くなると、夢の中で江に這入つて種々の魚と共に遊んでゐる、眼が覺めると早速夢にみた通りを畫いて壁に貼りつけ、自ら呼んで夢應の鯉魚と名付けた。その繪が巧妙であることを感心して、鯉魚の繪を欲しがる人たちが前後を爭つて乞ふと、只花鳥だとか山水の繪は乞はれるに從つて與へるが、鯉魚の繪は大變に惜んで與へないで、人緣に戯れていふには、生きものを殺して生魚を喰ふ俗な人には、僧侶が食つてゐる魚は必ず與へないといつた。その鯉魚の繪は又俳諧とともに天下に評判になつた。

○鮮――（アザラケキ）は新しき意。
○凡俗――平凡な、俗な人。
○俳諧――俚言、俗語を詩化せる連歌の一體。
○あながち――（アナウガチ）強ひて、むりに。

一とせ病にかゝりて、七日を經て忽ちに眼を閉ぢ、息絶えてむなしくなりぬ。徒弟友どちあつまりて歎き惜みけるが、只心頭のあたりの微し暖なるにぞ、若やと居めぐりて守りつも、三日を經にけるに、手足少し動き出づるやうなりしが、忽ち長嘘を吐て、眼を開き、醒めたるがごとくに起き上りて、人々にむかひ、我人事を忘れて既に久しき日をか過しけむ。衆弟等いふ、師三日前に息たえ給ひぬ。寺中の人々をはじめ、日頃睦まじくかたり給ふ殿原も詣でたまひて、葬の事をもはかりたまひぬれど、只師が心頭の暖なるを見て、柩にも藏めで、かく守り待りしに、今や蘇生りたまふにつきて、かしこくも物せざりしよと悦びあへり。興義點頭ていふ、誰にもあれ、一人、檀家の平の助の殿の館に詣りて告さむは、法師こそ不思議に生き待れ。若今酒を酌み、鮮き鮪をつくらしめ給ふ。暫く宴を罷め

○徒弟――「釋氏要覽、弟子又云二徒弟一、謂門徒弟子略レ之也」、倩の弟子。
○友どち　どちは共に同類なる意にして、友達に同じ。
○殿原　皆樣方。
○詣でる――參り出づ。來るの敬語。
○よみがへる――「黄泉（ヨミ）より還る意といふ」死したる者が再び生く。
○物せざりし――埋葬をしなかつた。
○檀家――「寺院に附屬せる檀那の家の義」檀那は梵語、陀那鉢底の畧語にて、陀那は布施（フセ）、鉢底は主の義。

○膾　魚肉を生にて細く切りたるもの。
○稀有　――稀有とも書く。稀にあること。ふしぎ。
○掃守　――掃除人。

て寺に詣でさせ給へ。稀有の物語聞え參らせむとて、彼の人々のある形を見よ。我が詞に露違はじといふ。使異しみながら彼館に往きて其の由をいひ入れて窺ひ見るに、主の助を始め、○令弟の十郎、家の子掃守など居めぐりて酒を酌みあたる。師が詞のたがはぬを奇とす。彼の館の人々此の事を聞きて大に異しみ、先づ客を止めて、十郎掃守をも召し具して寺に到る。

通釋　ある年病氣に罹つて七日經つて忽ちに眼を閉ぢ、息が絶えて、死んでしまつた。興義の弟子や友達が集つて悲しみ歎いたが、只胸の邊が少し暖いので、若しも蘇生しはしないかと思つて、その周圍に座して見守り乍ら三日を過した處が、手足が少し動き出したやうであつたが、忽ち長息を吐いて、眼を開いて、眠から覺めたやうに起き上つて、人々に向ひ自分は人事不省になつてから久しい日を過したのかといふと、多くの弟子等は、師は三日前に息が絶えられた。寺中の人々をはじめ、平常親しくしてゐられる人達も來られて、葬送の事も相談しられたが、只師の。

が咳であるのを見て、柩にも入れないで、このやうに守つてゐたが、今や蘇生しられたについても、よくも葬式をしなかつた事だと喜び合つてゐるといふ。興義は點頭いて、誰れでもよいから、一人、檀家の平の助殿の館に行つて、法師は不思議にも蘇生をした。君は今酒を飲んで、珍らしき魚を鮨に作らせてゐられる。暫くの間、酒宴を罷めて寺に來給へ、珍らしい話をおきかせ致さうといつて、彼の人達の様子を御覽。自分の詞と少しも違はないだらうと云つた。使に立つた人は不思議に思ひ乍ら、彼の平の助の館に行つて、其の事を云ひ入れて様子を覗つてみると、主人の助を始め、弟の十郎、家來、庭番などが圍く座つて酒盛をして居た、それで師匠の詞に違はないのを不思議に思つた。彼の館の人々は此の事を聞いて大變に怪しんで、先づ筵を設いて、十郎や庭番までも引きつれて寺に來た。

興義枕をあげて路次の勞(わづらひ)をかたじけなうすれば、助も蘇生の賀(よみがへりことほぎ)を述ぶ。興義先づ問ひていふ。君試に我がいふ事を聞かせ給へ。かの漁父文四に魚を誂(あつら)へたまふことありや。助驚きて、まことにさる

(1) 路次の勞——途中の勞力。
○あつらふ——注文する。
○漁父——漁夫に同じ。

ことあり、いかにしてしらせたまふや。與義、かの漁父三尺あまりの魚を籠に入れて君が門に入る。君は賢弟と南面の所に非を圍みておはす。揃守傍に侍りて、桃の實の大なるを啣ひつゝ、非の手段を見る。漁父が大魚を携へ來るを喜びて、高坏に盛りたる桃を與へ、又盃をたまうて三獻飲ましめ給ふ。鮹手したり顔に魚をとり出でて鮹にせしまで、法師がいふ所たがはでぞあるらめといふに、助の人々此の事を聞きて、或は異しみ、或は心地惑ひて、かく詳なる言の由を頻に尋ぬるに、與義かたりていふ。

通釋　與義が頭を上げて遠路の足勞を謝すと、助も蘇生の祝を述べた。與義が先づ助に問ふには、君試に私の言ふことを聞き給へ、彼の漁夫の文四に魚を注文された事があるかと云ふ。助は驚いて、誠にさうした事がある、どうして知つて居られるかといふ。與義は、彼の漁夫が三尺位の魚を籠に入れて君の家に入つた、その時君は弟君と南面の座敷で非を圍ん

○非　圍碁。奕と混用するは非なり。
○高坏　食物を盛れる盤を載せる臺。一ツ足にして角高坏と圓高坏との二種あり。晴には角なるを用ひ、略儀には圓なるを用ふ。
○鮹手　膳夫、料理人。
○したり顔　自慢さうな容子。
○三獻　獻は盃を獻す事をいふ。松の落葉に「一ひと杯の酒のむを一度といふ、三度のむを一獻といひき」とあり。

で居られた、庭番は傍に居つて、桃の實の大きいのを食ひ乍ら園丞の手だてを見てゐた。其處へ漁夫が大魚を持つて來たのを喜んで、文四に高杯に盛つてあつた桃をやり、又盃を與へて三獻飲ませられた。そして料理人が得意さうに魚を取り出して鱠に作つたといふことまで、自分がいふ所と違ひはあるまいといふと、助の一家の人々は此の事を聞いて、或は不思議に思ひ、或は心地が迷ふて、こんなに詳細にいはれた理由を頻りに尋ねると、奥義は次のやうに話した。

我此の頃病に苦しみて堪へ難きあまり、其の死たるをもしらず、熱き心地少しさまさんものをと、杖に扶けられて門を出づれば、病もやゝ忘れたるやうにて、籠の鳥の雲井にかへるこゝちす。山となく里となく行き〳〵て、又江の畔に出づ。湖水の碧なるを見るより、現なき心に浴びて遊びなむとて、そこに衣を脱ぎ去てゝ、身を跳らして深きに飛入りつも、彼此を游めぐるに、幼きより水に狎れたるにもあらぬが、慾ふに任せて戯れけり。今思へば、恐なる夢ごゝろ

○雲井――雲の居る處の義にして、空中、又遠く隔たれること、又はその處等をいふ。井といふ字は假借の字なり」。

○現なき心――現在生きて居るとも思はれぬ心地。

○彼此！――彼方、此方。

なりし。されども人の水に浮ぶは魚のこゝろよきにはしかず。こゝにて又魚の遊びをうらやむ心おこりぬ。傍にひとつの大魚ありていふ。師のねがふ事いと易し。待たせ給へとて、杳の底に去くと見しに、しばしして、冠装束したる人の、前の大魚に跨がりて、許多の鱒魚を率ゐて浮びきたり、我にむかひていふ。海若の詔あり。老僧かねて放生の功徳多し。今江に入りて魚の遊躍を願ふ。櫂に命鯉が服を授けて水府のたのしみをさせ給ふ。只餌の香ばしきに味まされて、釣の絲にかゝり身を亡ふことなかれといひて、去りてみえずなりぬ。不思議のあまりにおのが身をかへりみれば、いつのまにか鱗金光を備へて、ひとつの鯉魚と化しぬ。

通通　私は此の頃病氣に苦んで堪へられない餘りに、自分が死んだといふことも知らずに、熱を少しさまさうと思つて、杖にすがつて門を出ると、

○鱒魚——「鱒（イロクヅ）」の轉語にて魚族の意なり。鱒は大魚。
○海若——海神、わたつみは海の古語、つみは掌るの義にて神、帝王等の意。
○放生——捕へおきたる魚鳥等の生物を放ち遣ること。列子の說符篇に「正旦放生、示レ有レ恩也」とあり。
○功德——功能が自家の福利となる意にて、現在又は未來を資益する善き作業。
○水府——海底にありとする想像の都。

病氣も漸く忘れたやうで、能に居た鳥が大空へ歸るやうな心地がした。山となく里となく進んで行くと、又江のほとりに出た。湖の水の青いのを見ると早速、夢のやうな心にも、水を浴びて遊ばうと思つて、そこに着物をぬいで身を跳らして深い所に飛び込んで、彼方此方を游廻ると、幼い頃から水には狎れてもゐないのに、思ふ通りに水中を游き廻つた、今思ふとそれが思な夢ごこちであつたのだ。けれども人が水に游ぐのは魚の心地のよいのには及ばない。こゝで又魚が水に游ぐのを羨む心が起つた、すると傍に一尾の大魚が居つていふには、あなたの願つてゐる事は容易なことだ、待ち給へといつて、遙の水底に行つたと思ふと、暫くして、冠をつけ裝束をした人が、前の大魚に跨つて多くの魚族を率ゐて浮んで來て、私に向つていふには、海神からの詔があつた。あなたは之まで生類を救うて放つ功徳が多い、今水中に入つて魚の游ぎ遊ぶのを自分にも願つてゐられるから、假りに金鯉の服を授けて水中の都の樂しみをさせ給ふ。只餌が呑ばしいのにくらまされて、釣糸にがゝつて身を亡ぼすことのないやうにといつて、何處かへ行つて見えなくなつた。不思議の餘りに自分の身を顧ると、何時の間にか金光の鱗を備へて、一尾の鯉と化した。

○逍遙――氣散じの爲に出で遊ぶこと。
○長等山――近江、山城の國境なせる山脈の中、大津市の西に當る邊の汎稱。その山麓の一部に三井寺あり。
○志賀の大曲――近江琵琶湖の古名。大曲は河湖などの水が陸地に深く入込みて、よどみたる處。
○かち人――徒歩にて行く人。
○比良の高山――近江國滋賀郡にあり、比良の暮雪として、近江八景の一。
○かくれ堅田――琵琶湖の畔にあり、續拾遺集に一つひにまたうき名やたゝむあふことはさてもかたゝのうらのあだなみ」とあるより堅田を難いにかけたるなり。
○ぬば玉の――夜の枕詞。

あやしとも思はで、尾を振り鰭を動して、心のまゝに逍遙す。まづ長等の山おろし立ちゐる浪に身をのせて、志賀の大曲の汀に遊べば、かち人の裳のすそぬらすゆきかひに驚かされて、比良の高山影映る深き水底に潜くとすれど、かくれ堅田の漁火によるぞうつゝなき。ぬば玉の夜中の渦にやどる月は、鏡の山の峰に清みて、八十の湊の八十隈もなくておもしろ。沖津島山、竹生島、波にうつろふ朱の垣こそおどろかるれ。さしも伊吹の山風に、朝妻船も漕ぎ出づれば、葦間の夢を覺され、矢橋の渡りする人の水なれ柏を逃れては、瀬田の橋守にいくそたびか追はれぬ。日あたゝかなれば浮び、風あらきときは千尋の底に遊ぶ。

通釋　不思議とも思はないで、尾を振り鰭を動かして思ひのまゝに游ぎ廻つた。先づ長等の山から吹き下す嵐で立つて居る浪に身を乘せて志賀の大

きな潟の水ぎはで遊ぶと、歩んで居る人の着物の裾をぬらすやうに汀近く往來するのに驚かされて、比良の高山の影がうつゝて居る深い水の底に潜らうとすれども、かくれ難い堅田の漁舟の火に夜は引き寄せられるのも夢心地である。夜中の潟に映つて居る月は、鏡山の頂上に清く澄んで、その光が數多くの湊の何處へも行き渡つて居るのがおもしろい。沖津島山、竹生島の波に映つて居る朱の玉垣には驚いた。伊吹山の山をふく風に、朝妻船も漕ぎ出るので、葦の間に寢て居た夢も驚き破られ、矢橋の舟渡しをする人の水馴棹を通れたかと思ふと瀬田の橋の番人に幾度か追はれた。こんなにして日が暖かであれば浮び上り、風が荒い時は千尋の水底で遊んだ。

急にも飢ゑて食欲げなるに、彼此に求食り得すして狂ひゆくほどに、忽文四が釣を垂るゝにあふ。その餌甚だ香し。心又河伯の戒を守りて思ふ。我は佛の御弟子なり。しばし食を求め得すとも、なぞもあさましく魚の餌を飲むべきとてそこを去る。暫時ありて飢ます

○八十の湊——八十は數多き義にて、多くの湊。
○八十隈——數多く入り組みたる所。「鳥葉集ニ『磯の崎漕ぎたみ行けば近江の海八十の湊にたづさはに鳴く』。又暗き處。
○竹生嶋——琵琶湖中にあり。
○伊吹山——美濃、近江、兩國の間にある山、山中藥草多し。山家集に「おぼつかないきおろしの風さまに朝妻船なあひやしめらん」。
○朝妻船——近江國坂田郡入江村の漁し船、「大木にほの海やあさづまぶれも出でにけり、つなぐ氷な風やとくらむ」。
○矢橋の渡——近江にあり、八景の一。
○水なれ棹——水馴れた棹。
○千尋——長さ深さの甚だ多きこと。

〳〵甚しければ、かさねて思ふに、今は堪へ難し。たとひ此の餌を飲むとも、嗚呼に捕れむやは。素より他は相識るものなれば、何のはゞかりかあらむとて、遂に餌をのむ。文四はやく絲を收めて我を捕ふ。こはいかにするぞと叫びぬれども、他かつて聞かず顔にもてなして、繩をもて我が腮を貫ぬき、葦間に船をつなぎ、我を籠に押入れて、君が門に進み入る。君は賢弟と南面の間に弈して遊ばせたまふ。掃守傍に侍りて菓を啗ふ。文四がもて來し大魚を見て、人々大に感させ給ふ。我其のとき人々にむかひ聲をはり上げて、旁等は與義をわすれたまふか。宥させたまへと連に叫びぬれど、人々しらぬ形にもてなして、只手を拍つて喜び給ふ。

○求食——魚鳥等が餌を探し求むること。あさる。
○河伯　河の神。支那にては黄河の神。上文海若とあるを受けていふ。
○あさましく——驚歎する程に。
○嗚呼——馬鹿らしくの意。本は愚にして笑ふべきさまを歎する聲より出でたる語。
○かつて聞かず——すこしも聞かない。
○腮——腭門（アギト）の意。鰓。
○葦間——葦の生えて居る間。
○旁等——各方、皆様、などいふ。旁は借字。

通釋　俄かに飢ゑて食物が欲しくなつたので、彼方此方に餌を探したが求め得られなくて狂ひ游いで居るうちに、忽ち文四が釣糸を垂れて居るのに出會つた。その餌は甚だ香がよい。欲しいと思つたが、又河神の戒を守つて思ふには、自分は佛の弟子である、少時の間食物が求められないでも、なんで卑しくも魚の餌を飲まうかと思つてそこを去つた。暫くして飢は益々甚だしいので、再び思ふにはもう今は堪へられない、例ひ此の餌を飲んでもむざ〳〵と捕へられやうか。又元來文四とは知合つて居るのだから、少しも構ふ事はないと思つて、遂に餌を飲んだ。すると文四は早く糸を引き上げて私を捕へた。これはどうするのかと叫んだが、文四は知らない顏をして、繩を以つて私の頤をさし通して、葦の間に船を繋いで、私を箱に押し込んで君の門に入つた。其の時君は弟君と南向の室で碁を圍んで遊んで居られた。掃守はその傍に居て、菓物を食つて居た。文四が持つて來た大魚を見て、人々は非常に賞められた。自分はその時人々に向つて聲をはり上げて、君達は與氣をお忘れになつたのか、容し給へ、寺へ歸らさせ給へと頻りに叫んだが、人々は知らぬ顏をして只手を拍つて喜ばれた。

鮹人なるもの、まづ我が兩眼を左手の指にてつよくさらへ、右手に礪すまし〻刀をとりて俎盤にのぼし、既に切るべかりし時、我くるしさのあまりに大聲をあげて、佛弟子を害する例やある。我を助けよ助けよと叫びぬれど聞き入れず。終に切らるゝとおぼえて、夢醒めたりと語る。人々大に感で異しみ、師が物がたりにつきて思ふに、其の度ごとに魚の口の動くを見れど、更に聲を出すことなし。かゝること、まのあたりに見しこそいと不思議なれとて、從者を家に走らしめて、殘れる鮹を湖に捨てさせけり。興義足より病癒えて、杏の後天年をもて死りける。其の終焉に臨みて盡く所の鯉魚數枚をとりて湖に散せば、盡ける魚、紙鳶を離れて水に遊戯す。こゝをもて興義が繪、世に傳はらず。其の弟子成光なるもの、興義が神妙をつたへて時に名あり。閑院の殿の障子に鷂を盡きしに

○俎盤——魚肉を調理するに用ひる板。
○佛弟子——僧をいふ。
○物がたり云々——興義の話と先程の様子とを比較し考へるとの意。
○從者——「ジユウシヤ」の約音、召し仕はるゝ者。
○天年——天然の壽命。
○紙鳶——紙と絹、即ち畫きたる紙と絹。
○閑院殿——左大臣藤原冬嗣の邸、京都二條の南、西洞院の西、後に里内裏になる。
○古き物語——古今著聞集十一、門畫の篇に出づ。
○障子——屋内の室と室との仕切に立る建具。明(アカリ)障子、衝立(ツイタテ)障子、襖(フスマ)障子等あり、古は襖障子にいひ、後世

は陰子といへば單に卵陰子を指すにぎりの。

一生ける鶏この繪を見て跳たるよしを、古き物がたりに載せたり。

通釋　料理人は先づ私の兩眼を左手の指で強く捕へて、右手に鱠きすました刀を執つて、私を俎盤の上に載せて、既に切らうとした時に、自分は苦しさの餘りに大聲をあげて、佛に仕へるものを殺す例があるか、私を助けよ助けよと泣き叫んだが聞き入れないで、遂に切られると思つて夢が醒めたと話した。人々は大いに感じ不思議に思つて、興義の話について考へると、その度毎に魚の口が動くのは見たが、ちつとも聲を出さなかつた、こんなことを目の前に見たのは不思議なことだと云ふので、從者を家に走らして殘つた鮨を湖に捨てさせた。興義は是から病氣が治癒して、遙か後に天壽を全うして死んだ。其の死ぬ時に當つて、畫いた鯉の繪を五六枚湖中に散らすと、畫いた魚が繪絹から離れて、水中で游ぎ遊んだ。それで興義の繪は後世に傳はつて居ない。その弟子の成光といふものが興義の妙所を傳へてその時代に高名であつた。閑院の御殿の襖に鶏を畫いた處が、生きて居る鶏がこの繪を見て眞の鶏と思ひ跳つたといふ事が古い物語の書物に載せてある。

卷之三

佛法僧

浦安の國久しく、民作業を樂しむあまりに、春は花の下に息らひ秋は錦の林を尋ね、しらぬ火の筑紫路も知らではと枴枕する人の、富士筑波の嶺々を心にしむるぞ、そぞろなるかな。伊勢の相可といふ郷に、拜志氏の人世をはやく嗣に譲り、忌む事もなく頭おろして、名を夢然と改め、從來身に病さへなくて、彼此の旅寢を老の樂とす　季子作之治なるものが生長の頑なるをうれへて、京の人見するとて、一月あまり二條の別業に逗まりて、三月の末吉野の奥の花を見て、知れる寺院に七日ばかり語らひ、此のついでに、いまだ高野の山を見ず、いざとて、夏のはじめ青葉の茂みをわけつゝ、

○浦安の國――「心安の國の義。浦は假借の文字」日本國の美稱日本書紀「浦安國」とあり。
○作業――生業。
○錦の林――木々の紅葉せるをいふ。
○しらぬ火の――筑紫の枕詞。景行天皇筑紫におはして、海上を渡りたまへるとき、今の肥前、肥後のあたりに火の燃ゆるを見給ひて、その國を火の國と名づけ給ひしこと景行紀に見えたり。
○枴枕する人――船に乘りて旅行する人。
○そゞろ――非常に、何となく。

天の川（てん）といふより險（さが）えて、摩尼（まに）の御山（みやま）にいたる。道のゆくての險しきになづみて、おもはずも日傾（かたぶ）きぬ。

通釋　日本の國は久しく治まつて、人民は各々の生業を樂み働くの餘りに、春になれば花の下で遊び、秋には紅葉の錦の林に遊び、しらぬ火の燃ゆる九州路の樣子も知らないではと云つて舟旅をする人が、又富士や筑波の嶺も見たいと思ひ込むのも、面白く樂しいものである。伊勢の國の相可といふ里に、拜志氏といふ人があつた、その人は家世を早くに後繼者に讓つて、別に佛法に歸依したことでもないが剃髮して、名を夢然と改め、元來身に病氣さへなく健康なので、彼方此方に旅行するのを老後の樂みとして居た。末の子の作之治といふものの、性質が無風流なのを心配して、京都の人の樣子を見せようといふので、一ヶ月あまり京都の二條の別莊に逗留して、三月の末に吉野山の奥の櫻花を見て、知つて居る寺で七日ばかり逗まつて、此のついでに、未だ高野山を知らないから、さあ行つて見ようとの事で、夏の初めに、青葉の茂りを分けながら、天の川といふ土地を過きて、高野の御山に至つた。道が險しいので行き惱んで、思はずも日が暮れた。

○忌む事――佛の戒を守ること、即ち佛法に歸依すること。
○ひとゝなり　性質。
○頑――ねじけたる事、又無風流などの意。
○別業――別莊に同じ。
○吉野櫻花の名所、又南朝の朝庭ありし所。
○高野――紀伊國伊都郡の南部にある山、弘仁七年僧空海、金剛峰寺（コンガウブジ）を創設す。
○天の川――大和國吉野郡にあり。
○摩尼の御山　高野山の文飾。摩尼は梵語摩尼珠の略にて、如意珠と譯す。
○なづみて――滯り遲るの意にして、本條にては、行き惱みてと譯す。

○墳場――拜禮する場所。墳は土を盛り上げて築きたる祭場、又は式場。
○ふつに答ふる云々――すこしも答がない。ふつには、絶えての意。
○掟――風俗の意。
○此のよし云々――此の土地にては一夜の旅人を、宿めざる由を聞きて。
○僧坊――僧侶の住む家。
○便りなき人――傳手のない人。
○扶桑――日本國の異名。扶桑は太陽の出る處なり。古へ支那より我が國を指して云ひしによる。
○靈場――神社佛閣などある尊き地。
○大師――弘法大師。
○法施――佛法三施「財施、無畏施、法施」中の一、說教念佛等すること。

墳場諸堂靈廟、殘りなく拜みめぐりて、こゝに宿からむといへど、ふつに答ふるものなし。そこを行く人に、所の掟を聞けば、寺院僧坊に便なき人は、籠に下りて明すべし。此の山すべて旅人に一夜をかす事なしと語る。いかがはせむ、さすがにも老の身の、嶮しき山路を來りしがうへに、事のよしを聞きて、大きに心倦み疲れぬ。作之治がいふ、日もくれ足も痛みて、いかゞしてあまたの道を下らむ。弱き身は草に臥すとも厭ひなし。只病み給はむ事の悲しさよ。夢然云ふ、旅はかゝるをこそ哀れともいふなれ。今夜脚をやぶり、倦み疲れて山をくだるとも、おのが古郷にもあらず。翌のみち又はかりがたし。此の山は扶桑第一の靈場、大師の廣德語るに盡きず。殊にも來りて通夜し奉り、後世の事たのみ聞ゆべきに、幸の時なれば、靈廟に夜もすがら法施し奉るべしとて、杉の下道の小暗きを行

き〳〵、靈廟の前なる燈籠堂の簀の子に上りて、雨具うち敷き座を設けて、閑念佛しつゝも、夜の更けゆくをわびてぞある。

道標　境場や諸堂、靈廟などを殘る所もなく拜み廻つて、此所で宿を借りたいと云ふけれど、ちよつとも答へるものがない。そこを通る人にこの土地の樣を聞くと、寺院や僧坊に傳手のない人は、麓に下つて宿るがよい、此の山はすべて旅人に一夜の宿を貸す事はないと云ふ。どうしようか、さすがに老人の身で、嶮しい山路を越えて來た上に、かう云ふことをいて大いに心が疲れた。作之治が云ふに、日も暮れた上に足も痛んで、どうして多くの道を下ることが出來やうか、年若い自分は草の上に寢てもかまはない、が、只あなたが病氣になり給ふ事が悲しいと云ふと、ゞ然が云ふに、旅行はこんなことが哀れともいふのである。今夜脚を痛て、倦み疲れて山を下つた處が、自分の故郷でもない、それに又明日ゝ道もどの位あるか分らない。此の山は日本第一の靈場で、弘法大師の寶德は詞には盡きない、そのあらたかな靈場へ特にも來て通夜をして、後世の安樂を願ふべきであるのに、幸の時であるから、靈廟に終夜佛の供養をし奉らうと云ふので、杉が茂つた下道の薄暗い道を行き、靈廟の前

にある燈籠堂の竹椽に上つて、雨具を敷いて座席を設けて、靜かに念佛を唱へながらも、夜が更けて行くのを思ひわづらふて居た。

方五十町に開きて、あやしげなる林も見えず。小石だも掃ひし福田ながら、さすがにこゝには寺院遠く、陀羅尼鈴錫の音も聞えず。木立は雲をしのぎて茂りさび、道にさかふ水の音、ほそ〳〵と清み渡りて物悲しき。寢られぬまゝに夢然かたりていふ、そも〳〵大師の神化、土石草木も靈を啓きて、八百させあまりの今にいたりて、いよ〳〵あらたに、いよ〳〵たふとし。遺芳歷踪多きが中に、此の山なむ第一の道場なる。大師いまそかりける昔、遠く唐土にわたり給ひ、あの國にて感でさせ給ふ事おはして、此の三鈷のとゞまる所、我が道を揚ぐる靈地なりとて、杳冥に向ひて抛させ給ふが、はた此の山に止まりぬる。墳場の御前なる三鈷の松こそ、此の物の落ち止

○福田——佛敎に云ふ、諸種の福德を生ずる場所。三寶に福田、君父に恩田、貧者に悲田の三福田あり。

○陀羅尼——「梵語。能持、總持などの義。佛菩薩等の禪定より發する秘密の言句。一句一義の內に萬德を包藏すと云ふ。

○鈴錫——鈴はスヾ、錫は錫杖の略にて、僧侶修驗者の用ふる一種の杖。

○さかふ　境ふにて、さかひをなす。

○神化——神の敎化。

○遺芳——殘された善事。

○歷踪——遍歷したる芭跡。

○道場――修験成道の場所、後に堂、庵、精舎等、心静かに道を修する場所の汎稱。

○いまそかりける昔――在世の時。

○三鈷――両端が三股なる金剛杵（コンガウシヨ）の一種、密教の修法に用ゐる法具。

○本寺――管中の意。

○三鈷の松――もと和泉国仁徳社の左後にありしを、明神の高野山に移し植えしものと云ふ。

○善縁――善き功徳の手段。

○一世ならぬ――此の世だけではない。

まりし地なりと聞く。すべて此の山の草木泉石霊ならざるはあらずとなむ。ことよひ不思議にもこゝに一夜をかり奉つる事、一世ならぬ善縁なり。儞弱きとて努々信心怠るべからずと、小やかにかたるも、清みて心ぼそし。

通釋　五十町四方に打開いて、あやしさうな林も見えない。小石さへも掃除した福田ではあるが、さすがに此處は寺院も遠く、陀羅尼經を讀む聲も鈴や鉦を打鳴らす音も聞えない。樹木は雲の上に茂り合つて神さび、道の境をして流れる水の音も、ほそ〳〵と澄み渡つて物悲しい。寂られないので夢然が話すには、弘法大師が靈妙な力で敎化せられたので、土石や草木さへも心を開いて、八百年餘り後の今に至つて、益々祈らしく、いよ〳〵尊いことである。その大師が殘された善事や遍歴された尊跡の多い中で、此の山が第一の道場である。大師御在世の昔に、遠く支那に渡られて、彼の地で感ぜられた事があつて、此の三鈷のとゞまる所が、佛法を弘むる靈地であると云つて、空に向つて抛けられた三鈷が此の山に止まつた。境場の前の三鈷の松のある處が、その三鈷の止まつた地で

あると聞いて居る。一體此の山の草木泉石は、すべて靈驗のないものは無いと聞いて居る。今夜不思議に此所で一夜の宿をおかりした事も、此の世だけの善緣でない。お前は年が若いからと云つて、決つして佛法の信心を怠つてはならないと、細やかに話すにつけても、氣も澄んで心細い。

御廟のうしろの林にと覺えて、佛法々々となく鳥の音、山彦にこたへて近く聞ゆ。夢然目さむる心ちして、あなめづらし。あの啼く鳥こそ、佛法僧といふならめ。かねて此の山に棲みつるとは聞きしかど、まさに其の音を聞きしといふ人もなきに、今宵のやどり、まことに滅罪生善の祥なるや。かの鳥は清淨の地をえらみて、棲めるよしなり。上野の國迦葉山、下野の國二荒山、山城の醍醐の峰、河內の杵長山、就中この山にすむ事、大師の詩偈ありて世の人よく知れり。

○佛法僧——深山に棲む鳥にて、梟よりやゝ小。夜鳴く、其の聲「ぶつほうそう」と聞ゆと云ふ。

○山彦——山谷等にて、物の聲が、對面の峰に當つて、反響するを云ふ。こだま。

○滅罪生善の祥——罪を滅して、善を生ずる前兆。

○詩偈——偈は梵語「伽陀」の轉訛にて頌の義。主として四句よりなる佛詩。

○寒休云々——大師の文集遍照發揮性靈集十にあり。

寒林獨座ス草堂ノ暁。　三寶之聲聞ニ一鳥ニ。
一鳥有レリ聲人有レリ心。　性心雲水俱ニ了了。

又ふるき歌に、

松の尾の、峰しづかなる、曙に、
あふぎて聞けば、佛法僧啼く。

通釋　靈廟の後の林でと思はれて、佛法佛法と啼く鳥の音が山彦に響いて近く聞える。夢然は目が覺めるやうな心地がして、あゝ珍らしいことだ。あの啼いて居る鳥は佛法僧と云ふのであらう。以前から此の山に棲んで居るとは聞いて居たが、正にその啼く音を聞いたと云ふ人もないのに、自分等は聞くことが出來た、今夜こゝに宿つた事は誠に罪を滅し、善を生ずる前兆なのであらう。あの鳥は清淨の地を選んで、棲むといふことだ。上野の國の迦葉山、下野の國の二荒山、山城の國の醍醐の峯、河內の國の杵長山等に棲んで居るが、とりわけて此の高野の山に棲むといふ事は、大師の詩偈の中にあつて世の人がよく知つて居る。

淋しい林に獨座して草の庵で夜を明かす早暁に、佛、法、僧三寶の聲

○三寶――佛教にて佛、法、僧、の三を云ふ。又佛法僧の一名となる。
○靈心云々――鳥靈人心雲光水色法身の三密にあらざるなしの意で雲水は、雲や水の意に用ふ。了々は暁解なり。
○松の尾の云々――藤原光俊の歌。

があり、きく人にはこれを悟る心があつて、鳥の聲、人の心は共に雲光水色法身の三密でないものはないと理解することが出來た、といひ。又古い歌にも、

松の尼の峯が靜かに夜明けてゆく曉方に、峯を仰いで聞くと佛法僧が啼いてゐるのが聞える。

と云つてある。

むかし最福寺の延朗法師は、世にならびなき法華者なりしほどに、松の尼の御神、この鳥をして常に延朗につかへしめ給ふよしをいひ傳ふれば、かの神垣にも栖む由は聞えぬ。こよひの奇妙既に一鳥聲あり、我こゝにありて心なからむやとて、平生の樂みとする俳諧風の十七言を、しばしうちかたぶさていひ出でける。

鳥の音も、秘密の山の、茂みかな。

旅硯とり出でて、御燈の光に書いつけ、今一聲もがなと耳を傾くる

○延朗――天臺宗の僧、源義家四世の孫、三井寺永證の弟子となり法華に名を得し人。後に密教を受く。安元二年最福寺に住す。承元二年寂。

○法華者　法華行者。

○松の尼の御神――山城國葛野（カドノ）郡にあり。現在は官幣大社。祭神大山咋神（オホヤマクヒノカミ）市杵島姫神（イチキシマヒメノカミ）。

に、思ひがけずも、遠く寺院の方より、前を追ふ聲の嚴めしく聞えて、やゝ近づき來り、何人の夜深けて詣で給ふやと、異しくも恐しく、親子顔を見合せて息をつめ、そなたをのみまもり居るに、はや前驅の若侍、板橋をあらゝかに踏みてこゝに來る。

通釋　昔最福寺の延朗法師は、世に二人とない法華行者であつたので、松の尾の神が、此の鳥を常に延朗に仕へさせられたといふ事を云ひ傳へてゐるので、かの松の尾の社にも棲んでゐると云ふことである。今夜不思議なことに既に三寶を唱へる一鳥の聲を聞いたのに、自分は無關心で居られやうかと云つて、平常の樂みとしてゐた俳諧風の十七文字の歌を、暫く思案して云ひ出した。

鳥の啼く音にさへも、秘密の音がある、この神祕な山の茂みよ。

旅硯をとり出して、御燈の光で書きつけ、今一聲ないてくれゝばよいがと耳を傾けて聞きすますと、思ひがけもなく遠い寺院の方から、先を拂ふ聲がおごそかに聞こえて、次第に近づいて來る、誰方がこの深夜に詣でなさるのかと思ふと、恐ろしくもあり又不思議で、親子は顔を見合せ、

○神垣――神社の周圍の垣。
○うちかたぶく　思案する。
○旅硯――旅中に携ふる小さき硯、多くは木製。
○前を追ふ――往來の先拂を行ふ。
○まもる――見つめる。
○前驅――行列の先拂ひをする供の者。

息を凝らして、その方を見つめてゐると、はやくも前驅の若侍が、板橋を足音高く踏んで此處に來る。

おどろきて堂の右に潛みかくるゝを、武士はやく見つけて。何者なるぞ。殿下の渡らせ給ふ。疾く下りよといふに、あわたゞしく簀子を下り、土に俯して跪まる。程なく多くの足音聞ゆる中に、音高く響きて、烏帽子直衣めしたる貴人、堂に上り給へば、從者の武士四五人ばかり、右左に座を設く。かの貴人人々に向ひて、誰々はなど來らざると仰せらるゝに、やがてぞ參りつらめと奏す。又一群の足音して、威儀ある武士、頭圓げたる入道等、うち交りて、禮たてまつりて堂に昇る。貴人たゞ今來りし武士にむかひて、常陸は何とておそく參りたるぞとあれば、かの武士いふ、白江熊谷の兩士、公に大御酒すゝめたてまつるとて、實やかなるに、臣も鮮き物一種

○殿下――皇太子、皇后、皇太后、太皇太后に對する敬稱。大寶令に「率土之内、於二三后一皇太子一上啓、稱二殿下一」とあり。之に太子、三后に直接に啓するは畏多き故、其殿下にある人に言上する意より出づ。後世攝政關白にも此の稱を用ふ。

○烏帽子――冠の一種。多種あり。

○直衣――「ノウシ」と發音す。貴人常用の略服、形袍に似て、地は主に綾、平絹等を用ふ。其の烏帽子を用ふる場合を「烏帽子直衣」といひ、冠を用ひるを「冠直衣」といふ。桃花紫葉に「烏帽子直衣、大納言以上參院之時著レ之」とあり。

調じまゐらせむため、御從に後れたてまつりぬと奏す。はやく酒微をつらねてすゝめまゐらすれば、萬作酌まゐれとぞ仰せらる。恐まりて美相の若士膝行よりて、瓶子を捧ぐ。かなたこなたに杯をめぐらしていと興ありげなり。貴人又曰はく、絶えて紹巴が說話を聞かす。召せと宣ふに、呼びつぐ樣なりしが、我が跪まりし背の方より大なる法師の面うち平めきて、目鼻あざやかなる人の、僧衣かいつくろひて、座の末にまゐれり。貴人古語かれこれ問ひ辨へ給ふに、詳に答へたてまつるを、いと〳〵感でさせ給うて、他に祿とらせよと宣ふ。

通釋　驚いて燈籠堂の右の方にかくれるのを、武士は早くも見つけて、何者だ、殿下が來られるから、早く下へ下れと云ふので、あわてゝ椽を下り土の上に伏して跪まると、間もなく多くの人の足音が聞える中に、齊の音を高くひゞかして、烏帽子に直衣を召された貴人が、堂上に上られる

○入道——佛道に入りて修行するをいひ、又其の人をいふ。
○常陸——木村常陸介。
○美相——容貌の美しき。
○瓶子——形細く長く、口の狹き瓶、酒を盛るに用ふ。
○紹巴——里村紹巴。連歌の名人にて、號江齋又は牛醉子と稱す。初め明智光秀に仕へ、豊臣氏にも仕へ、連歌を好みしを以つてこれに仕ふ。慶長五年歿。
○祿——褒美として當座の賜物。

と、御供の武士か四五人程、左右に座を設うけた。彼の貴人が武士達に向つて、誰々はどうして來ないのかと仰せられると、今に參りませうと申し上げた。そこへ又一群の足音がして、威光のある武士、頭を圓くした入道等がうち交つて、敬禮をして堂に昇つた。貴人は今來た武士に向つて、常陸はどうして遲く來たのかと云はれると、彼の武士が云ふには白江熊谷の兩人が、君にお酒を差し上げようと云つて、實やかに用意をしてゐるので、私も新しい魚を一種とゝのへ差し上げる爲に、お供に遲れたてまつたと申し上げた。そして早速に酒肴を列べてお進めすると、貴人は、萬作酌をせよと仰せられた。曳れ入つて容姿の美しい若士かゞざりよつて、瓶子を捧げた。あちらこちらに杯を廻らして大變面白さうである。貴人が又云ふには、この頃は紹巴の話を少しも聞かない、彼を召し出せと仰せられると、これを呼び傳へる樣子であつたが、夢然が跪まつてゐる後の方から、大きな法師で顏は平たくて、目鼻がはつきりしてゐる人が、僧衣の衣紋を正して座の末の方に來た。貴人はこの法師に昔の事をあれこれと問はれると、詳細にお答へをするので、非常に感心されて、彼に祿を與へよと云はれる。

一人の武士、かの法師に問ひていふ、此の山は大徳の啓き給うて、土石草木も霊なきにあらずと聞く。さるに玉川の流れには毒あり、人飲む時は斃るゝが故に、大師のよませ給ふ歌とて、

わすれても、汲みやしつらむ。旅人の、

高野の奥の、玉川のみづ。

といふことを聞き傳へたり。大徳のさすがに此の毒ある流をば、など涸ては果し給はぬや、いぶかしき事を、足下にはいかに辨へ給ふ。法師笑をふくみて云ふは、この歌は風雅集に撰み入れ給ふ。其の端詞に、高野の奥の院へまゐる道に、玉川といふ河の水上に、毒蟲おほかりければ、この流を飲むまじき由を示しおきて後、よみ侍りけると、ことわらせ給へば、足下のおぼえ給ふごとくなり。されど、今の御疑ひ僻言ならぬは、大師は神通自在にして、隠神を役し

○大徳――「ダイトコ」と訓む。僧の修行積つて徳高きもの、稱、大聖人。本條は弘法大師を指す。

○わすれても云々――風雅集雑中にあり、詞書に「高野の奥の院へ參る道に玉川といふ河の水上に毒蟲の多かりければ、この流を飲むまじき由を示し置きて後によめる」とあり。

○涸す――からす。

○風雅集――風雅和歌集光明天皇貞和二年に花園上皇の御選、二十巻あり。

○僻言――まちがつた言。

○神通自在――神變不思議に自在に、すべてのものをなす事の出來る力。佛敎に六神通あり。
○隱神――俗人の目に見えぬ鬼神。
○鐃――音「セン」きる。うがつ。

て道なきを開き、巖を縛には士を穿つよりも易く、大蛇を禁しめ、化鳥を奉仕しめ給ふ事、天が下の人の仰ぎたてまつる功なるを思ふには、この端の詞そまことしからね。

通釋　一人の武士が彼の法師に問ふには、此の山は弘法大師が開かれて、千石草木と雖もあらたかでないものはないと聞いてゐる。しかるに玉川の水には毒がある、人が之を飲む時は斃れるから、大師がお詠みになつた歌だといつて、

旅人がこの流に毒があるといふことを、忘れて汲んで飲むかも知れない、この高野の奥の玉川の水。

といふ歌を聞き傳へてゐる。さすがの大德ある大師が、此の毒のある流をどうして淸して仕舞はれなかつたのであらうか、この不思議な事を、あなたはどうお考へになるかといふと、法師は笑顏をしていふには、此の歌は風雅集に選み入れられてゐる。その詞書に、高野の奥の院へ詣る道で、玉川といふ河の水上に毒蟲が多かつたから、この流の水を飲んではならない事を戒めておいて、その後に詠んだと、ことわりをしてゐられるから、あなたが知つて居られる通りである。けれども今の御疑ひが

まちがつた言でないことは、つきの事でわかる。即ち大師は神通自在で隠神を使つて、道の無い所を開き、巌をほりぬくには土をほるよりも易く、大蛇を禁じて、化鳥をも仕へさせられる事は、世の人が大師を仰ぎ尊ぶ徳であるのを思ふと、此の歌の詞書は誠とも思はれない。

もとより此の玉川てふ川は、國々にありて、いづれをよめる歌も其の流のきよきを挙げしなるを思へば、こゝの玉川も毒ある流にはあらで、歌の意も、かばかり名に負ふ河のこの山にあるを、こゝに詣づる人は忘る〳〵も、流れの清きに愛でて、手に掬びつらむとよませ給ふにやあらむを、後の人の毒ありといふ狂言より、この端詞はつくりなせしものかとも思はるゝなり。又深く疑ふときには、此の歌の調今の京の初の口風にもあらず。おほよそ此の國の古語に、玉藻、玉垂、珠衣の類は、形をほめ清きを賞むる語なるから、清水をも玉水、玉の井、玉河ともほむるなり。毒ある流れをなど玉てふ

○玉川てふ――六玉川とて玉川六ヶ所あり。皆歌の名所。井出玉川（山城）野路玉川（近江）井手玉川（摂津）高野玉川（高野山）調布玉川（武蔵）野田玉川（陸前）

○狂言――道理にあはぬ妄説。「タハコト」の意。

○今の京の初――平安朝初期。

○口風――歌の調子。

○玉藻――昔玉を緒に貫きて頸に掛けて飾としもゝ。

○玉垂――玉簾（タマスダレ）にて屋の美称。玉は接頭語。

○珠衣――美衣。
○など――副詞。何として。
○強に――むりに。

語は冠らしめむ。強に佛をたふとむ人の、歌の意に細妙からぬは、これほどの訛は幾らをもしいづるなり。足下は歌よむ人にもおはせで、この歌の意翼しみ給ふは、用意ある事にこそと爲く感でにける。貴人をはじめ、人々も此のことわりを頻りに感でさせ給ふ。

通釋　元來この玉川といふ川は、諸國にあつて、どの玉川を詠んだ歌ても、その流が清らかなのを譽めたのであるのを思うと、此所の玉川も高のある川ではなくて、歌の意味も、これ程に名高い川が、この山にあることを、こゝに參詣する人は忘れても、この玉川の流が清らかなのを愛して手にすくひ上けて飲むであらうと詠させられたのであらうのを、後世の人の毒があるといふ狂言から、この端詞が作り出されたものかとも思はれるのである。又深く疑ふと、この歌の調子は平安朝初期の時代の口調でもない。凡そ古への言葉の、玉鬘、玉垂、珠衣等の種類は、形をほめ清らかなのを賞める詞であるから、清水をも玉水、玉の井、玉河とも言つてほめるのである。毒がある流れにどうして玉といふ字を冠らせやうか。專心に佛を尊ぶ人で、歌道の理に精通しないものは、これ程の誤は

幾らも仕出すものである。おん身は歌を詠む人でもないのに、この歌の意味を疑はれたのは、心掛がある事だと非常に感心された。貴人を初めとし多くの人々もこの道理を頻りに賞められた。

御堂のうしろの方に、佛法々々と啼く音近く聞ゆるに、貴人杯をあげ給ひて、例の鳥絶えて鳴かざりしに、今夜の酒宴に祭あるぞ。紹巴いかにと仰せ給ふ。法師かしこまりて、某が短句公にも御耳すゝびましまさむ。こゝに旅人の通夜しけるが、今の世の俳諧風をまうして侍る。公にはめづらしくおはせむに、召して聞せ給へといふ。それ召せと仰せらるゝに、若きさむらひ夢然が方へ向ひ、召し給ふぞ近う參れと云ふ。夢現ともわかで、おそろしきまゝに、御まのあたりへ這ひ出づる。法師然夢に向ひ、前によみつる詞を公に申し上げよといふ。夢然恐る〳〵、何をか申しつる。更に覺え侍らず。

○短句――語數の少き句「長句に對して」。俳句。
○御耳すゝびら云々――御耳なれ給はむの意。すゝびは古くなること。

只赦し給はれといふ。法師かさねて、秘密の山とは申さゝるや。殿下の問はせ給ふ、急ぎ申し上げよといふ。夢然いよ〳〵恐れて、殿下と仰せ出され侍るは、誰にてわたらせ給ひ、かゝる深山に夜宴をもよほし給ふや。更にいぶかしき事に侍るといふ。法師答へて、殿下と申し奉るは、關白秀次公にてわたらせ給ふ。人々は木村常陸介、雀部淡路、白江備後、熊谷大膳、粟野杢、日比野下野、山口少雲、丸毛不心、隆西入道、山本主殿、山田三十郎、不破萬作、かく云ふは紹巴法橋なり。汝等不思議の御目見え仕まつりたるは、前の言葉いそぎ申し上げよといふ。

通釋　御堂の後の方で佛法〳〵と喧く聲が近く聞えると、貴人は杯を取りあげられて、例の馬が少しも啼かなかつたのに、今啼くは、今夜の酒宴に榮がある。紹巴はどう感じるかと仰せられると、法師は提れ入つて、私の短句は公にも、御耳なれになつてお珍らしくはないだらう。こゝに旅

○秘密の山――眞言宗の山。
○わたらせ給ひ　おはし給ひ。
○いぶかしき　疑はしき。怪しき。
○關白――「クワンパク」と訓む。關（アヅカ）り白（マヲ）すとの義にて、萬機に關與し、意見を啓白する重職。藤原氏以外の者のこれに補せられしは、豐臣秀吉、秀次の二人あるのみ。
○秀次――三好一路の子、秀吉の甥、秀吉に養はれ、遂に關白となる、されど素行修らず、秀吉の子秀賴の生るゝに至り遂に官爵を奪はれ、文祿元年七月十四日高野山に自刃す。
○木村常陸介――以下すべて大阪城の勇士。
○法橋――僧位の第三等近古文人醫者は僧に準せられたるによる。

人が通夜をして居るが、當世風の俳諧を申した、公には珍らしいことであらうから、お召しになつて聞き給へと云つた。その者を召せと仰せられると、若い士が夢然の方に向つて、召して居られる、近くへ參れと云ふ。夢か現ともわからないで、恐る〳〵、殿下の方へ這ひ出た。法師は夢然に向つて、前程詠んだ句を君に申し上げよといふ。夢然は恐る〳〵何を申したか、少しも覺えず、只許し給へと云ふと、法師は重ねて祕密の山とは申さなかつたか。殿下のお問だ、早く申し上げよといつた。夢然はいよ〳〵恐れて、殿下と仰せられるのは、何誰でいらせられて、こんな深山で夜宴を催されるか、一向に不思議な事だといつた。法師が答へていふには、殿下と申し上ける方は、關白秀次公でいらせられる。お供の人々は木村常陸介、雀部淡路、白江備後、熊谷大膳、粟野左、日比野下野、山口少雲、丸毛不心、隆西入道、山本主殿、山田三十郎、不破萬作、かくいふ自分は紹巴法橋である。汝等は不思議のお目見えをした事だ。前の詞を早く申し上けよといつた。

頭に髪あらば、太るべきばかりに凄じく、肝魂も空に返る心地して、振ふ〳〵頭陀袋より清き紙取り出でて、筆もしどろに書きつけてさし出すを、主殿取りてたかく吟じ上る。

鳥の音も、秘密の山の、茂みかな。

貴人聞かせ給ひて、口がしこくもつかまつりしな。誰ぞ此の末句を申せとのたまふに、山田三十郎座をすゝみて、某つかうまつらむとて、しばしうちかたぶきてかくなむ、

芥子たき明す、みじか夜の牀。

いかゞあるべきと紹巴に見する。よろしくまをされたりと、公の前に出すを見給ひて、片羽にもあらぬはと興じ給ひて、文杯を挙げてめぐらし給ふ。

○頭に云々――夢絵が頭をおろして居るにより恐ろしさの形容に書きたり。
○頭陀袋――頭陀行をなす僧の鉢、食器その他の用具を入れて頸より前にかくる袋。頭陀は梵語にて、修治、洗浄、浄等と訳す。修行の生活の義。
○しどろに――次第もなく打乱れて。
○しばし云々――少時考へて。
○芥子たき明す――邪気祈禱の護摩に芥子を焚くより假りていふ。
○片羽――不完全。

通釋　夢然は若し頭に髪の毛があつたならば、恐しさの爲め太る程すごく、肝も魂も身に添はず空にかへるやうな心地がして、ふるへ〳〵頭陀袋から清らかな紙を取り出して、筆もしどろに書きつけてさし出すのを、主殿が受け取つて高い聲で詠み上げた。

鳥の音さへも秘密の音をして啼く山の茂りよ。

貴人はきかれて、口賢くも詠んだな。誰れか此の下の句を申せと仰せられると、山田三十郎が座をすゝみ出て、私が下の句を申さうといつて、少時考へて居たが次のやうに末句をつけた。

佛に斧子を焚いて奉つて夜通し明かした、みじかい夜の床よ。

とつけて、どうであらうかと紹巴に見せた。よく詠まれたといつて、公の前に出すのを御覽になつて、まんざら惡い句でもないと面白がつて、又杯を取り擧けて廻らされた。

淡路と聞えし人、にはかに色を違へて、はや修羅の時にや。阿修羅ども御迎へに來ると聞え侍る。立たせ給へといへば、一座の人々忽ち面に血を濯ぎしごとく、いざ石田增田が徒に、今夜も泡吹かせ

○修羅の時――阿修羅の迎ある時。

○阿修羅――梵語。阿は非、修羅は人の義にて非天、無端正などと譯す。印度の鬼神の一。

前世にて、我慢、猜忌の念深んなりしより、死後日毎に三時の間銅鉄、劍戟等の苦を受くること一萬劫な経といふ。

○石田、増山――石田三成、増山長盛。

○泡ふかせむ――露かしなやます。

○よしなき奴――つまらない者。

○しのゝめの――あくの枕詞。

○せはしく――絶間なくの意。

○薬鉄――薬や鉄。鉄は鍼灸の用ひる、金銀の針。

○悪逆塚――淵白秀次を葬りたる塚。

むと勇みて立ち躁ぐ。秀次、木村に向はせ給ひ、よしなき奴に我が姿を見せつるぞ。他二人も修羅につれ來れと課せある。老臣の人々かけ隔たりて、聲をそろへ、いまだ命つきざる者なり。例の悪業なせさせ給ひそといふ詞も、人々の形も、遠く雲井に行くがごとし。親子は氣絶えて暫時がうち死に入りけるが、しのゝめの明けゆく空に、ふる露の冷やかなるに生き出でしかど、いまだ明けきらぬ恐しさに、大師の御名をせはしく唱へつゝ、漸日出づると見て、急ぎ山を下り、京にかへりて薬鉄の保養をなしける。一日夢然三條の橋を過ぐる時、悪逆塚の事思ひ出づるより、かの寺眺められて、白昼ながら物凄じくありけると、京人に語りしを、そがままにしるしぬ。

通釋　淡路といつた人が、俄に顔色を變へて、早やくも阿修羅の迎がある時だらうか、阿修羅達が御迎へに來たと見える。早く立ち給へといふと、

一座の人々は忽ちに顔に血をそゝいだやうになつて、さあ石田や増田の徒に、今夜も泡を吹かさせてなやましてやらうといつて、勇んで立ちさわいだ。秀次公は木村に向はれて、つまらない者に自分の姿を見せた事だ、彼等二人も修羅界に連れて来いと仰せられた。すると老臣の人々が秀次公の前を隔てゝ、聲をそろへて、まだ寿命がつきない者である、又何時もの悪事をなさるなといふ詞も、人々の形も、遠くの雲の方に行くやうだ。忽然親子は氣絶して少時の間は息も絶えて居たが、夜が明け行く空に、降つて来る露の冷やゝかなのに氣がついて蘇生はしたが、まだ夜が明けきらない恐ろしさに、大師の御名を絶間なく唱へながら夜明を待つて、漸く日が出ると見て急いで山を下り、京都に歸つて藥や鍼の治療をした。ある日夢然が三條の橋を通る時に、悪逆塚のことを思ひ出すと彼の寺が眺めやられて、ま悪ながら物すごかつたと、京の人に話したのを、そのまゝに書つけた。

吉備津の釜

妬婦の養ひがたきも、老いての後其の功を知ると。誰是何人の語ぞや。害の甚だしからぬも、商工を妨げ物を破りて、垣の隣の口をふせぎがたく、害の大なるに及びては、家を失ひ、國をほろぼして天が下に笑を傳ふ。いにしへより此の毒に中る人、幾許といふ事を知らず。死して蟒となり、或は霹靂を震うて怨を報ゆる類は、其の肉を醢にするとも、飽くべからず。さるためしは稀なり。夫の己をよく修めて敬へなば、此の患のおのづから避くべきものを、只かりそめなる徒ごとに、女の慳しき性を怒らしめて、其の身の憂をもとむるにぞありける。禽を制するは氣にあり、婦を制するは其の夫の

○妬婦――妬は妬に同じにて、羞みて惡むこと「オタム」と訓す。
○商工――「ワタラヒ」は生活にて、商工業にて生活する意の當字。
○口――「ソシリ」に「誹」にて、惡く云ひなす事。
○蟒――「ミヅチ」龍の屬、蛇に似て四脚ありとぶふもの。
○霹靂――「ハタタガミ」（カミ）にて、雷の烈しきもの。
○醢――肉醬。肉もて作れる、今のしほからの類。和名「ひしほ」、肉之比之保、肉醬也。
○慳しき――心のねじけたる。

雄々しきにありといふは、現にさることぞかし。

通釋　嫉妬心の強い女は養ひ難いけれども、老年になつてからその功がわかると、これは誰が云つた語であらうか。嫉妬の害は甚だしくないものでも、自分の職業の防となり、萬事を破壞して近隣の人の誹は免れない。その害の大きなものは、家を失ひ、國を滅ぼして天下の笑草となるものである。古から此の嫉妬の害毒にあたつた人は、幾らあるか分らない程多い。嫉妬の爲めに死んだ後に蟒となつたり、或は烈しい雷を震はして怨を晴らした類は、そのものゝ肉を臠にしても、飽き足らないものである。がさう云ふ例は少ない。夫が自分の身をよく修めて女に教へるならば、此の嫉妬の心配は自然と避けられるものであるのに、只ちよつとした徒事で、女の心ねぢけした性質をいよ〳〵強くさして、自分の身になけきを求めるのである。鳥類を仕付けるのはその人の氣でするものだ、女を制するのは其の夫が男らしいことにあると云ふのは、實にその通りである。

吉備の國賀夜郡庭妹の郷に、井澤庄太夫といふものあり。祖父は播磨の赤松に仕へしが、去ぬる嘉吉元年の亂に、かの館を去りて

○吉備の國――備前、備中、美作（ミマサカ）、備後地方の古稱。

こゝに來り、庄太夫にいたるまで、三代を經て漸耕し秋收めて、家豊に暮しけり。一子正太郎なるもの、農業を厭ふあまりに、酒に亂れ色に耽りて、父が掟を守らず。父母これを歎きて私にはかるは、あはれ良人の女子の貌よきを娶りてあはせなば、稼が身もおのづから修まりなむとて、あまねく國中をもとむるに、幸に媒氏ありていふ、吉備津の神主香央造酒が女子は、うまれだち秀麗にて、父母にもよく仕へ、かつ歌をよみ、箏に巧なり。從來かの家は吉備の鴨別が裔にて、家系も正しければ、君が家に因み給ふは果吉祥なるべし。此の事の就らむは老が願ふ所なり。大人の御心いかにおぼさむやといふ。庄太夫大に悦び、よくも說かせ給ふものかな。此の事我が家にとりて、千年の計なりといへども、香央は此の國の貴族にて、我は氏なき田夫なり。門戸敵すべからねば、恐くは肯がひ給はじ。

○賀夜郡庭妹——今の賀陽郡庭瀬。
○赤松——播磨の名族。
○嘉吉元年の亂——百一代、後花園天皇の御宇に、赤松滿祐、足利將軍義教を弑せし亂。
○父母——「タラチネ」は乳して足らはし育つる意なるより、母にかけて云ふ枕詞。本條にては兩親の意。
○あはれ——願望を表はした感歎詞。
○良人——身柄よき人。
○吉備津宮——備中賀陽郡眞金村にあり、吉備津彦命を祀れり。
○箏——古く「サウノコト」といふ。七絃琴。
○吉備の鴨別——四道將軍吉備武彦の子孫。
○家系——家の系統。
○因む——緣組をする。
○吉祥——「ヨキサガ」「吉兆(ヨキシルシ)」の意。
○大人——長老の尊稱。
○氏なき田夫——姓氏さへもなき百姓。

媒氏の翁笑をつくりて大人の諫り給ふ事甚し。我必ず萬歳を謳ふべしと、往きて香央に說けば、彼方にもよろこびつゝ、妻なるものにも語らふに、妻もいさみていふ、我が女子既に十七歳になりぬれば、朝夕によき人がな娶せむものをと、心もおちゐ侍らず、はやくHをえらみて、聘禮を納れ給へと、強にすゝむれば、盟約すでになりて井澤にかへりごとす。卽て聘禮を厚くとゝのへて送り納れ、よきHをとりて、婚儀をもよほしけり。

通釋　吉備の國賀夜郡庭妹の里に、井澤庄太夫といふものがあつた。祖父は播磨の國の赤松氏に仕へて居たが、去る嘉吉元年の戰亂に、赤松氏の領を去つてこの地に來て、庄太夫に至るまで、三代を經て、春が來れば田を耕し秋が來れば收獲して、家は豐に暮してゐた。庄太夫の一子正太郎といふものは、農業を厭ふたうへに、酒色に耽つて、父の教へを守らない、父母はこれを歎いて私に相談するには、どうかして良家の女子で美貌の人を娶つて夫婦にすれば、正太郎の操行も自然に修まるであらうと

○門戸　家柄。
○肯がひ　承諾。
○萬歳　「マンセイ」と訓む。「バンザイ」と訓むは明治以後なり。祝意を表するに用ふ。
○よき人がな——人もがなの略語で人もあつて欲しいの意。
○聘禮——婚約の時兩家互に物品を贈りかはす禮。結納。

云ふので、くまなく國中を探し求めると、幸ひに媒介者があつて云ふには、吉備津神社の神主香央造酒の娘は、天性美貌であつて、父母にもよく仕へ、又歌も詠み、琴も上手である。元來あの家は吉備の鴨別の末裔で、家系も正しいことであるから、君の家と緣組させるのは、又吉いことであるだらう。この婚約が成立することは私の願ひである。あなたの御考へはどうであるかと云ふ。庄太夫は大に喜んで、よく云つて下さつた。この事が成立すれば我が家に取つては永く榮える計りであるけれども、香央は此の國の上流の家柄であつて、自分は姓氏さへない百姓である。家柄が釣り合はないから、大抵は承諾なさるまいと云ふ。媒介者の老人は笑つて、あなたの謙遜も又甚だしい。自分はきつとこの婚儀を成立させて萬歲をうたふと云つて、吉備津の香央方へ行つて說くと、香央の方でも喜びながら妻にも相談すると、妻も喜び勇んで云ふには、娘ももう十七歲になつたから、朝夕よい人もあつて欲しい、結婚させやうものをと思つて、心も落付かない、早く吉い日を選んで、結納をいれなさいと、非常にすゝめるので、緣組の約束も出來て、井澤に返事をした。やがて結納の禮を厚くして送り納れて、吉日を選んで、婚禮の式を擧けようとした。

猶、幸を神に祈るとて、坐子祝部を召し集めて、御湯をたてまつる。そも〳〵當社に祈誓する人は、數の祓物を供へて、御湯を奉りて、吉祥凶祥を占ふ。坐子祝詞終り、湯の沸き上るに及びて、吉祥には釜の鳴る音、牛の吼ゆるが如し。凶しきは釜に音なし。是を吉備津の御釜祓といふ。さるに香夫が家の事は、神の祈させ給はぬにや。只秋の蟲の聲にすだくばかりの聲もなし。こゝに疑をおこして、此の祥を妻に語らふ。妻更に疑はず。御釜の音なかりしは、祝部等が身の清からぬにぞあらめ。既に聘禮を納めしうへ、かの赤繩に繋ぎては、仇ある家、異なる域なりとも易ふべからずと聞くものを、殊に井澤は弓の本末をも知りたる人の流にて、掟ある家とけ聞ば、今否むとも承がはじ。殊に佳婿の麗なるをほの聞きて、我が兒も日を數へて待ちわぶる物を、今のよからぬ言を聞くものならば、不慮な

○巫子――「カムナギ」の音便。神を招き祀り、神樂を奏しなどする人。「巫」は女に用ひ、男には「覡」の字を用ふ。

○祝部――神に仕ふる人すべて古代の神社の神職。

○御湯を云々――湯立（ユタテ）をすること。湯立は、巫女が神前にて行ふ式にて、熱湯を沸かして、その湯によつて吉凶を占ふ。

○祓物――災禍を祓ひ除かむ爲に、神に供ふる物。

○祝詞――神に告（ノ）り申す詞。

○すだく――多く集ること。鳴く意とするは誤りなり。

○赤繩――夫婦の緣を結ぶこと。月下氷人（月下老人）との異語にて、緣結びの神が神の繩を以て夫婦の足に繋ぐ故事。

る事をや仕出でむ。其の時悔ゆるとも返らじと、言をつくして諫むるは、まことに女の意ばへなるべし。香央も從來ねがふ因みなれば深く疑はず。妻のことばに從きて、婚儀とゝのへ、兩家の親族氏族鶴の千とせ龜の萬代をうたひことぶきけり。

通釋　尙この上に幸福を神に祈らうと云ふので、巫子や神官を召し集めて、御湯を奉つた。そも〳〵この神社にお祈りをする人は、多くの供物をして、御湯を奉つて、吉凶のしるしを占ふのである。巫子の祝詞が終つて湯が沸き上つてくると、吉兆の時には釜の鳴る音が牛の吼えるやうで、凶兆の時には釜に音がしない。是を吉備津の御釜祓と云ふ。然るに香央の家の事は、神がお受けにならないのか、只秋の蟲が叢に集つて鳴く程の聲もしない。そこで疑をおこして、此の兆を妻に話した。妻は少しも疑はないで、御釜の音がしなかつたのは、神官等の身が清くなかつたのであらう。最早結納を納めた上、あの緣を結んだからは、たとへ仇のある家でも、又異國の家でもその約束は易へることは出來ないと聞いて居るのに、殊に井澤家は武家の末裔で、捷がある家だと云ふから、今こと

○仇ある家云々――搜神怪錄に「此以娶二夫婦之足一、雖二仇家異域一、繩一繫レ之、終不レ可レ易」とあり。
○弓の本末云々――武術の心得ある者の意にて、本條にては武家の子孫であるとの意。
○佳婿――「ムコガネ」は孫めむこと思ひ設けたる人。佳婿は當字。
○龜――「アテ」は高貴の意にて、美龜の意にあらず。
○鶴の千とせ――壽命の長きを祈ること。

わつても承知をしないだらう。殊に婿の上品なのをかすかに聞いて、娘も結婚の日を数へて待つて居るものを、今のよくないことを聞いたならば、萬一の事を仕出すかも知れない。其の時になつて後悔しても取り返しがつくまいと云つて、言葉をつくして諫めたのは女の心であらう。香央も素より願つた緣であるから、深くも疑はないで、妻の詞に從つて、婿儀をとゝのへて、兩家の親類一族が、末々まで榮えるやう祝ひうたつた。

香央の女子磯良、かしこに往きてより、夙に起きおそく臥して、常に尼姑の傍を去らず。夫が性をはかりて、心をつくして仕へければ、非澤夫婦は孝節を感でたしとて、歡びに耐へねば、正太郎も其の志に愛でて、むつまじくかたらひけり。されどおのがまゝの妊たる性はいかにせむ。いつの頃より鞆の津の袖ごいふ妓女に、ふかくなじみて、遂に聘ひ出し、ちかき里に別莊をしつらひ、かしこに日をかさねて、家にかへらず。磯良これを怨みて、或は尼姑の恐に托

○性——性質。
○はかる——考へる。
○孝節——よく親に孝ふる貞情。
○かたらふ　語りあふ。
○おのがまゝ——わがまゝ。
○妊たる性　放蕩なる性質。
○鞆の津——備後の國の港。
○聘ひ出し　妓女の身代金(ヘミノソロキン)を出して請け出して。

○かこてども――わび歎けども。

○大虚――上の空にのみと云ふに同じ。しかと心に留めざる事の貌。

○朝夕の奴云々――「ツブネ」は下男にて。下男のするやうな仕事もの意。

せて諫め、或日は徒なる心をうらみかこてども、大虚にのみ聞きなして、後は月をわたりてかへり来らず。父は磯良が切なる行止を見るに忍びず、正太郎を責めて押籠めける。磯良これを悲しがりて、朝夕の奴も殊に賞やかに、かつ袖が方へも私に物を贈りて、信のかぎりをぞつくしける。

通釋　香央の娘の磯良は、井澤に嫁してからは、朝は早く起き夜はおそく臥して、常に舅姑の傍を離れず。夫の性質を考へて、歡びに耐へないから、正太郎も磯良の志を感じ愛して、睦じく話りあつた。けれども正太郎の我がまゝな放蕩性は何うすることも出來ない。何時の間にか鞆の津の袖と云ふ遊女と、深いなじみになつて、遂に袖を請け出して、吉備津の近い里に別莊を造つて、そこに永く逗つて、家に歸らない。磯良はこれを怨んで、或は舅姑の怨にことよせて諫めたり、又ある時は正太郎の徒な心を恨み歎いたが、正太郎は上の空に聞きながして、後には一月以上も歸つて來

ない。父は磯良の眞心ある行を見るに見かねて、正太郎を責めて押し留めた。磯良はこれを悲しんで、朝夕正太郎に仕へることも殊にまめ〳〵しく、又袖の方へも密に物を贈つて、誠心のありたけを盡した。

一日父が宿にあらぬ間に、正太郎磯良を語らひていふ、御許の信ある操を見て、今はおのれが身の罪をくゆるばかりなり。かの女をも古郷に送りて後、父の面を和め奉らむ。渠は播磨の印南野の者なるが、親もなき身の淺ましくあるを、いとほしく思ひて、憐をもかけつるなり。我に捨てられなば、はた船泊の妓女となるべし。おなじ淺ましき奴なりとも、京は人の情もありと聞けば、渠をば京に送りやりて、榮ある人に仕へさせたく思ふなり。我かくてあれば萬に貧しかりぬべし。路の代、身にまとふ物も誰かはかりごとしてあたへむ。御許此の事をよくして、渠を惠み給へと、ねんごろにあつら

○語らふ——本條にては惡意を以て語る意。
○御許——對稱の代名詞親しみて云ふ。
○和め——穩に落付けむ仰慕嫉を直すとの意。
○淺ましく——詰く程の不仕合にて。
○いとほしく——不便に思ふ。
○妓女——「ウカレメ」は遊女。
○淺ましき奴——卑しい稼業をする者の意にて遊女のつとめを指す。
○榮ある人——「ヨシアル」は由緒あるにて貴人又は名門の意。
○路の代——路用の金。
○身にまとふもの——衣服。

○にかりごと　策略、工面。
○具して　――同伴して。
○たばかられしかば　――計略にかけて欺かれしかば。
○すたりて　――衰へ行く衰にて、全然滅退の意。

へけるを、磯良いとも嬉しく、此の事安くおはし給へとて、私におのが衣服調度を金に貿へ、香央の母が許へも、偽りて金を乞ひ、正太郎に與へける。此の金を得て、密に家を脱れ出で、袖なるものを具して、京の方へ逃げ上りける。かくまでたばかられしかば、今はひたすらにうらみ歎きて、遂に重き病に臥しにけり。非澤香央の人々、彼を悪み此を哀みて、專ら醫の驗をもとむれども、弱さへ日々にすたりて、よろづにたのみなくぞ見えにける。

通釋　ある日父が家に居ない間に、正太郎が磯良を語らつて云ふには、御身の眞心のある心持を見て、今は自分の身の罪を後悔するばかりである。あの女も古郷に送り歸した後に、父の御機嫌を直さうと思ふ。彼の女は播磨の國の印南野の者であるが、親もないたよりない身であるのを、不便に思つて、憐をもかけたのだ。自分に捨てられたならば、再び舟つき場の遊女となるであらう。同じやうに卑しい稼業をする者でも、都は人情のある土地と聞いてゐるから、彼を京都に送つてやつて、由緒ある人

に仕へさせたく思ふのである。しかし自分がかうして居るので袖は萬事につけて貧しくして居ようから、路用の金や、衣服も誰か工面してあたへようか。御身はこの事をよくして、彼に恵んでやれと、丁寧に頼むのを、磯良は非常に嬉しく思つて、此の事は安心し給へと云つて、密かに自分の衣服道を賣り、香央の母のところへも届つて金を請ひ、正太郎に與へた。正太郎はこの金を得て、人知れず家を抜け出して、袖を伴れて京都の方へ逃げた。こうまで欺かれ謀られたので、今は磯良も正太郎の無情を一心に恨み悲しんで、遂に大病にかゝつた。井澤香央兩家の人々は、正太郎を憎み、磯良を不憫に思つて、專ら醫藥の効を求めたが、彌さへも日毎に食べなくなつて、何かにつけて頼み少くなつた。

こゝに播磨の國印南郡荒井の里に、彦六といふ男あり。渠は袖とちかき從弟の因あれば、先づこれを訪うて、しばらく足を休めける。彦六正太郎にむかひて、京なりとて人ごとに頼しくもあらじ。こゝに駐られよ。一飯をわけて、ともに過活のはかりごとあらむ

○從弟――父又は母の甥（オヒ）又は姪（メヒ）。
○おちゐて――心が鎭まつて、安心して。
○鬼化――「鬼祟（モノ）の精神の意」、生靈死靈の祟。

○音なのみ泣きて　聲をあげて、泣くばかりて。

○窮鬼　―生靈（イキリヤウ）に同じ。生きて居る人の怨靈（チンリヤウ）が、他に祟ること。

○古郷に云々　―殘骨の身を指す。

○疫　「エヤミ」流行病。

○露ばかりのしるしもなく　少しの効驗もなく。

○曠野の煙云々　―火葬して。

○塔婆の略。　梵語、卒塔婆の略。金、石、木などにて、地、水、火、風、空の五に象（カタドリ）り、五輪に高く造りて、佛物又は經文を奉安しまた死者、生存者の徳を標すもの、後世は主として、死者の追福のために、上部を塔形に造り、梵字又は經文を記して、其人の埋骨と、たのみある詞に、心おちゐて、こゝに住むべきに定めけり。彦六我が住む隣なる破屋をかりて住ましめ、友得たりとて悦びけり。しかるに、袖風のこゝちといひしが、何となく惱み出でて、鬼化のやうに狂はしげなれば、こゝに來りて幾日もあらず、此の禍に罹る悲しさに、みづからも食さへわすれて抱き扶くれども、只管をのみ泣きて、胸窮り堪へ難げに、さむれば常にかはることもなし。窮鬼といふものにや。古郷に捨てし人の、もしやと獨胸苦し。彦六これを諫めて、いかでさる事のあらむ。疫といふものゝ惱ましきは、あまた見來りぬ。熱き心少しさめたらむには、夢わすれたるやうなるべしと、やすげにいふぞたのみなる。看る看る露ばかりのしるしもなく、七日にして空しくなりぬ。天を仰ぎ、地を敲きて哭き悲しみ、倶にもと物狂はしきを、さま〴〵にいひ和めて、かくてはとて

の處に遣つる細長き板
の橋となれり。

遂に曠野の煙となしはてぬ。骨をひろひ、墳を築きて塔婆を營み、僧を迎へ、菩提のことねんごろに弔ひける。

通釋　こゝに播磨の國印南野郡荒井の里に彦六といふ男があつた。彦六はとちかい從弟の緣があるので、先づこの者をたづねて、正太郎と袖はゞ六の家に暫らく足を止めた。彦六が正太郎に向つて、いかに京都だとい つても誰れでもが、たよりになるとはゆかない。この地にお遲りあれ一杯の飯を分けて食つても、共に生活の算段をすることが出來よう、と云ふ便になる詞で、心も落ちついて、こゝに住まうと定めた。彦六は自分の家の隣の破れ家を借りて住ませ、友達を得たと喜んで居た。然るに袖は、風邪の氣持だといふことであつたが、何となく思ひ出して、物くがついたやうに狂ふので、正太郎はこの地に來て日數も經たないのに、此の禍にかゝる悲しさで、自分も食物さへも忘れて介抱するけれども、只聲をあげて泣くばかりで、胸が窮つて堪へられなさうであるが、後作が終ると平常と變つたこともない、生靈の祟と云ふものであらうか、古鄕に捨てゝ來た磯良の生靈が事によればついたのかと、思つて獨り胸を痛める。彦六はこれを諫めて、どうしてそんな事があらうか、疫とい

ふ病の苦しい事は之まで多く見て來たが、熱が少しさめると、夢のやうに苦しみを忘れるものだと、雜作もなくいふのが狙むところであつた。しかし見て居る内に、看病の効果が少しもなく、七日病んで死んだ。犬を仰いだり地をたゝいて泣き悲しみ、共に死にたいと狂氣じみて居るのを、彦六はさまざまにいひ慰めて、このまゝにして居てはならぬといふので、遂に一片の煙としてしまつた、骨をひろひ、墓を築いて、塔婆を建て、僧侶を迎へて、後世のことを丁寧に弔つた。

正太郎今は俯して黄泉をしたへども、招魂の法をもとむる方もなく、仰きて古郷をおもへば、かへりて、地下よりも遠きこゝちせられ、前に渡りなく、うしろに途を失ひ、晝はしみらに打臥して、夕々毎には塚のもとに詣でて見れば、小草はやくも繁りて、蟲のこゑすゞろに悲し。此の秋のわびしきは、我が身一つぞと思ひつゞくるに、天雲のよそにも同じなげきありて、ならびたる新塚あり、こゝに詣づる女の、世にも悲しげなる形して、花をたむけ、水を濯ぎ

○黄泉――死して埋ふる所、地下、冥土の意。
○招魂の法――魂を招き返す方法。儀禮士喪禮に、復者、一人以二爵弁服一、簪二雲千衣左一、何レ之扱二領于帶一、升レ自二前東榮一、中レ屋北面、招以レ衣曰、某復三と。
○仰きて云々――故郷よりも死を希ふのが強い意。
○しみら――しげくひまなきさま。

たるを見て、あな哀れ、わかき御許の、かく氣疎きあら野にさまよひ給ふよといふに、女かへり見て、我が身夕々ごとに詣で侍るに、殿はかならず前に詣て給ふ。さりがたき御方に別れ給ふにてやまさむ。御心のうちはかり奉らせて悲しと、潜然となく。正太郎いふ、さる事に侍り、十日ばかりさきに、かなしき婦を亡ひたるが、世に殘りて憑みなく侍れば、こゝに詣づることをこそ、心放にものし侍るなれ。御許にもさこそましますなるべし。

通釋　正太郎も今は俯して冥土を慕ふけれども、招魂の方法を求める手段もなく、仰いで故郷の事を考へると、却つて黄泉よりも遠いやうな心地がして、前方に渡がなく、後方に途を見失つたやうで、どうすることも出來ず、晝は一日臥して居て、夕毎には墓の所に參詣して見ると、小草が早くも茂つて、なく蟲の聲が何となく心悲しい。この秋の物憂いのは、自分一人だけかと思ひつよけて居ると、外にも同じやうな悲しみがあつて、鄰に新墓がある、この新墓に詣る女が非常に悲しさうな様子をして

○我が身ひとつ——古今集卷之四に「月見れば千々に物こそ悲しけれ我が身一つの秋にはあらねど」
○天雲——よその枕詞。
○氣疎き　人家離れた。
○さりがたき御方　離れ難い人。夫を指す。
○かなしき婦——愛する妻。
○心放——氣晴し。

花を手向け、水をそゝぐのを見て、あゝ氣の毒なことだ、年若いあなたが、このやうに人家を離れた、荒野をさまようて居られることよといふと、女は振り返つて見て、私が行夕お詣りすると、あなたはきつと前に詣つて居られる。離れ難い御方にお別なさつたのであらう。御心のうちをお察しして悲しいといつて、さめ〴〵と泣いた。正太郎がいふには、十日ばかり前に、愛妻を失つたが、あとに殘つて居て便りのない氣がするので、こゝに詣ることを、せめての氣晴しにして居るのである。あなたもさうした事があるのであらうといつた。

女いふ、かく詣でつかうまつるは、憑みつる君の御跡にて、いついつの日こゝに葬り奉る。家に殘ります女君のあまりに歎かせ給ひて、此の頃はむづかしき病にそませ給ふなれば、かくかはりまゐらせて、香花をはこび侍るなりといふ。正太郎云ふ、刀自の君の病み給ふもいとことわりなるものを、そも古人は何人にて、家は何地に住ませ給ふや。女いふ、憑みつる君は此の國には由緣ある御方なり

○憑みつる君——主人なる人。
○御跡——亡骸を葬つた跡、即ち墓。
○むづかしき病　面倒なる病氣。
○刀自——一家の妻などすべて婦人の尊ら家事を司る程の者の意。一般に老婦の尊稱とすれど、老婦に限らず。
○故人——亡き人。

しが、人の讒にあひて、領所をも失ひ、今は此の野の隈に佗しくて住ませ給ふ。女君は國の隣までも聞え給ふ美人なるが、此の君によりてこそ家所領をも亡し給ひぬれとかたる。此の物がたりに心のうつるとはなくて、さてしもその君のはかなくて住ませ給ふは、こゝ近きにや。訪らひまゐらせて、同じ悲をもかたり和さまむ。具し給へといふ。家は殿の來らせ給ふ道のすこし引入りたる方なり。便りなくませば、時々訪らはせ給へ。待ち給はむものをと、前に立ちてあゆむ。

通釋　女がいふ、このやうにお語りする所は、便りにして居た御主人の墓で、何日の日にこゝに葬式をしました。家に殘つて居られる女主人があまりに歎かれたから、此の頃は面倒な病氣にかゝられたので、この通り代つて、香花を運んで居るのであるといつた。正太郎がいふには、あなたの女主人が病氣になられたのも尤もな事で、そも〳〵亡くなつた人は何人

○讒　人の善を惡として他に告ぐること。サカシラ（利口ぶる、物知りぶるの意）
○しるところ　領地。
○はかなくて　便りなくて
○給ひぬれ　ぬれは過去の助動詞。
○引入りたる方　入り込みたる道。

で、家は何處に住んで居られるかと。女がいふには、便りにして居た君は此の國には緣故のある御方であつたが、他人の讒言に遭つて領地をも失ひ、今は此の荒野の隅に侘しい生活をして居られる。女主人は隣国までも知られた美人であるけれども、この君の爲に家や領地をも亡くされたと話した、此の話で心がうつつたといふのではないが、さてその女君が便りなく住んで居られる處は、こゝに近いか。お導ねして、同じやうな悲しみをも話し合つて心を慰めよう、一緒に連れ立ち給へといつた。女は、家はあなたが來られる道からすこし入込んだ所である、便り少く暮して居られるから、昨々は尋ね給へ、女君が歸りを待つて居られるだらうにと云つて、前に立つて歩んだ。

二丁あまりを來て、細き徑あり。こゝよりも、一丁ばかりをおゆみて、小暗き林の裏にちひさき茅屋(かやのや)あり。竹の扉(とぼそ)のわびしきに、七日あまりの月のあかくさし入りて、ほどなき庭の荒れたるさへ見ゆ。細き燈火の光、窓の紙を漏りてうらさびし。こゝに待たせ給へとて、內に入りぬ。苦むしたる古井のもとに、立ちて見入るゝに、

○わびしき——住み悪く難儀さうなる。
○ほどなき——廣くない。狹き。
○うらさびし——心が何となく淋しい。
○見入る——のぞきこむ。
○吹あふちて——吹きひらめきて。

唐紙すこし開きたる間より、火影吹きあふちて、黒棚のきらめきたるもゆかしく覚ゆ。女出で来りて、御訪らひの由申しつるに、入らせ給へ、物隔てゝかたりまゐらせむと、端の方へ膝行出で給ふ。彼所に入らせ給へとて、前裁をめぐりて、奥の方へともなひ行く。二間の客殿を人の入るばかりあけて、低き屏風を立て、古き衾の端出でて、主はこゝにありと見えたり。正太郎かなたに向ひて、はかなくて病にさへそゝませ給ふよし。おのれもいとほしき妻を亡ひて侍れば、おなじ悲しみをも問ひかはしまゐらせむとて、推して詣で侍りぬといふ。あるじの女屏風すこし引きあけて、めづらしくもあひ見奉るものかな。つらき報の程しらせまゐらせむといふに、驚きて見れば、古郷に残しゝ磯良なり。顔の色いと青ざめて、たゆき眼すさまじく、我を指したる手の青く細りたる恐しさに、あなやと叫んで

○黒棚　室内に置きて手まはりの道具を載せおくに用ふる黒塗の三重棚。室町時代より後諸家の紋章に用ひたり。
○ゆかしく覚ゆ　一何となく気が引かれる。
○前栽　「センザイ」と訓む。庭園の植木。又其の庭。
○客殿　貴族の邸にて客に対面する本殿。俗にいふ表座敷。
○古き衾　古き夜具。
○いとほしき　いたはしきの転語。気の毒なる。
○問ひかはし　互ひに話しあふ。
○推して　差出がましく。
○たゆき眼　病み衰へ力なき目つき。

たふれ死す。

通釋　二丁ばかり歩むと、細い道がある。この小徑を一丁ばかりを歩んで行くと、小暗い林のうちに、小さい草屋がある。竹の扉の侘住居であるのに、七日過きの月が明るく差し込んで、狹い庭の荒れてゐるのさへ見える。家から細い燈火の光が、窓の障子のすきから漏れて何となく心淋しい。こゝで待ち給へと云つて女は内に入つた。苔が生へた古井戸の處に立つて見入ると、唐紙をすこし開けてある間から、火影が風に吹きひらめいて、そこにある黒棚がきら〳〵するのも何となく心が引かれる。女が出て來て、御來訪の由を申した處が、入り給へ、物を隔てゝお話しようといつて女主人が、室の端の方へゐざり出られた。あちらに入らせられよと云つて、庭の植込を廻つて奥の方へ伴つて行つた。二間ある客殿を人が入れるだけ開けて、低い屏風を立てて、その屏風の外へ古い夜具の端が出てゐて、女主人はこゝに居ると思はれた。正太郎はその方に向つて、便りない上に病氣にさへなつて居られる由であるが、自分も愛する妻を亡つたので、同じ悲しみをも互に尋ね合うと思つて、差出がましく來たのであると云ふ。主人の女は屏風をすこし引きあけて、珍らしくも

お逢ひしたものだ、自分が受けた苦痛の報を、思ひ知らせようといふので、驚いて顔を見ると、古郷に残した磯良である。顔の色は非常に青ざめて、力のない眼つきが凄く、自分を指した手が青くて細い様子の恐しさに、あゝと叫んで、倒れて息が絶えた。

時うつりて生き出づ。眼をほそくひらき見るに、家と見しは、もとあばらし荒野の三昧堂にて、黒き佛のみぞ立たせましまします。里遠き犬の聲を力に、家に走りかへりて、彦六にしか〳〵のよしを語りければ、なでふ狐に欺かれしなるべし。心の臆れたるときは、かならず迷はし神の魔ふものぞ。足下のごとく、虚弱人のかく患に沈みしは、神佛に祈りて、心を收めつべし。刀田の里にたふとき陰陽師のいます。身祓して厭符をも戴き給へと、いざなひて、陰陽師の許にゆき、はじめより詳にかたりて、此の占をもとむ。陰陽師占ひ考へ

○三昧堂　三昧は、梵語、正定、等持など譯す。心を正しくして妄念なき修にして、この修行をする堂を三昧堂といふ。法華三昧堂。

○なでふ——「多く、當字に何條と記す、假名遣へり」。

○陰陽師——「オンミヤウジ」と訓むべし。陰陽師（オンヤウジ）の音便にて、古陰陽察に關して、占筮、相地等の事を掌りし官人。後世は官人以外の、卜門家を指す。

ていふ。災すでに窮りて易からず。さきに女の命をうばひ、怨猶ほ盡きず、足下の命も旦夕にせまる。此の鬼世を去りぬるは七日前なれば、今日より四十二日が間、戸を閉てゝ、おもき物齋すべし。我が禁を守らば、九死を出でて全からむか。一時を過るともさぬかるべからずと、かたくをしへて、筆をとり、正太郎が背より手足におよぶまで、篆籀のごとき文字を書き、猶朱符あまた紙にしるして與へ、此の咒を戸毎に貼して、神佛を念ずべし。あやまちして身を亡ぶることなかれと教ふるに、恐れみ且よろこびて、家にかへり、朱符を門に貼し、窓に貼して、おもき物齋にこもりける。

通釋　時を經て蘇生した。眼を細く開いて見ると、家と思つたのは、前にあつた荒野の三昧堂で、黒い佛像たけが立つてゐられる。里に遠い犬のなき聲をたよりにして、家に走り歸つて、彦六に斯様々々だと事の次第を話すと、彦六は、どうしてそのやうなことがあらうか、それは狐に咬か

○身祓——身に罪穢ある時、河原に出でて水にて淨め祓ふ事。
○呪符——神佛所藏の符。
○物忌——心身を淸めにして愼しみ居ること。
○禁——禁誡。
○九死——極めて危き身の助かる形容、九死一生。
○篆籀——「テンチウ」篆は篆書、籀は籀文として篆書以前の古文。
○咒——咒詛の文句。
○朱符——朱字の所藏符。

れたのであらう。心が臆病になつて居る時は、必ず人を迷はす神がおそふものである。あなたのやうに、虚弱な人がこんなに患に沈んで居るのには、神佛に祈つて、心を沈めるがよい。刀口の里に尊い陰陽師が居られる。身を淨めてお守りをも數き給へと、誘うて、陰陽師の所に行つて、初めからの事を細しく話して、此の事の吉を求めた。陰陽師は「つて云ふには、災難がせまつてゐて安心が出來ない。以前に女の命をつた、その怨がまだ盡きないで、あなたの命は今日明日に迫つて居る此の祟をする亡靈がこの世を去つたのは七日前であるから、今日から十二日の間、戸を閉ざして、嚴重な物忌をするべし。自分のいましめ事を守るならば、危い死を免れて命を全うするかも知れない。一時のを過つても死を免れることは出來ないと、かたく教へて、筆を執つて、正太郎の背から手足に至るまで、衆德のやうな古い文字を書いて、猶ほ朱字のお守りを多く紙に書きしるして與へ、此の呪文を戸毎に貼つて、神佛を念じられよ。教へた事を破つて身を亡ぼすことのないやうにと云へたので、恐れ又喜んで、家に歸り、朱符を門に貼り、又窓に貼つて、嚴重な物忌に籠つた。

其の夜三更の頃おそろしき聲して、あなにくや、こゝにたふとき符文を設けつるよとつぶやきて、復び聲なし。恐しさのあまりに、長き夜をかこつ程なく、夜明けぬるに、生き出でて急き彦六が方の壁を敲きて、夜の事をかたる。彦六もはじめて陰陽師が詞を奇なりとして、おのれも其の夜は寢ねずして、三更の頃を待ちくれける。松ふく風物を傾すがごとく、雨さへふりて常ならぬ夜のさまに、壁を隔て聲をかけあひ、既に四更にいたる。下屋の窓の紙に、さと赤き光さして、あな惡やこゝにも貼しつるよといふ聲、深き夜にいとゞ凄じく、髮も生毛もこと〴〵く竪立て、しばらくは死入りたり。明れば夜のさまを語り、暮るれば明くるを慕ひて、此の月日頃千歳を過ぐるよりも久し。かの鬼も夜ごとに家を繞り、或は屋の棟に叫びて、恐れる聲夜ましに凄じ。かくして四十二日といふ其の夜に

○三更　一更は一名を五期に分てる稱にて即ち戌の時（午後八時）を初更、亥の時（午後十時）を二更、子の時（夜半十二時）を三更、丑の時（午前二時）を四更、寅の時（午前四時）を五更としたもの。

○かこつ　苦情を云ふ。

○生き出でて　生氣が出て。人心がついて。

○下屋　雜物を置き雜事を執りし召使の寢殿造の後方に設ける屋舍。

○さと！！　さつと。

いたりぬ。今は一夜にみたしぬれば、殊に慎しみて、やゝ五更の天(そら)もしら〳〵と明けわたりぬ。長き夢のさめたるごとく、やがて彦六をよぶに、壁によりていかにと答ふ。おもき物いみも、既に滿ちぬ。絶えて兄長(このかみ)の面を見ず、なつかしさに、かつ此の月頃の憂怕(うさみだ)しさを心のかぎりいひ和(な)さまむ。眠さまし給へ。我も外の方に出でむといふ。

通釋　其の夜の十二時頃恐ろしい聲がして、あゝ憎らしい、こゝに貼い符文を貼りつけたことよと喚いて、その後は復び聲もしない。恐ろしさのうまりに、長い夜を苦しく思ふてゐると程なく、夜が明けたので、漸く人心がついて、急いで彦六の方の壁を敲いて、昨夜の事を話した。彦六もはじめて陰陽師の詞を奇妙なこととして、自分も其の夜は寢ないで居て十二時頃を待ち暮らした。松を吹く風が物を倒すやうに強く吹いて、その上に雨さへ降つて、平常とは違つた夜の有様なので、壁を隔てゝ語り合ひ乍ら、もう既に午前二時にもなつた。その時下屋の窓の障子に、さ

つと赤い光がさして、あゝ憎らしい、こゝにも貼つてあるよといふ聲が深夜に非常に凄じく聞えて、髪も身の毛もことごとく發だつて、しばらくの間は氣絶をしてしまつた、夜が明けると夜の樣子を物語り、日が暮ると夜の明けるのを慕つて、この日頃は千年の月日を過すよりも久しい氣がした。彼の亡靈も毎夜家の周圍を廻り、或は屋根の棟で叫んで、怨つた聲は一夜過ぎるごとに恐ろしくなつてゆく、かくして四十二日目と云ふその夜になつた、今はもう一夜だけになつたから、殊に愼しんで居て、漸く四時頃の空もしらゝと明け渡つた。長い夢が覺めたやうな心地がして、すぐに彦六を呼ぶと、彦六は壁の所に寄つてどうしたかと答へた。嚴重な物齋も最早や過ぎた。長い間あなたの顏を見なかつたなつかしさと、その上此の長い間の憂く恐ろしかつたことを、心一杯語り合つて慰めよう。眼を覺まし給へ。自分も戸外に出ようと云つた。

彦六用意なき男なれば、今は何かあらむ。いざこなたへわたり給へと、戸を明くる事半ならず、となりの軒にあなやと叫ぶ聲耳をつらぬきて、思はず尻居に座す。こは正太郎が身の上にこそと、斧引

○用意なき——用心のない。
○尻居云々——俗に云ふ尻餅をつく。

提げて大路に出づれば、明けたるといひし夜はいまだ暗く、月は中天ながら影朧々として風冷やかに、さて、正太郎が戸は明けはなして、其の人は見えず。内にや逃げ入りつらむと、走り入りて見れども、いづくに竄るべき住居にもあらねば、大路にや倒れけむと、もとむれども、其のわたりには物もなし。いかになりつるやと、あるひは異しみ、或は恐れ、ともし火を掲げて、こゝかしこを見廻るに、明けたる戸腋の壁に、朧々しき血灌ぎ流れて、地にたふ。されど屍も骨も見えず。月あかりに見れば、軒の端にものあり。ともし火を捧げて照し見るに、男の髪の束ばかりかゝりて、外には露ばかりのものもなし。浅ましくもおそろしさは、筆につくすべうもあらずなむ。夜も明けてちかき野山を探しもとむれども、つひに其の跡さへなくてやみぬ。此の事井澤が家へもいひおくりぬれば、涙な

がらに香央にも告げしらせぬ。されば陰陽師が占の業るき、御釜の凶祥もはたたがはざりけるぞ、いともたふとかりけるさかたり傳へけり。

通称　澁六は用心のない男であるから、今になつては何事があらうか、さあこちらへ來給へといつて、戸を半ばも開けないうちに、隣家の軒の所であつと叫ぶ聲が耳を貫いて聞えたので、思はず尻餅をついた。然しこれは正太郎の身の上の事だと思つて、斧を提げて大道に出ると、明けたといつた夜はまだ明けてないで暗く、月は中天にかゝりながら、その光がおぼろけて、風は冷たく吹いて居る、そして正太郎の姿が見えない。家の内に逃けて入つたのかと思つて、走つて入つて見るけれども、何處にもかくれるべき所のある家でもないから、大道に倒れたのかと思つて、探すけれども、其の邊には物もない。どうなつたのかと、或は不思議に思ひ、或は恐れ乍ら燈火をかゝけて此處彼處を見廻ると、明けた戸の傍の壁に、なまなましい血が灌ぎかゝつて流れて居て、それが地にまで傳はつてゐる。けれども屍も骨も見えない。月の明りで見ると、軒の端の

方に何か為がある、燈火をかゝげて照して見ると、男の髪の髻だけがかゝつてゐて、その外には少しの物もない、驚き恐れて、[illegible]

[illegible]が、遂にその跡をへも見出すことなくて止みた、此の事を井深の家へも知らせたから、井深家でも涙なからにそれを[illegible]

[illegible]流はなかつたのは、誠に[illegible]

巻之四

蛇性の婬

いつの時代なりけむ、紀の國三輪が崎に、大宅の竹助といふ人ありけり。此の人海の幸ありて、海人ともあまた養ひ、鮪の廣物、狹き物を盡して漁とり、家豐に暮しける。男子二人、女子一人をもてり。太郎は質朴にてよく生産を治む。二郎の女子は、大和の人の娶に迎へられて、彼處にゆく。三郎の豐雄なるものあり。生長優しく、常に都風たる事をのみ好みて、過活心なかりけり。父是を憂へつゝ思ふは、家財を分ちたりとも、卽人の物と爲さむ。さりとて他の家を嗣がしめむも、はたうたてき事聞くらむが病しき。只なす

○紀の國・紀伊の國。
○三輪が崎――萬葉集に「いにしへにありけむ人はわがごとかみわの檜原にかざしなりけむ」とあり。
○海の幸――海に漁して得る幸福、海邊の幸福。
○鮪の廣物――鮪(ハタ)は今云ふヒレにて、鮪の廣き魚、卽ち大なる魚となり。
○狹き物――鮪の狹き物の意にて、小き魚鮪の廣物に對して。祝詞「はたの廣物、はたの狹物(サモノ)」。

ませ　生し立て、博士になれかし。法師にもなれかし。命の極は

太郎が縮物にてあらせむとて、強ひて掟をもせざりけり。此の豎雄、

新宮の神奴安部の弓麿を師として行き通ひける。

通釈　何時の時代であつたか、紀伊の国三輪が崎に、大宅の竹助といふ人があつた。此の人は海辺の幸福があつて、海士達を多く養つて、大小の魚類を漁して、家は豊かに暮して居た。男子を二人、女子を一人持つて居た。長男は性質が質朴でよく家業を営んだ。次子の女子は大和の人の妻に迎へられて、大和に行つた。三男に豎雄と云ふものがあつた。性質が優しくて常に風雅な事ばかりを好んで、生計をたてようと云ふ心持がなかつた。父は是を心配して思ふには、財産を分けてやつても、直に人の物にするであらう、それかと云つて他人の家を織がせるのも、又善くない事を聞く事がつらい。たとするまゝに成長させて、学者ともなれ。又僧侶ともなれ。生きて居る限は長男の厄介ものにして置かうと思つて、強ひていましめもしなかつた、此の豎雄は神宮の神官安部の弓麿を先生として通つて居た。

（流り）　鵜飼取（イソナトリ）の略転語、魚を探して捕ること。

（娶）　配偶を求むる意。つまこふこと。偽（ならず）一緒好きかへてふせや立てつまどひしけむかつしかのままのてこなが」

（部屋）　風流。風雅。

（過活心）　生計をたつる心持。

（たうたてき）　はたはた「又」の意。うたてきは殊に心配なこと。

（博士）　本邦にては学者の意。

（縮物）　絹糸多くすことく（俗に手縫まとひ、厄介ものゝ意。

（新宮）　勅祭の新宮。

（神奴）　神官。

（掟）　いましめ、底置。

○なごり　「波（ナミ）殘（ノコリ）」の略といふ。岸に打寄せてかへる浪の後に殘るもの。

○東南　古來十二支を方位に配當して、北を子、東を卯としその間に丑、寅を配し、以下順次に右旋して辰、巳、午（南）等と名づけし故に、東南の間は辰巳（タツミ）に當る。

○そぼふる　ソヨカ〳〵降り。

○神秀倉　神寶を納れたる倉。飛鳥神社は大和高市郡にあり。

○大人の弟子　大家の末子。大人は他人への敬稱。

○圓座　蒲菅藁等にて圓く渦卷形に平たく組んで造つた敷物。

○暫時　僅かの時間。

○かゝり　樣子。

○遠山すり　山藍色もて遠山の形を摺りたる衣。

九月下旬、けふはことになごりなく和たる海の、暴に東南の雲を生して、小雨そぼふり來る。師が許にて傘かりて歸るに、飛鳥の神秀倉見やらるゝ邊より、雨もやゝ頻なれば、其所なる海郎が屋に立ちよる。あるじの老はひ出でて、こは大人の弟子の君にてます。かく賤しき所に入らせ給ふぞいと恐まりたる事、是れ敷きて奉らむとて、圓座の汚なげなるを清めてまゐらす。暫時息るほどは、何か厭ふべき。なあわたゞしくせそとて休らひぬ。外の方に麁しき聲して、此の軒しばし惠ませ給へといひつゝ入り來るを、奇しと見るに、年は二十にたらぬ女の、顏容髮のかゝり、いと艶ひやかに、遠山すりの色よき衣着て、下裳の十四五ばかりの清げなるに、包し物もたせ、しとどに濡れてわびしげなるが、豐雄を見て、面さと打ち赤めて、恥かしげなる形の貴やかなるに、不慮に心動きて、且思ふは、

此邊にかうよろしき人の住むらむを、今まで聞かぬ事はあらじを、此は都人の三つ山指せし次に、海愛らしくこゝに遊ぶらむ。さりとて男だつ者もつれざるぞ、いとはしたなる事かなと思ひつゝ、すこし身を退きて、こゝに入らせ給へ。雨もやがてぞ休みなむといふ。

通釋　九月の下句で、今日は殊に海の波か和やかだつたのに、突然に東南の空に雲が生じて、小雨がショボ〳〵降つて來た。先生の所で傘を借りて歸つて來ると。飛鳥の神秀倉が見える邊から、雨も段々強くなつたので、其所の漁夫の家に立ちよつた。その家の主人である老人が遣ひ出て、これは旦那の來の御子である、こんな賤しい所に來られたのは大變恐れ入つた事である、これを敷いて差上けようと云つて、圓座の汚なさうなのを埃を拂つて進めた。すこしの間休むのに何の厭ふことがあらうか、そんなに大そうにして呉れるなと云つて休んで居た。家の外の方で美しい聲がして、この軒を暫く貸し給へと云ひ乍ら、入つて來るものがあるので、不思議に思つて見ると、年は廿歳にも足らない女で、顏容や髮の樣子も、殊にあでやかで、遠山の景色を摺り出した色のよい着物を着て、

○丁嬢――十三四歳位の
　娘女のこと、丁は音
　（ア）、（アゲマキ）と訓
　ずる「丁」とは別字なり。
○しとゞ――甚しく濡る
　る狀にいふ。
○貴やか――高貴らし
　き。
○不意――何とはなく。
○「三つ山」――紀伊國の那
　智の本宮、新宮、熊野大
　須美神を三山といふ。
○はしたなる事――輕率
　な事。

待女の十四五位の綺麗な少女に、包んだものを持たせ、びつしよりと濡れて困つた様子であるが、豊雄を見て、顔をさつと赤くして、恥かしさうな様子が上品なので、豊雄は、何とはなく心が動いて思ふには、此の辺にこんな高貴な人が住んで居ることを、今まで聞かない事はあるまいから、此の人達は都の人が三つ山に参詣したついでに、海の景色を好ましく思つて、こゝで遊ぶのであらう。さうかと言つて男らしい者も連れないのは、軽率な事であると思ひ乍ら、すこし身を退いて、こゝに入り給へ、雨もやがて止むだらうと云つた。

女しばし宿させ給へとて、ほどなき住居なれば、つい並ぶやうに居るを見るに、近まさりして、此の世の人とも思はれぬばかり美しきに、心も空にかへる思ひして、女にむかひ、貴なるわたりの御方とは見奉るが、三山詣やし給ふらむ。峰の温泉にや出で立ち給ふらむ。かうすさましき荒磯を何の見所ありて、狩りくらし給ふ。こゝなむいにしへの人の、

○ほどなき住居——狭き家。
○つい並ぶ——ピツタリと近より並ぶ。
○近まさり——近づけば更にその容色の勝りてよく見ゆる事。
○荒磯——「アライソ」の約語。荒き波のうちよする磯。
○狩りくらし——狩猟を行ひて、その日を暮らす事にて、漁夫を取り廻るを云ふ。

くるしくも、ふりくる雨か。三輪が崎、

佐野のわたりに、家もあらなくに。

とよめるは、まことけふのあはれなりける。此の家賤しけれど、おのれが親の日かくる男なり。心ゆりて雨休め給へ。そもいづち旅…御宿りとはし給ふ。御見送りせむも掛りて無礼なれば、此の傘もて出で給へといふ。女、いと嬉しき御心を聞え給ふ。其の御思ひ乾てまゐりなむ。都のものにてもあらず。此の近き所に年来住ごし侍るが、けふなむよき日とて、那智に詣で侍るを、暴なる雨の恐しさに、やどらせ給ふともしらで、わりなくも立ちよりて侍る。こゝより遠からねば、此の小休に出で侍らむといふを、強に此の傘もてゆき給へ。何の便にも求めなむ。雨は更に休たりともなきを、さて御住居はいづ邊ぞ。是より使奉らむといへば、新宮の邊にて、縣の

○くるしくも、云々——萬葉巻三、長忌寸奥麻呂の歌。
○まことけふ云々——誠に今日の情景のことである意。
○日かくる男——憩み扶助して居る男。
○心ゆりて——心を許して、気を楽にしての意。
○聞え給ふ——申すの意。聞えを「承る」の意に用ひたり。
○わりなくも——「道理（コトハリ）なしの略といふ」強ひて。
○小休——「なに雑語、俗にいふ小降り。
○何の便云々——何かのついでにでもの意。
○傘——今眼前に無き物の姿が、さながら眼前にある如くに思はるゝこと。
○まどろむ——暫し睡る、ウトウトと少し睡る。

眞女兒が家はと尋ね給はれ。日も暮れなむ。御惠のほどを指し殺きて歸りなむとて、傘こりて出づるを見送りつも、あるじが簀立かりて家に歸りしかど、猶俤の露忘れ難く、しばしまどろむ曉の夢に、かの眞女兒が家に尋ねゆきて見れば、門も家もいと大きに造りなし、部おろし、簾垂れこめて、ゆかしげに住みなしたり。眞女兒出で迎へて、御情忘れがたく待ち戀ひ來る。此方に入らせ給へとて、奥の方にいざなひ、酒菓子種々と欵待しつゝ、嬉しき酔ごこちに、つひに枕をともにしてかたるとおもへば、夜明けて夢さめぬ。現ならましかばと思ふ心の忙しきに、朝食も打忘れてうかれ出でぬ。

通釋　女は暫くの間宥し給へと云つて、狹い家のことであるから、ひたと並ぶやうにして居るのを見ると、近くなるほど見勝りがして、この世の人とも思はれないばかりに美いので、心も身につかぬやうな思がして、女に向つて、貴い身分の御方とお見上げするが、三山詣をなさつたのであ

○部――古、高貴の家にて、又今も神社、佛閣などにて、日光又は風雨を防ぐに用ひる、格子戸（上端は蝶番（テフツガヒ）に固着して、下端を金物にて外方に吊り上て、水平に開くやうにしたるものなり。

○ゆかしげに――容子を早く知りたく思はれるやうに。

○簾垂れこめて――「垂れこめて」は病氣等にて籠り居る時に用ふもの、「本條にては只垂るゝの意か。

○現ならましかは――現在事實にてあらばいかに嬉しからむの意。

らうか、それとも牟の溫泉に出で立たれたのであらうか。このやうに何もない荒波が寄せる海邊を何の見所があつて、遊び歩かれるのか。こゝは古の人が、

苦しくも降つて來る雨よ、三輪が崎の佐野の邊には雨やどりをする家もないのに。

と詠んだのは、誠に今日の情景を詠んだのである。此の家は賤しい家であるけれども、自分の親が日頃恵み使つてゐる男の家である。氣樂にして雨宿りをし給へ。さても何處へ行く旅行の途中であるのか。御見送りをするのも却つて失禮であるから、此の傘を持つて行き給へと云つた。女は、大變嬉しい御心を承る、その御心切な御心で、衣服を乾して行かう。自分は都のものでもなくて、此の近い所に年來住んでゐるが、今日こそはよい日だといふので、那智にお詣りしたのに、はけしい俄か雨が恐ろしいので、あなたがこゝで雨宿りをしてゐられるとも知らないで、無躾にも立ちよつたのである。此處から遠くもないから、此の雨の小降の間に出て行かうと云ふのを、無理に此の傘を持つて行き給へ。何時かのついでにでも戴かう、雨は一向降りやんだのでもないのに、傘がなくては不便である。さてお住居は何處であるか。此方から使をさし上けや

うと云ふと、新宮の婆で、縣の眞女兒の家は何處と尋ね給はれ。日も暮れるから、御思のほどを指し教いて歸らうと云つて、傘を取つて戸外に出るのを見送り乍らも、その家の主人の姿や笠を借りて家に歸つたが、なほその人の俤が少しも忘れ難くて、少しうと〳〵と寢た曉の夢に、かの眞女兒の家に尋ねて行つて見ると、門も家も非常に大きく造つてあつて蔀を下し、簾を垂れて、奥ゆかしさうに住んでゐる。豐雄が行くと眞女兒が出迎へをして、御情が忘れにくくて戀ひ待つてゐた。此方に入り給へと云つて、奥の方に案内して、酒や菓物等で種々ともてなし乍ら、嬉しい醉心地で、遂に枕をともにして話をするかと思つたら、夜が明けて夢が覺めた。これが夢でなく現實であつて呉れゝばよいがと思ふと、心忙がしくそは〳〵して、朝食も忘れて家を浮かれ出た。

新宮の郷に來て、縣の眞女兒が家はと尋ぬるに、更に知りたる人なし。午時かたぶくまで尋ね勞ひたるに、かの丫髻兒の方よりあゆみ來る。豐雄見るより大に喜び、娘子の家はいづくぞ、傘求むとて尋ね來ると云ふ。丫髻打ゑみて、よくも來ませり。こなたに歩み給

○娘子――「をとめ」（小女の轉語にして、少女の意。「乙女」と書くは非なり。
○聞ゆ――「言ふ」の敬語。申す。
○まろや――「まろやは」は丫髻の名。

へとて、前に立ちてゆく〳〵、幾ほどもなく、こゝぞと聞ゆる所を見るに、門高く造りなし、家も大きなり。部おろし、籬たれこめしまで、夢の中に見しと露たがはぬを、怪しと思ふ思ふ門に入る。竿髪走り入りて、傘の主詣で給ふを誘ひ奉るといへば、いづ邊にますぞ。こち迎へませといひつゝ立出づるは眞女兒なり。豊雄、こゝに安部の大人とまうすは、年來物學ぶ師にてます。彼所に詣る便に傘とりて歸るとて、推して參りぬ。御住居見おきて侍れば、又こそ詣で來むといふを、眞女兒強にとゞめて、まろや、努出だし奉るなといへば、竿立ふたがりて、傘強ひて惠ませ給ふならずや。其が報いに強てとゞめまろらすとて、腰を押して南面の所に迎へける。板敷の間に床疊を設けて、几帳御厨子の飾、壁代の繪なども、皆古代のよき物にて、倫の人の住居ならず。眞女兒立出でて、故ありて

(板敷――板を敷きたるところ。いたのま。

○床疊・床前(トコマヘ)にある疊。

○几帳――室内にたてゝ隔となす道具。貴婦人の座側には必ず之をたてたり。

○御厨子――略して「厨子」ともいふ。調度の一種にして、三重の書棚の如きものにして、下段に扉ありて兩開きとせるものなり。本は御厨子所にて、調理せる食物を納めしものにて、後には美麗に造りて、貴人の側に置き、書籍、調度などを載する具となれり。

○壁代――中古殿舍の間毎の隔、又は羽目板等に垂れおく幌帷。

○高坏(平ケ)――食物を盛れる盤を載せる臺。角坏と圓坏との二種あり。平坏は脚なきものにて、今の皿の如し。

人なき家とはなりぬれば、貴やかなる御饌もえし本らず。只薄酒一杯すゝめ奉らむとて、高坏平坏の清らなるに、海の物、山の物もりならべて、瓶子土器擎げて、まろや酌まゐる。豊雄また夢心して、さむるやと思へど、正に現なるを却りて奇しみあたる。

通釋　新宮の里に來て、縣の眞女兒の家はと云つて尋ねたが、一向知つてゐる人がない。正午過ぎるまで尋ね迷つてゐると、彼の女童が東の方から歩いて來た。豊雄は女童を見ると大いに喜んで、御主人の家は何處か、傘を戴かうと思つて尋ねて來たと云ふと、女童は笑ひかけて、よく來られた。此方へ來給へと云つて、前に立つて案内して行くうちに、幾程もなく、こゝであると云ふ所を見ると、門を高く作つし、家も大きい。そして部を下し簾をたれてゐることまでも、夢の中でみた樣子とは少しも違はないのを、不思議に思ひ乍ら門に入つた。女童は走り入つて、傘の持主が來られたのをお連れ申したと云ふと、何處に居られるのか、こちらへお迎へせよといひ乍ら出て來たのは眞女兒である。豊雄、この地の安部の大人と申す方は、年來教を受けてゐる先生で居られる。その先生

の許に行くついでに、傘を持つて歸らうと思つて、推して參つた。御住居を見て置いたから、又この次に參らうといふのを、眞女兒は無理にとめて、まろや、決してお出し申すなといふと、女童は豐雄の前に立ちかがつて、あなたは傘を無理にお貸しなさつたではないか　と其の退路に無理にお止めをするといつて、腰を押して南面の座敷に導き入れた。板敷の間に疊を敷いて、几帳だの、御厨子などの飾や、時代の繪なども、皆昔のよい物で、普通の人の住家ではない。眞女兒が立ち出でて、事柄があつて人のゐない家とはなつてゐるから、實やかなおもてなしもすることが出來ない、只粗末な酒を一杯さし上げようといつて、高杯や平杯の清らかなのに、海の物や山の物を盛り並べて、瓶子や土器を捧げて、女童が酌をした。豐雄は又夢の樣な心がして、覺めるのかと思ふが、正しくこれは現實であるのを却つて不思議に思つた。

客も主もともに醉ごこちなるとき、眞女兒杯をあげて、豐雄にむかひ、花精妙櫻（はなぐはし）が枝の水にうつろひなす面に、春吹く風をあやなし、梢たちぐく鶯の艷（にほ）ひある聲していひ出づるは、面なきことのい

○花ぐはし——花が美しいといふ意にて、櫻にかけていふ枕詞。
○梢たちぐく——枝を傳ふ。
○面なき事——恥かしき事。

○いづれの神――伊勢物語に「人知れずわれ恋ひ死なばあぢきなくいづれの神になき名負はせん」とあるによる。
○受領――国守の異稱。
○任はてぬ――国守の任期は四年なれば、四年の任期の終りしないふ。
○御宮仕――奥向に仕へるの意にて、夫人となつての意。
○おのが世ならぬ身――自分の世でない、即ち尸主でない身。
○頓――「トミ」は固有國語、急速にの意、頓はその意より取り用ひたる字にて、字の音にあらず。
○嗚呼なる事――馬鹿げたる事。
○歸るべき道――浅き女心よりいひ出でたる詞の取り返す道しもの意。
○浅ましき身――驚歎する程の不幸なる身。

はで止みなむも、いづれの神になき名負すらむかし。努徒なる言にな聞き給ひそ。故は都の生なるが、父にも母にも早う離れまゐらせて、乳母の許に成長しを、此の國の受領の下司縣の何某に迎へられて伴ひ下りしは、はやく三とせになりぬ。夫は任はてぬ。この春かりそめの病に死給ひしかば、便なき身とはなり侍る。都の乳母も尼になりて、行方なき修行に出でしと聞けば、彼方も亦知らぬ國とはなりぬるをあはれみ給へ。きのふの雨のやどりの御恵みに、信ある御方にこそとおもふ物から、今より後の齢をもて、御宮仕奉らばやと願ふを、汚なき物に捨て給はずば、此の一杯に千とせの契をはじめなむといふ。豊雄もとよりかゝるをこそと、亂心なる思ひ妻なれば、時の鳥の飛び立つばかりには思へど、おのが世ならぬ身を顧れば、親兄弟のゆるしなき事をと、かつ嬉しみ且恐みれて、頓に答

ふべき詞なきを、眞女兒わびしがりて、女の淺き心より、嗚呼(をこ)なる事をいひ出でて、歸るべき道なきこそ面なけれ。かう淺ましき身を海にも沒らで、人の御心を煩はし奉るは、罪深きこと、今の詞は往ならねども、只醉ごころの狂言(たはこと)におぼしとりて、こゝの海にすて給へかしといふ。

綾衣　客も主人も共々に醉心地になつた時に、眞女兒が杯を取りあげて、雌に向つて、紛覺な櫻の枝が水に映つたやうな顏に、春を吹く風をあしらひ乍ら、栢を傳つて啼く鶯のやうな、あでやかな聲をしていひ出すには、恥かしい事をいはないで止めるのも、いづれの神にかない名を付けるであらう、決つして徒らな言葉と聞き給ふな。自分は元京都の生れであるが、父にも母にも早く離れて、乳母の許で成人したのを、此の國の國守の下役人縣の何某に迎へられ、妻となつて伴はれて下つたのは、早くも三年前になつた。夫は任が終つたが、この春に一寸した病氣で死なれたから、便る人もない身になつた。それに都にゐた乳母も尼になつて

何處へ行くか、行方のない修行の旅に出たと聞くので、京都も亦便る人のない國となつて終つたのを、あはれと思ひ給へ。昨日の雨宿りの御情で、眞實のある御方だと思ふものだから、今から後の命を以て、あなたに御仕へ申したいと願ふのを、汚ない物と思つてお見捨てなさらないならば、此の一杯の酒で千歳の緑をはじめようといふ、豐雄はもとからこのやうな事を願つてゐて、亂れ心に慕つてゐる女の事であるから、これを聞くと雛にゐた鳥が飛び立つほどに嬉しく思つたが、自分の獨立ありて居らない身をふり返つて見ると、親や兄弟が許さない事をと思つて、嬉しくもあるが又恐れて、急には返事をすべき詞がないのを、眞女兒はどうかと思ひわびて、女の淺い心から、馬鹿げた事をいひ出して、取り返す道もないことこそ恥かしい。こんなに淺ましい身を海にも投げないで、人の御心を煩はすことは、罪の深い事である、今の詞は徒らにいつたのでないけれども、只醉心地で云つたつくり言とおぼしめして、こゝの海に捨て給へと云つた。

豐雄、はじめより都人の貴なる御方とは見奉るこそ賢かりき。鯨よる濱に生ひ立ちし身の、かく嬉しき事いつかは聞ゆべき。卽の

○鯨よる濱――上文の「すさまじき荒磯」を承けたる文にて「一漁村」の意。

御答もせぬは、親兄に仕ふる身の、おのが物とては爪髪の外なし。何を祿に迎へまゐらせむ便もなければ、身の徳なきをくゆるばかりなり。何事をもおぼし耐へ給はゞ、いかにも〳〵後見し奉らむ、孔子さへ倒るゝ戀の山には、孝をも身をも忘れてはといへば、いと嬉しき御心を聞きまゐらする上は、貧しくとも、時々こゝに住ませ給へ。ここに前の夫の二つなき寶にめで給ふ帶あり。これ常に帶せ給へとてあたふるを見れば、金銀を飾りたる太刀の、あやしきまでに鍛うたる古代の物なりける。物のはじめに辭なむは祥あしければとて、とりて納む。今夜はこゝに明させ給へとて、あながちに止むれど、まだ赦なき旅寢は親の罪し給はむ。明の夜よく偽りて詣でなむとて出でぬ。其の夜も寢ねがてに明けゆく。

○問ゆべき――上文の「問ふ給ふ」と同じく承るの意に用ひたり。
○即の御答――即答。
○身の徳なき　自身の貧乏。
○後見――眞女兒が宮仕へ云々といひしを受けて、眞女兒の後援をなさむとの意。
○孔子さへ云々――「クワンに孔子の古諺なり。聖賢の人にても、失策なることありの意。源氏物語胡蝶卷に「こひの山にはくしのたゝれ云々」とあり。
○寢がてに――寢難くしての意。種々に思ひわづらひて安眠する能はぬないふ。

通釋　豐雄は、はじめから都の人で高貴な方とお見上げしたことは賢いことであつた。鯨のよつて來る一漁村で生長した身が、こんな嬉しい事を聞かれることがあらうか。直ぐに御答をしないのは、親や兄に仕へる身であるからである。自分の物といつては爪や髮の外はない、何を引出物にしてお迎へしようか、その手段もないから、自分の貧乏なのを悔ゆるばかりである。何事をも我慢なされば、いかにもお世話申さう、賢人でさへもつまづき倒れるといふ戀の山のためには、孝も身をも忘れて終つてといふと、非常に嬉しい御心を聞いた上は、貧しい暮しではあるが、時々はこゝに住み給へ。こゝに前の夫が二つとない寶として愛してゐた帶がある。これを常に帶びてゐ給へといつて與へるのを見ると、金や銀で飾つた太刀で、不思議な程銀へ上げた古代の物である。物の初めにことわるのは前兆の悪いことだと思つて、受け入れた。今夜はこゝで明せられよと云つて、無理に止めたが、まだ赦されてない旅寢は親が罪せられるであらう。明夜はよく親を偽つて來ると云つて出た。其の夜も十分に寢る事が出來なくて明けて行つた。

太郎は網子整ふるとて、晨起き出でて、豊雄が閨房の戸の間を、ふと見入れたるに、消え残りたる燈火の影に、輝々しき太刀を枕に置きて臥したり。奇し何地より求めぬらんとおぼつかなくて、戸をあらゝかに明くる音に目さめぬ。太郎があるを見て召し給ふかといへば、輝々しき物を枕に置きしは何ぞ、価貴き物は海人の家にふさはしからず。父の見給はばいかに罪し給はむといふ。豊雄、財を費して買ひたるにもあらず。昨日人の得させしをこゝに置きしなり。太郎、いかでさる賓をくるゝ人此の邊にあるべき。あなむづかしの唐言書きたる物を買ひたむるさへ、世の費なりと思へど、父の默りておはすれば、今までもいはざるなり。其の太刀帶きて大宮の祭を遂やらむ。いかに物に狂ふぞといふ聲の高きに父聞きつけ、徒者が

○網子とゝのふる——網を曳する人を呼び集むること。魚鹽集卷三に大宮のうちまで聞ゆ網引すと網子とゝのふる海人の呼聲。
○むぼつかなくて——不審に思ひて。
○つとめて——早朝。
○ふさはしからず　相應せぬ。
○財を云々　金錢を費して買ひ取りたるにあらずとの意。
○くるゝ人　與へられたる人。
○唐言云々——漢文書を買ひ貯ふるさへ無益なることなりとの意。
○祭を遂る　祭の行列に加はりて容子振りて徐行すること。
○徒者——無用の者、二、三男を俗に厄介者といふよりいふ。

ぬらむ。軍將等の俸給ふべき、煩々しき物を買ひたるはよからぬこと、御月のあたりに召して問ひあきらめ給へ。己は網子どもの怠らむと云ひ捨てゝ出でぬ。

通釋　長男は網曳をする人達を呼び集めると云つて、朝早く起き出して、豐雄の寢室の戸の間から、ふと室を見込むと、消え殘つた燈火の光できら〳〵光る太刀を枕元に置いて寢て居る、何處から求めたのかと不審に思つて、戸を荒く明ける音で、豐雄も目がさめた。見が居るのを見てお呼びになつたのかといふと、きら〳〵光る物を枕元に置いてあるのは何だ、價の高い物は漁士の家には不相應だ。父が見られたら、どんなに罪されようかと云つた。豐雄は、金錢を費して買つたのでもなくて、昨日人がくれた物をこゝに置いたのであるといふ。太郎は、どうしてそんな寶をくれる人が此の邊にあらうか、あの面倒な漢文の書物を買ひ貯へることさへ無駄なことだと思ふが、父が默つて居られるから、今までは云はなかつたのだ。其の太刀を帶びて、大宮の祭の時にねり歩くのであらう。何といふ狂氣じみた事だといふ聲が高いので、父が聞きつけて、徒者か何事を仕出したのか、こゝに連れて來い、太郎よと呼ぶので、何處で求

めてきたのか、将軍等が用ふるやうな立派な物を買つたのは、よくない事である、日の前にお召になつてよく問ひただし給へ、自分は網子どもが忘つて居るだらうからと云ひ捨てゝ出て行つた。

母、豊雄を召して、さる物何の料に買ひつるぞ。米も銭も太郎が物なり。吾主が物とて何をか持ちたる。日來は爲すまゝに置きつるを、かくて太郎に悪まれなば、天地の中に何國に住むらむ。賢き事をも學びたる者が、など是ほどの事わいためぬぞといふ。豊雄、實に買ひたる物にあらず。さる由縁ありて人の得させしを、兄の見咎めてかく宜ふなり。父、何の磐ありてさる寶をば人のくれたるぞ。更におぼつかなき事、只今所縁かたり出でよと罵る。豊雄、此の事只今は面俯なり。人傳に申し出で侍らむといへば、親兄にいはぬ事を誰にかいふぞと、聲あらゝかなるを、太郎の嫁の刀自傍にありて、

○料物。「差し料の刀」。
○吾主——其方、御前（まへ）。
○賢き事云々——凄學な學びて經書さへ學びし者がの意。
○わいためぬ——「ワキタメヌ」の音便。辨別、分別せぬの意。
○さる由縁——然るべき理由。
○罵る——詰（ナジ）る。
○面俯——不面目、恥かしい。
○人傳——人を中間に入れて、その人よりいひ傳ふこと。

○宥むる――和げ鎭むる意。
○つい立つ――突立つにて、突（ツイ）は接頭語、そのまゝ立つこと。

此の事惡なりとも聞き侍らむ。入らせ給へと宥むるに、つい立ちていりぬ。

通釋　母は、豐雄を呼んで、そんな物を何の用に買つたのか。米も錢も兄のものだ、おまへの物と云つては何を持つて居るか。當日頃はおまへがするまゝにさして置いたが、この事で兄に憎まれるならば、天地の中で何處に住むか。貰い事を學んだ者が、どうしてこれ程の事を辨別しないのかといふ。豐雄が、實際買つた物ではなくて、ある理由があつて、人がくれたものを、見上が見咎めてこのやうに云はれるのだと云ふと、父が、どういふ名譽があつて、そんな寶をば人がくれたのか、一向に解せぬ事だ、只今その理由を語り出せと云ひ詰つた。豐雄は此の事を只今話すのは恥かしいことである、人を以て申し出さうといふと、父が、親や兄にもいはない事を話す他の人があるかといふ聲が荒々しいので、太郎の女が傍に居たが、この事は不肖ながら私が聞きませう、此方へ入り給へとなだめたので。そのまゝに立つて他の室へ入つた。

○刀自――吉備津の釜の巻に出たり。
○かたらひてむ――味方にして頼まむの意。
○責なまる、――「さきなむ」の音便。しかる。
○後身――一稿本「身」に作る。「一見」の誤りならむ。
○己が世しらぬ身――独立して戸主となりし身でないとの意。
○勘當――善からぬ行のために、君父または師匠などの元へ寄せつけられぬこと。
○いとほし――気の毒、
○いひとり――言葉にうつして述ぶるの意。説明して了解を得ること。
○眉を顰みて――心配らしい顔なしての意。
○保正――郷長、庄屋、村長などの意。

豊雄、刀自にむかひて、兄の見咎め給はずとも、密に姉君をかたらひてむと思ひ設けつるに、速く責なまるゝ事よ。かう〳〵の人の女のはかなくてあるが、後身してよとて賜へるなり。己が世しらぬ身の、御赦さへなき事は重き勘當なるべければ、今更悔ゆるばかりなるを、姉君よく憐み給へといふ。刀自打笑みて、男子のひとり寝し給ふが、衆ねていとほしかりつるに、いとよき事ぞ。恐なりともよくいひとり侍らむとて、其の夜、太郎にかう〳〵の事なるは、幸におぼさずや。父君の前をよきにいひなし給へといふ。太郎眉を顰めて、あやし。此の國の守の下司に、縣の何某と云ふ人を聞かず。我が家保正なれば、さる人の亡なり給ひしを聞えぬ事あらじを、まづ太刀こゝにとりて來よといふに、刀自やがて携へ來るを、よく〳〵見終りて長嘘をつきつゝもいふは、こゝに恐しき事あり。近來都の

○大臣殿 ―オホキオトドノの音便、大臣格の身柄ある人。
○御願 ―神佛に對する心願。
○權現 ―佛語にて「權(カリ)に化現(ケゲン)」する意。權化に同じく、神佛が衆生濟度のために、人世に降下して、種々の形相(ギャウサウ)を取ること。又神の稱號に用ひたり、例へば熊野三所權現、箱根兩所權現、本照大權現等にて、本條に於ては熊野權現を指す。
○大宮司 ―大社の神官の長。
○助の君 ―國司の次官。
○いかさまにも ―げにもつとも。又はなるほどの意。
○面を背くして ―顔の色を蒼白にして。
○一毛をも云々 ―少しも不正なる事をせぬ喩の語。

大臣殿(おほいどの)の御願の事滿しめ給ひて、權現に多くの資を奉り給ふ。さるに此の神寶(かんだから)ども、御寶藏の中にて頓に失(う)せしとて、大宮司より國の守に訴へ出で給ふ。守此の賊を探り捕へむ爲めに、助の君文屋の廣之、大宮司の館に來て、今專らに此事をはかり給ふよしを聞きぬ。此太刀いかさまにも下司などの帶(は)くべき物にあらず。猶父に見せ本らむとて、御前に持ちゆきて、かう〳〵の恐しき事のあなるは、如何計らひ申さむといふ。父面を青くして、こは淺ましき事の出できつるかな。日來(ごろ)は一毛をもぬかざるが、何の報にてかう良らぬ心や出できぬらむ。他よりあらはれなば、此の家をも絕(たや)されむ。祖(みおや)の爲め子孫(のち)の爲には不孝の子一人惜からじ。明日は訴へ出でよといふ。

通釋　豐雄は姉に向つて、兄上が見咎められないでも、密に姉君に話をし、お賴みしようと思つて居たのに、早く責められる事だ。實はかやう〳〵

の人の妻で、便りなく暮して居るのが、後見をしてくれといつてこの太刀をくれたのである。自分の世でもないのに、ましてお許しもない事をしたのは、重い勘當を受けることであらうから、今更後悔するばかりである。姉上憐れと思ひ給へといふ。姉は笑つて、男子がひとり寢なされることを、以前からお氣の毒に思つて居たのに、それは丁度よいことである。自分は愚ではあるが、よく話をして上げようといつて、其の夜、太郎にかやう〳〵の事であるのは丁度幸とお思ひにならないか、父君の前をよくいひ繕ひ給へといつた。太郎は眉をひそめて、それは不思議なことだ。此の國の國守の下役人に縣の何某といふ人を聞いた事がない。我が家は鄕の長であるから、そのやうな人が亡なられた事を聞かないといふ事はないのに、まづその太刀をこゝに取つて來いと云ふので、妻がやがて持つて來たのをよくよく見てしまつて、太息をつきながら云ふには、こゝに恐ろしい事がある。近頃京都の大臣殿が祈願せられた事がかなつて、權現樣に多くの寶物を奉納せられた。然るにそれ等の神寶が、御寶藏の中で、俄かに失せたといふので、大宮司から國守に訴へ出られた。それで國守は此の御神寶の殿を探し捕へるために、國守の次官の文屋の康之が、大宮司の家に來て、今專ら此の事を相談してゐられるとい

ふ事を聞いた。此の太刀は下役人などが帯く可きものではない。猶ほ父にお見せしようといつて、父の前に持つて行つて、しか〴〵の恐ろしい事があるが、どう計らひ申さうといつた。父はそれを聞いて顔の色を蒼白にして、これは思ひがけない事が出来た。日頃は髪の毛一本もぬいたこともないのに、何の罪でこんな良くない心が出たのであらうか。他人からこの事が知れたならば、此の家をも絶やされるだらう、且先の為、子孫の為めには不孝な子の一人位惜しい事はない。明日は訴へて出よと云つた。

太郎、夜の明くる待ちて、大宮司の館に来り、しか〴〵の由を申し出でて、此の太刀を見せ奉るに、大宮司驚きて、是なむ大臣殿（おとど）の献り物なりといふに、助聞き給ひて、猶失せし物問ひあきらめむ。召し捕れとて武士ら十人ばかり、太郎を前にたてゝゆく。雖然かゝる事をもしらで書見あたるを、武士ら押かゝりて捕ふ。こは何の罪ぞといふをも聞き入れず、縛（から）めぬ。父母太郎夫婦も今は没さしと歎き

○しか〴〵——文句の多きを略する場合に用ふる語にて、「彼のやうに、此のやうに」又「かやうかやう」などの意。
○猶失せし物——此の太刀以外の紛失物。
○からめぬ——捕縛した。「からむ」は捕へて縛ること。
○公儀——国守の廳。廳は政治を執る所。

惑ふばかりなり。公廳より召し給ふ。疾く歩めとて、中に取こめてゆく。助、豐雄をにらまへて、爾神寶を盜みとりしは館に追ひもてゆく。助、豐雄をにらまへて、爾神寶を盜みとりしは例なき國津罪なり。猶種々の財はいづちに隱したる。明らかにまうせといふ。豐雄漸此の事を覺り、涙を流して、おのれ更に盜をなさず。かうかうの事にて縣の何某の女が、前の夫の帶びたるなりとて得させしなり。今にもかの女召して、己が罪なき事を覺らせ給へ。助、いたく怒りて、我が下司に縣の姓を名のるものある事なし。かく僞る刑益々大なり。豐雄、かく捕はれていつまで僞るべき。あはれ、かの女召して聞はせ給へ。助、武士らに向ひて、縣の眞女兒が家はいづくなるぞ　巢を押して捕へ來れといふ。

通釋　太郎は、夜の明けるのを待つて大宮司の家に行つて、かやう〳〵の事の由を申し出て、この太刀を見せた處が、大宮司が驚いて、これこそ即

○にらまへて——にらめての意にて、怨み視る意。
○國津罪——國土にて犯せる罪（天津罪に對して）

ち大臣殿が献上された品だといふので、助はこれを聞かれて、ほこの外に失せた物をも問ひたゞさう、召し捕つて来いといふので、武士等十人ばかりが太郎を前に立たせて行つた。豊雄はこんな事とも知らないで書物を見て居たのを、武士等はおしかゝつて捕へた。これは何の罪で捕へられるのかといふのも聞き入れないで、縛つてしまつた。父母や太郎夫婦も今は浅ましい事だと歎き迷ふばかりである。公館から召されるのだ、早く歩めといつて、武士等は豊雄を中にとり囲んで、館に追ひ乍ら連れて行つた。館へ行くと助は豊雄を睨らんで、お前が十貫の盗んだことは例のない国罪である、猶ほ種々の財物は何処へ隠したのか、明らかに申せといつた。豊雄は漸く此の事を覚つて、涙を流していふには、自分は少しも盗はしない。かやう〳〵の事で縣の何某の妻が、前の夫が帰びたのであるといつてくれたのである。今にも彼の女をお召しになつて自分の罪かない事を明らかにせられたいと。助はこれを聞いて大変に怒つて、自分の下役人には、縣といふ姓を名乗つて居る者があつた事はない。このやうに偽る罪は益々大きいといふと、豊雄は、かやうに捕へられて何時まで偽るものか、どうか、彼の女を召して問はれたいと云ふ。助は、武士等に向つて、縣の眞女兒の家は何処であるか。彼の男を連れ

て行つて捕へて来いといつた。

武士ら、曳りて又豊雄を押したてゝ、彼所に行きて見るに、殿めしく造りなせし門の柱も朽ちくさり、軒の瓦も大方は砕けおちて、草しのぶ生ひさがり、人住むとは見えず。豊雄是を見て、只あきれにあきれてゐたる。武士らかけ廻りて、ちかきとなりを召しあつむ。木伐老、米かつ男ら、恐れ惑ひて跪る。武士他らにむかひて、此の家何某が住みしぞ。縣の何某が女こゝにあるはまことかといふに、鍛冶の翁はひ出でて、さる人の名はかけてもうけ給はらず。此の家三年ばかり前までは、村主の何某といふ人の賑はしくて住み侍るが、筑紫に商物積みてくだりし、其の船行方なくなりて後は、家に残る人も散々になりぬるより、絶えて人の住む事なきを、此の男のきのふこゝに入りて、漸して歸りしを奇しとて、此漆師の老が申さ

○しのぶ　忍草の略にて、軒端等に生ずる小草。
○あきれて　――茫然として。
○爺――（チヂ）は敬稱。翁といふに同じ。叔父の義にあらず。
○米かつ男ら　「カツ」は搗ッ（ク）に同じ。
○跪る――膝を折り立て居る。野卑の貌。
○かけてし――少しも。いささかも。
○村主――「スクリ」朝鮮の古語すぎ（村）おり（主長の義）の合約轉訛かといふ。姓（カバネ）の一。
○賑はしく　豊かに。
○漆師――塗師にて、漆細工をする人。
○水あせて――水が涸れて。

れしといふに、さもあれ、よく見極めて殿に申さむとて、門押ひらきて入る。家は外よりも荒れまさりけり。なほ奥の方に進みゆくに、前栽（せんざい）廣く造りなしたり。池は水あせて、水草（みくさ）も皆枯れ、野らの草生（くさふ）かたぶきたる中に、大きなる松の吹き倒れたるぞ物すさまじき。

通釋　武士等は暫まつて又豐雄を案内として、彼所に行つて見ると、殿めしく造つた門の柱も朽ちて、軒の瓦も大方は碎け落ちて、草やしのぶ草が生ひ茂つて、人が住んで居ようとは思はれない。豐雄はこの樣子を見て只あきれてしまつて茫然として居た。武士等はかけ廻つて、近隣の者を召し集めた。木樵の老人、漁夫等か、恐れ迷つて跪いた。武士は彼等に向つて、此の家は誰が住んで居たか、縣の何某の妻がこゝに住んで居るといふのは誠かといふと。製治屋の老人が這ひ出て、さういふ人の名は少しも聞いたことがない。此の家は三年ばかり前までは、村主の何某といふ人が豐かに暮して居たが、九州に商品を積んで下つた船の行方が知れなくなつた後は、家に殘つて居た人々も散々になつてしまつて、それから後は少しも人が住むことがないのに、この男が昨日この家に入

○水草。――池にある浮草。

つて、暫くして歸つたことが不思議だと、この漆師の老人が云はれたと云ふと、然もあれ、よく見極めて殿に申し上げようといつて、門を押し開いて入つた。家は外から見たよりはひどく荒れて居る。なほ奥の方に進んで行くと、前栽を廣く造つてある。庭の池は水が涸れて水草も皆枯れて、雜草が生ひ茂つてかたむいてゐる中に、大きな松の木が風に吹き倒れて居るのが物すごい。

客殿の格子戸をひらけば、腥き風のさと吹き送りきたるに、恐れまどひて、人々後に退く。豊雄只聲を呑みて歎きゐる。武士の中に巨勢の熊樫なる者膽ふとき男にて、人々我が後に從きて來れとて、板敷をあららかに踏て進みゆく。塵は一寸ばかり積りたり。鼠の糞ひりちらしたる中に、古き帳を立て、花のごとくなる女一人ぞ座る。熊樫女にむかひて、國の守の召しつるぞ。急ぎまゐれといへど、答へもせであるを、近く進みて捕ふとせしに、忽ち地も裂るばかりの

○膽ふとき——大膽なる。度胸のすわりたる。
○板數——板を數いたるところ、いたのこと。
○ひりちらし——「ごり」は放出の意。
○古き帳——帳は室内の間を區つるために垂れ張る布帛の稱にて。帷とも書き「トバリ」とも云ふ。歴代、鈍張、幌等皆帳の一種なり。

霹靂(はたがみ)鳴り轟くに、許多の人逃る間(ひま)もなくて、そこに倒る。然て見るに、女はいづち行きけむ見えずなりにけり。

通釈　客殿の格子戸を開くと、腥い風がさつと吹いて来るので、人々は恐れ逃つて後に退いた。豊雄は只管を呑んで耽いてゐた。武士の中に巨勢の熊椅といふ者が居て、その人は大膽な男で、人々我が後について来いと云つて、杖敷を荒々しく踏んで進んで行つた。座は一寸ばかりも積つて塵の塞をひりちらした中に、古い帳を立てゝ、花のやうに美しい女が一人坐つて居る。熊椅は女に向つて、関守が召されるのだ、急いで来いと云つたが、返事もしないので、近く進み寄つて捕へようとすると、俄かに地も裂ける程の雷が鳴り響いたので、多くの人達は逃る間もなくて、そこに倒れた。そして見廻すと、女は何處へ行つたのか、見えなくなつた。

此の床の上に輝々しき物あり。人々恐る恐るゆきて見るに、狻錦(こまにしき)、呉の綾(くれのあや)、倭文(しづり)、縑(かとり)、褌(こて)、槍(ほこ)、靫(ゆき)、鍬(くわ)の類、この失せつる神寶なりき。

○狻錦――高麗國にて織りし錦。狻は借字。
○呉の綾――支那呉國の綾織物。

武士らこれをとりもたせて、怪しかりける事どもを詳に訴ふ。助も大宮司も、妖怪のなせる事をさとりて、豊雄を責むることをゆるす。されど當罪免れず。守の館にわたされて牢裏に繋がる。大宅の父子多くの物を賄して、罪を贖によりて、百日がほどに赦さるゝ事を得たり。かくて世にたち接らむも面傍なり。姉の大和におはすを訪らひて、しばし彼所に住まむといふ。げにかう憂め見つる後は、重き病をも得るものなり。ゆきて月ごろを過せとて、人を添へて出でたゝす。二郎の姉が家は、石榴市といふ所に、田邊の金忠といふ商人なりける。豊雄が訪らひ來るを喜び、かつ月ごろの事どもをいとほしがりて、いついつまでもこゝに住めとて、念頃に勞りけり。年更りて二月になりぬ。此の石榴市といふは、泊瀬の寺近き所なりき。佛の御中には、泊瀬なむあらたなる事を、唐土までも聞え

○後文　しづおり（後文機の略にて、綾などにて、綺な織り出せるものなり。
○縑　一疋を細かにして固く、織りたる濃き絹布。
○杖　特杖。戦闘の際左手に持ちて敵レ矛を禦ぐもの。
○槌　木製にて人を撲ち倒す用の具、槌の眞中を右手に持ちて闘ふ。
○矢を盛りて背後より右脇に下して負ふしの（一ウツボ一ヤナグヒ）の類。
○當罪　主たる犯罪。
○物を賄ひて　賄賂をおくりて。
○石榴市　大和の國にあり、今の三輪村金谷（カナヤ）なり。
○いとほしがり　ふびんに思ひて。

○泊瀬の寺　―大和にあり、觀音を祭る。上古は京都よりこゝに參籠する人多かりし名所なり。

○あらたなる事、　靈驗の著明

たるとて、都より遥(はるか)に詣づる人の、春はことに多かりけり。此する人は必ずこゝに宿れば、軒を並べて旅人を止めける。

通釋　この座敷の床の上にきら〳〵したものがある。人々が恐る〳〵行つて見ると、高麗錦、呉の綾、倭文織、綾、楯、矛、鞆、鉾などで、これは皆失せた神寶であつた。武士等はこれらの品を人に持たせて歸り、怪しかつた事などをくはしく話した。助も、大宮司も妖怪の仕業といふ事を悟つて、豐雄を責めることをゆるくした。然かし罪は免れることが出來ず。國守の館に渡されて牢の内に繋がれた。大宅の父子は多くの賄賂をおくつて罪を贖ふたので、百日程繋がれて赦される事が出來た。かうした事では世間と交際するのも不面目である。姉が大和の國に居られるのを訪ねて、暫く彼の地で暮らさうと豐雄が云ふ。それでいかにもこんな憂い目にあつた後には、重い病氣にかゝるものだ。姉の所に行つて數月を過すがよいと云ふので、人を附添はして出發さした。二郎の姉の家は大和の石榴市といふ所で、田邊の金忠と云ふ商人であつた。姉は豐雄が訪ねて來たのを喜んで、又この頃の事などを氣の毒に思つて、何時までもこゝで暮すやうにと云つて、親切に勞つた。その年も暮れて翌年の二

月になつた。此の石榴市といふ地は、泊瀬寺に近い所であつた。諸佛の中でも殊に泊瀬の觀音は、靈驗が著しいといふ事が、唐土までも知らかて居ると云ふので、都からや田舎から參詣する人が、春には殊に多くあつた。そして泊瀬に詣る人は必ずこの石榴市で宿るから、軒並に旅人が宿めた。

田邊が家は御明燈心の類を商ひぬれば、所せく人の入り立ちけそ中に、都の人の忍びの詣と見えて、いとよろしき女一人、下髮一人、菓物求むとてこゝに立ちよる。此の下髮豐雄を見て、吾が君のこゝにいますはといふに、驚きて見れば、かの眞女兒まろやなり。あな恐しとて内に隱る。金忠夫婦こは何ぞといへば、かの鬼こゝに逐ひ來る。あれに近寄り給ふなと隱れ惑ふを、人々そはいづくにと立騷ぐ。眞女兒入り來りて、人々な怪しみ給ひそ。吾夫の君な恐れ給ひそ。おのが心より罪に墮し奉る事の悲しさに、御有家もとめて、事

（御明燈心―佛前に供へる燈火。燈心は油火をとしすに油に浸して心（シン）とするもの。綿糸、綿絲を用ふ、又今一般には、細切（ホソヰ）を濃し、皮を剝きて真（マナカ）の白く輕虛なるを取りて用ふ。

（所せく―所せまくの義にて繁昌せる貌。

（菓物―焼きて、芳香を發せしむる料の物。沈香白檀などにて、多くは合薰物（アハセタキモノ）なども。

（御有家―「アリカ」は在處の義にて、「家」は借字なり。

の由縁をもかたり、御心放せさせ奉らむとて、御住家尋ねさせおらせしに、かひありてあひ見奉ることの嬉しさよ。あるじの君よく聞きわけて給へ。我もし怪しき物ならば、此人繁きわたりさへあるに、かうのどかなる昼をいかにせむ。女に縁目あり、日にむかへば影あり。此の正しきことわりを思しわけて、御疑ひを解かせ給へ。豎雄漸人ごこちして、儞正しく人ならぬは、我捕はれて、武士らとともにいきて見れば、きのふにも似ず淺ましく荒れ果てゝ、まことに鬼の住むべき宿に一人居るを、人々捕へむとすれば、忽青天霹靂を震うて、跡なくかき消えぬるをまのあたり見つるに、又逐ひ來て何をか爲す。すみやかに去れといふ。

通釋　田邊の家は御明燈心などの類を商つて居るので、多くの人が入り込んで居る中に、都の人が忍んで參詣すると見えて、非常に美くしい女一人

○由緣　理由。
○御心放――こゝろばらし。
○かひありて　心勞した効ありて。
○わたり　場處。
○かうのどかなる――かくのごとく長閑なるの意。
○日にむかへば云々――妖怪の類が姿を表はす時、日に當れば、術破れて本性を表はすといふより云ふ。
○儞――支那俗字。汝の意。

と、女童一人とが薬物を買ふとてこの店に立ち寄つた。此の女童が豎雄を見て、わが君がこゝに居られるとふので、豎雄が驚いて見ると、かの眞女兒とまろやである。あゝ恐ろしいと云つて内に隱れた。金忠夫婦がこれは何事だと云ふと、彼の鬼がこゝへ逐つて來た、あれに近寄られるなと隱れ迷ふのを、人々がその鬼は何處にと云つて立ち騷いだ。眞女兒は入つて來て、皆樣お怪しみなさるな。吾が夫の君もお恐れなさるな。自分の心からあなたを罪におとした事が悲しいので、あなたの在處を探して、事情をお話して、お心を和らけようと思つて御住所をお尋ねして居たのに、そのかひがあつてお見上けすることの嬉しさよ。この家の御主人、よく聞き分け給へ、自分が若し怪しいものであれば、此のやうに人が多い場所でさへあるのに、こんなに長閒な事に出て來られようか。女服には陰日があり、日に向ふと影もある。此の正しい道理を考へわけて、御疑を解かせられたい、と云ふ。豎雄はやつと人心地がついて、おん身が確かに人でないといふ事は自分が捕はれて、武士等と共に行つて見ると、前日には似もしないで、ひどく荒れ果てゝ居て、誠に鬼が住むやうな家に一人で居るのを、人々が捕へようとすると、急に青空に雷が鳴つて、跡もなく姿が消えたのを眼の前に見てゐるのに、又跡を逐ふて

來て何をするのか。早く立ち去れと云つた。

眞女兒涙を流して、まことにさこそ思さむはことわりなれど、妾が言をもしばし聞かせ給へ。君公廳に召され給ふと聞きしより、かねて憐をかけつる隣の翁をかたらひ、頓に野らなる宿のさまをこしらへし。我を捕らむず時に鳴神響かせしは、まろやが計較りつるなり。其の後船求めて難波の方に遁れしかど、御消息知らまほしく、こゝの御佛にたのみを懸けつるに、二本の杉のしるしありて、嬉しき瀬に流れあふことは、ひとへに大悲の御德かふむりたてまつりしぞかし。種々の神寶は何とて女の盜み出すべき。前の夫の良からぬ心にてこそあれ。よくよく思しわけて。思ふ心の露ばかりをもうけさせ給へとて、潛然と泣く。

○計較——計校に同じ。謀畧を用ひてこしらへたる事の意。
○御消息——御安否。
○二本の杉のしるし——再會を期する意。源氏物語手習卷に「はかなくてよにふる川のうき世には二もとの杉もあかじ二もとの杉＝二本はまたもおひ隱えんと思給ふ人あるべし云々」とあり。
○嬉しき瀬——嬉しき淵。瀨と流とは緣語なり。
○大悲の御德——大悲は佛の三德の一にて、大智の結果として、衆生の苦惱を除去せんとする心。又大悲菩薩の略稱にて、即ち觀世音菩薩をいふ。本傳にては觀世音菩薩のおめぐみをいふ。

（潸然　一滴を流して泣き入る狀にいふ語。）

通釋　眞女兒は涙を流して、成にさう思はれるのは尤もなことであるけれども、私のいふ詞をもしばらく聞かせられよ。君が役所に召されたと聞いたので、以前から悔をかけてゐた、隣の老人を相談相手にして、密かに野邊の宿の樣子に作つたのであつた。そして私を捕へようとした時に、君を遣かせたいは、まつやが計略をして救はたのである。私はその後君を求めて捜し方に遣はたけれども、君の御安否を知りたく思つて、こゝの御佛に願をかけた處が、再會をするしるしがあつて、かう嬉しい機會を得たことは、一途に觀世音菩薩のおめぐみを受けたのである。あのいろ〳〵の財寶はどうして女の身で運び出せやうか。あれは前の夫の良くない心でした事である。よく〳〵考へわけて、私が思つてゐる心のすこしばかりでも受けさせられよと云つて、さめざめと泣く。

（女しき　女らしい。）

（いとほしき——ふびんなに、氣の毒さに等の意。）

（心をとりて　機嫌をとりて。）

（葛城や　新今古集戀一一よそにのみ見てや

異雄或は怪しく、或は憐みて、かさねていふべき詞もなし。金忠夫婦、眞女兒がことわりの明らかなるに、此女しきふるまひを見て、その努、疑ふ心もなく、異雄の物語りにては、世に恐ろしき事よと思ひしに、さる例あるべき世にもあらずかし。はる〳〵と尋ね惑ひ給ふ、

やみなんかつらぎや高間の山々みれの白雲」とあるによる。相逢ふ夜の明け易く亦相逢ふことのおそきを恨むる意。

○夜々ごとに云々　島上為山莖製土など云ふ詩によつて、男女相會するを云ふ。

○初瀬の寺云々　新古今集戀二一年をへぬ祈るらざりは初瀬山尾上の鐘のよその夕聲。」

御心ねのいとほしきに、豐雄肯すとも、我々こゝめさゐらせむとて、一間なる所に迎へける。こゝに一日二日を過すまゝに、金忠夫婦が心をとりて、ひたすら歎きたのみける。其の志の篤きに愛でて豐雄をすゝめて、つひに婚儀をとりむすぶ。豐雄も日々に心とけて、もとより容姿のよろしきを愛で悦び、千とせをかけて契るには、島城や高間の山に夜々ごとにたつ雲も、初瀬の寺の曉の鐘に而收りて、只あひあふ事の遲きをなむ恨みける。

通釋　豐雄は或は疑ひ、或は憚んで、重ねていふべき詞もない　金忠夫婦は眞女兒の云つた道理が明らかなのに、この女らしい振舞をみて、少しも疑ふ心もなくて、豐雄の話では、非常に恐ろしい事だと思つたのに、そんな物怪などの例がある世間でもないであらう。はるゞゝと尋ねまよつてゐられる、その心根がお氣の毒だから、豐雄が承知をしないとも、我々がおとめしようと云つて、一間に迎へた。眞女兒はこゝで一日二日を

過してゐる内に、金忠夫婦の機嫌をとつて、ひたすら歎願した。金忠夫婦は眞女兒の志が厚いのに感じて豐雄にすゝめて、遂に兩人は婚儀をとり結んだ。豐雄も日に〳〵心がとけて、元來その容姿が麗はしいのを愛し喜んで、千歳をかけて夫婦を約束するには、葛城山や高圓の山に毎夜た雲も、初瀬の寺で曉にならす鐘の音で雨も收つて、たゞ相會することの遲いのを恨んだ。

三月にもなりぬ。金忠、豐雄夫婦にむかひて、都わたりには似るべうもあらねど、さすがに紀路にはささりぬらむかし。名細の吉野は春はいとよき所なり。三船の山、葉摘川、常に見るとも飽かぬを、此の頃はいかにおもしろからむ。いざ給へ。出で立ちなむといふ。眞女兒うち笑みて、よき人のよしと見給ひし所は、都の人も見ぬを恨みに聞え侍るを、我が身稚きより、人多き所、或は道の長手をあゆみては、必ず氣のぼりてくるしき病あれば、從駕にえ出立ち

○名細――名の廣く知られたる意にて、吉野山の枕詞となる。
○三船の山――大和國吉野郡にあり。
○葉摘川――夏實の川にて大和にあり。
○いざ給へ――さあ出で給へとの意。
○よき人の云々――萬葉集卷一、天武天皇吉野宮に幸せられし時の御製に「よき人のよしとよく見てよしと言ひし吉野よく見よよき人よくみつ」とあるを本歌とす。

○長手――「長路（ナガチ）の轉語にて」遠き路の意。
○氣のぼりて――遂上する。俗にいふ「ノボセル」。
○山土産――山苞苴、山より、持ち歸りたる土産。
○たのもしくの給ふ――一親切に宣ふの意。

侍らぬぞいと憂たけれ。土産必ず待ちこひ奉るといふを、そはあゆみなむこそ病も苦しからめ。車こそもたらね。いかにもいかにも土は踏ませ參らせじ。留り給はむは豐雄のいかばかり心もとなかりつらむこて、夫婦勸めたつに、豐雄もかうたのもしくの給ふを、道に倒るゝともいかでかはと聞ゆるに、不慮ながら出でたらぬ。人々花やぎて出でぬれど、眞女兒が麗なるには似るべうもあらずぞ見えける。

通釋　三月にもなつた。ある日金忠は、豐雄夫婦に向つて、都邊には似る筈もないが、然しながら紀伊路よりは勝れて居るだらう。あの名高い吉野山は春は殊によい所である。三船の山や、栞摘川は、常に見てるても飽かないのに、此の頃はどんなに面白いかわからない。さあ吉野山へ遊びに出かけよう、之から出發しようと云ふ。眞女兒はほゝゑんで、よい人がよいと見られた吉野の山は、都の人さへも見ないのを恨みとして居るのであるが、自分は幼い時から、人の多い所や、又は遠い道を歩むと、

必ず氣がのぼせて苦しくなる病氣があるから、御同伴することが出來ないのは非常に殘念である。おみやげを持つて歸られるのを、きつとお待してゐるといふのを、それは歩むからこそ病氣も出て苦しいのであらうが、車こそは持つて居ないけれども、どうにかして土はお踏ませをしないから行き給へ。家に殘つて居られるのは、鸚雛がどれ程心細いだらうかと云つて、金忠夫婦が勸めたので、鸚雛も、このやうに親切に云はれるを、例へ道で倒れるともどうして行かないで居られようと云ふので、何となく氣が進まないながらも出立した。人々は花やかに身支度をして出て居るが、眞女兒の美麗なのには及びもつかないやうに見えた。

何某の院は、かねて心よく聞えかはしければ、こゝに訪らふ。主の僧迎へて、此の寒は遲く訪で給ふことよ。花も半は散り過ぎて、鶯の聲もやゝ流るめれど、猶よき方にしるべし侍らむとて、夕食（ゆふげ）いと清くして食せける。明けゆく空いたう霞みたるを、晴れゆくまゝに見渡せば、此の院は高き所にて、こゝかしこ僧坊どもあらはに見

○心よく聞えかはし——親密に交際する。
○うぐひすの囀云々——鸚が啼きさかるを詩語にて流鶯といふによりてかく云ふ。
○しるべ——案内。
○いたう——「いたく」の音便。
○僧坊——僧侶の居所。

○あらに　はつきり。
○そこはかとなく――何處ということもなく。
○初詣――初めての參詣。
○行幸の宮　吉野の行在所なり。
○石はしる――瀧の枕詞。瀧は岩のとなどを走り流るゝものなり、瀧、瀧津瀬にかけていふ。
○瀧つ瀬――瀧津瀬にて流の狹き河流、はやせ。古は奔流を瀧といひ、現今いふ瀧は、垂水（タルミ）といひしなり。
○小さき鰷――鰷は字書に魦（バエ）とあり。「アユ」に用ひたるは白鰷にあてたるならん。
○檜破子　檜物にて造りたる破子。ワリゴ。破子は今の辨當箱。

おろさるゝ。山の鳥ども、そこはかとなく囀りあひて、木草の花、色々に咲きまじりたる、同じ山里ながら、目さむるこゝちせらる。初詣には瀧ある方こそ見所はおほかめれとて、彼方にしるべの人乞ひて出でたつ。谷を繞りて下りゆく、いにしへ行幸の宮ありし所は、石はしる瀧つせのむせび流るゝに、ちひさき鰷どもの水に逆ふなど、目もあやにおもしろし。檜破子打散して喰ひつゝあそぶ。

通釋　何某といふ寺院は、以前から親密に交つて居たので、そこを訪ねた。主人の僧侶が迎へて、この春は遲く來られた事だ。もう花は半分は散つてしまつて、鶯の啼聲も大分流れたが、猶ほよい所があるから、そこへ案內して差上けようと云つて、夕食を清らかにして食せた。翌朝になつて明けて行く空が、非常に霞んで居るのを、晴れて行くに從つて見渡すと、此の院は高い所にあつて、此處彼所の僧坊が、はつきりと見下される。山の鳥等も、何處からともなく囀り合つて、木や草の花が、色々に咲き交つて居るのも美しい。同じ山や里とは云ひ乍ら目も覺めるやうな

心地がする。初めて参詣したものには瀧のある方が見所が多いだらうと云ふので、その方面をよく知つて居る人を頼んで出かけた。谷を繞つて下の方へ行くと、昔の行在所のあつた所へ出る、その所は石の上を早く流れる瀬かむせんで流れてゐて、小さい鰷共が水に逆つて川上に上つて行くなど、目もさめるやうに面白い。檜破子を開け散らして物を食ひ乍ら遊んだ。

岩がねづたひに來る人あり。瑳は績麻を、わがねたることゝなほど、手足いと健やかなる翁なり。此の瀧の下にあゆみ來る。人々見て奇しげにまもりたるに、眞女兒も、まろやも、此の人を背に見ぬふりなるを、翁、渠二人をよくまもりて、あやし、此の邪神、など人を惑はす。翁がまのあたりを、かくてもあるやとつぶやくを聞きて、此の二人忽ち躍りたちて、瀧に飛び入ると見しが、水は大虚に湧き上りて見えずなるほどに、雲、摺墨をうちこぼしたるごと

○岩がね——岩根。
○績麻——績（ウ）みたる苧（ヲ）。績むには、麻又は苧を細く裂き、長く合せて繋（ヨ）ること。
○わがね——綰れにて、撓（タ）め曲けて輪にすること。
○摺墨——「スルスミ」墨に同じ。墨はすりて用ふるより云ふ。
○雨篠を亂して——大雨の烈しく降り來たる形容。篠に細き竹の種類。

く、雨篠を亂してふり來る。翁人々の慌忙惑ふを、きつゐへて、人里にくたる。賤しき軒にかゞまりて、生けるこゝちもせぬを、翁豊雄に向ひ、熟々そこの面を見るに、此の隠神のために惱まされ給ふが、吾救はずば、つひに命をも失ひつべし、後よく愼み給へといふ。豊雄地に額づきて、此の事の始より語り出でて、猶命得させ給へとて、恐れみ敬ひて願ふ。翁さればこそ、此の邪神は年經たる蛇なり。かれが姓は姪なる物にて、牛と孽みては麟を生み、馬とあひては龍馬を生むといへり。此の魅はせつるも、はたそこの秀麗に奸たると見えたり。かくまて執ねきを、よく愼み給はずば、おそらくは命を失ひ給ふべしといふに、人々いよ〳〵恐れ惑ひつゝ、翁を祟まへて遠津神にこそと拜みあへり。

○きつゐへて――押し靜めて。
○隠神――邪神。
○額きて――丁寧に頭を下げて禮をすること。古は額(ヒタヒ)を(ヌカ)といひしよりいふ。
○孽みては――交尾しては。
○執ねき――執念ぶかい。執念の字音を活用したるなり。
○祟まへて――あかめての延音言。
○遠津神――先祖の神。

通釋　岩根蔭に來る人がある。頭髪は縮んだ芋を丸く束ねてゐるやうであるけれども、手足は非常に健康らしい老人である。その人が此のはや瀬の方へ歩んで來た。そして遊んで居た人々を不思議さうに見守ると、貴女見も、まゐやも此の老人に背を向けて見ない風をしてゐる、老人は彼等二人をよくよく見て、不思議なことだ。此の惡神はどうして人をば殺すのか、私の目の前でも、こんなにしてゐるのかと、つぶやくのを聞いて、此の二人は岸に躍り上つて、瀧の中へ飛び込と思ふと、水が大空に湧き上つて見えなくなるうちに、雲が雨を流したように眞黒になつて、大雨が烈しく降つて來た。老人は人々があわて騒ぐのを、押し鎭めて、人里に引連れて下つた。賤しい家の軒下にかゞんで、生きた心地もしないでゐた、老人は豐雄に向つて、つく〴〵あなたの顔を見ると、あの惡神のために害しられて居られるが、自分が救はなかつたら、遂に命も失つたであらう。これから以後はよく愼み給へといふ。豐雄は地に額をつけて、此の事を始から話をして、なほどうか命を助け給へと云つて、恐れ敬つて願つた。翁が、なるほどさうであらう、この邪神は年を經た蛇である。彼の性質は姪なもので、牛と交ると麟を生み、馬とあふと龍馬を生むと云つてゐる。あなたを迷はせたのも、又あなたの容貌がよいの

で心をかけたと思はれる。こんなにまでも執念ぶかいのであるから、よくお慎みなさらないと、恐らくは命をお失ひなさるだらうといふので、人々はいよいよ恐れまどひながら、老人を崇めて遠い祖先の神であらうと拝みあつた。

翁打笑みて、おのれは神にもあらず。大倭の神社に仕へまつる常の酒人といふ翁なり。道の程見たてゝまゐらせむ。いざ給へとて出でたてば、人々後につきて歸り來る。明の日大倭の郷にゆきて、翁が恵みを謝し、且つ美濃絹三疋、筑紫綿二屯を遣り來り、猶此の妖災の身祓し給へとつゝしみて願ふ。翁これを納めて、祝部らにわかちあたへ、自は一疋一屯をもとどめずして、豊雄にむかひ、爺、儞が秀麗に奸けて、儞を纏ふ。儞又爺が假の化に魅はされて、丈夫心なし。今より雄氣してよく心を静まりまさば、此らの邪神を遂は

○美濃絹――美濃産の絹にて、古昔貴の人の包に用ひらる。
○三疋――疋は布帛を若干の長さにして、一巻にしたるものを数ふる語。
○筑紫綿の眞綿、萬葉集巻三、沙彌滿誓詠綿歌一しらぬひ筑紫の綿は身につけていまだはきねどあたゝけく見ゆ。
○一屯――古昔方を数へし語。
○爺――「カレ」と訓むは若生の意よりいふなるべし。

むに、翁が力をもかり給はじ。ゆめ〳〵心を靜めませとて、實やかに覺しぬ。豊雄夢のさめたる心地に、禮言盡さずして歸り來る。金忠にむかひて、此の年月斎に魅はされしは、己が心正しからぬなりし。親兄の孝をもなさで、君が家の禍ならむは由縁なし。御惠いとかたじけなけれど、又も參りなむとて、紀の國に歸りける。

通釋　老人は笑つて、自分は神でもない。大和の神社にお仕へしてゐる當處の酒人と云ふ老人である。歸りの道を見送つて差上げよう。さあ出かけられよと云つて出掛けると、人々はその老人の後について歸つて來た。その翌日大和の里に行つて、昨日世話になつた老人の恩を感謝し、且つ美濃絹を三疋と、紫絹を二疋とを贈つて、曾ほこの妖怪の憑いた身を清められたいと、慎しんで言つた。老人はこの贈物を受け納めて、神主達に分配し、自分は一疋の絹も、一屯の綿をも取らないで、豊雄に向つて、あの蛇は、おん身の容貌が美しいのに心をかけて、おん身にまつはつた。おん身も又蛇の假の姿に魅せられて、大丈夫たる心がない。これ

○雄氣――「オトコサビ」大丈夫の意氣を盛にすること。
○禮言――謝禮の言葉。

からは雄々しく元氣を持つて、よく心をもちつけるならば、これらの邪神を逐ひやるのに、私の力を借るまでもない、必ず心をもちつけられよと云つて、まめやかに覺した。豐雄は夢がさめたやうな心地で、お禮の詞も云ひ盡されないで歸つて來た。そして金忠に向つてこの年月をあの蛇に魅せられたのは、自分の心が正しくなかつたからであらう、親や兄への孝行をも盡さないで、君の家の厄介者となるのは間違つてゐる。これまでの御恩は大變ありがたいけれども、又參りなむと云つて、紀伊の國へ歸つた。

父母太郎夫婦此の恐しかりつる事を聞いて、いよ〳〵豐雄が過ならぬを憚み、かつは妖怪の執ねきを恐れける。かくて鰥にてあらするにこそ、妻むかへさせむとてはかりける。芝の里に芝の庄司なるものあり。女子一人もてりしを、大内の采女にまゐらせてありしが、此の度いとま申給はり、此の豐雄を聟がねにとて、媒氏をもて大宅が許へいひ納る。よき事なりと、卽て因をなしける。かくて都

○鰥ふ。　獨身の男を云
○鰥にてあらす云々　獨身にてあらすればこそ、かくの如き災危にあふとの意。
○庄司——本は庄園のことを掌る者。莊司に同じ。
○もてりし——持ちてありしの約言。
○大内——禁中、御所。

へも迎の人を登しかば、此采女富子なるものよろこびて歸り來る。年來の大宮仕へに馴れこしかば、萬の行儀よりして、姿なども花やぎ勝りけり。豐雄こゝに迎へられて見るに、此の富子がかたちいとよく萬心に足ひぬるに、かの蛇が懸想せしことも、おろ〳〵おもひ出づるなるべし。はじめの夜は事なければ書かず。

通釋　父母や兄夫婦は此の恐ろしかつた事を聞いて、いよ〳〵豐雄の過失でない事を知つて憐に思ひ、又蛇の執念ぶかい事を恐れた。こうして獨身で居らす故に、この様な事も出來るのだから、妻を迎へさせようと相談した。芝の里に芝の庄司と云ふ者がゐる。この庄司は女子を一人持つゐるのを、禁中の采女として御奉公させてあつたが、今度暇を頂いて此の豐雄を聟にしたいと云つて、媒酌人を以て大宅の許に申し込んだ。良い事だと云ふので、直に婚約を結んだ。それで京都へも迎への人を上せたから、この采女の富子も喜んで歸つて來た。年來御所仕へに馴れてきたので、萬事の行儀を始めとして、容姿などもはなやかに勝れて居る。

○采女――宮へ部の少領以上の娘の美貌なるものを禁中に奉らしめて膳部（カシハデ）即ち天皇の御膳を役する女官。
○四なし――婚約をした。
○花やぎ――華美な。
○懸想――おもひをかけ想ひしたふこと。
○おろ〳〵――おろ〳〵は不十分の意。富子の容色が勝れたるに感じて、かの蛇の事などはもう大抵忘れたらうとの意。

豊雄はこの庄司の家に迎へられて見ると、この富子の容貌が殊に美しくて、その他すべてが満足なのにつけて。かの蛇が連想したことも大抵忘れて、まれに思ひ出す事があつた。はじめの夜は何のまもないから当かない。

二日の夜、よきほどの酔ごこちにて、年来の大内住に、邊部の人ははたうるさくささむ。かの御わたりにては、何の中将、宰相の君などいふに添ひぶし給ふらむ。今更にくゝこそおぼゆれなど戯るゝに、富子郎て面をあげて、古き契を忘れ給ひて、かくことなる事なき人を時めかし給ふこそ、こなたよりまして悪くあれといふは、妾こそかはれ、正しく眞女児が聲なり。聞くにあさましう身の毛もたちて恐しく、唯あきれまどふを、女打ゑみて、吾が君な怪しみ給ひそ。海に誓ひ、山に盟ひし事を速くわすれ給ふとも、さるべき縁し

○はた云々――脚（ハタ）両側に思ひ給はむ。
○かの御わたり――わたりは邊にて、大宮を指す。彼の祭中にてはの意。
○宰相――參議の異名。
○添ひぶし　副ひて臥すこと。
○古き契　以前の契、眞女児との関係を指す。
○ことなる事なき人――特に何と云ふべき事もなき人にて無関係の人の意。源氏物語夕顔巻にも一かくことなることなき人をぬておはして云々」とあり。

のあれば、又もあひ見奉るものを、他し人のいふことをさことしくおぼして、強に遠ざけ給はむには、恨み報ひなむ。紀路の山々さばかり高くとも、君が血をもて峰より谷に灌ぎくださむ。あたら御身をいたづらになしはて給ひそといふに、唯わなゝきにわなゝかれて、今やとらるべきこゝちに死に入りける。屏風のうしろより、吾が君いかにむつかり給ふ。かうめでたき御契なるはとて、出づるはさろやなり。見るに又胎を飛し、眼を閉ぢて、伏向に臥す。和めて驚しつ、かはる〳〵物うちいへど、唯死に入りたるやうにて、夜明けぬ。

通釋　二日目の夜、よい氣持の醉心地で、年來の御所住ひをなさつたから、山舍の者は面倒に思はれるだらう。彼の御所では、何の中將宰相の君などと云ふ方に添ひ臥しをなされたことであらう。それを思ふと、今更ながら憎くらしいと思ふなどと云つて戲れると、富子は顏をあけて、古い

○時めかし――好運に乘じて勢力を張る事。寵愛。
○身の毛もたつ――身の毛もたつとは恐ることの甚だしい貌。
○緣し――「エニシ」は緣の異音、「し」は助詞。
○わなゝきに云々――わなゝきはをのゝきと同しく、身のふるへて深く怖るゝさま。
○むつかり給ふ――心に滿足しないで腹立ちて泣く。
○あたら――可惜。接頭語にて、おしい、おしむべきなどの意。

契をお忘れになつて、このやうに由緣もない人を、贔屓されることこそ、私にまして、あなたの方が憎らしいといふのは、姿こそは異つて居るが、確かに眞女兒の聲である。その聲を聞くとあまりのことで身の毛も立つて恐ろしくて、唯あきれ迷ふのを、女は笑つて、吾が君怪しみなさるな泊に誓ひ、山に盟つた事を早くお忘れになつても、然るべき緣があるから、又再びお逢ひするのを、他人のいふことを成と思つて、しきりに逃ごけられるならば、あなたをお恨みして仕返しをしよう。紀伊路の山かどれ程高いとても、あなたの血を以て、峯から谷へそゝぎかけよう〳〵可惜御身を徒死させられるなといふので、只慄ひに慄へて、今や命を取られるやうな心地がして、息も絶え絶えである。すると昇風のうしろから、吾が君はなにの爲め憤つて居られるのか、こんなにおめでたい御緣なのにといつて、出て來たのはまろやである。それを見ると又膽を飛すほど驚いて、眼を閉ぢてうつぶしになつた。女とまろやの二人は盟雄を、なだめたりおどしたりして、代る〳〵いひ聞かしたけれども、盟雄は唯死んだやうになつてゐて、夜が明けた。

かくて閻房を免れ出でて、庄司にむかひ、かう〳〵の恐しき事あなり。これいかにして放けなむ。よく計り給へといふも、背にや聞くらむと、聲を小やかにしてかたる。庄司も妻も面を青くして、歎きまどひ、こはいかにすべき。こゝに都の鞍馬寺の僧の、年々熊野に詣づるが、昨日より此の向岳の閣者に宿りたり。いとも驗ある法師にて、凡、疫病、妖災、蝗などをよく祈るよしにて、此の郷の人は貴みあへり。此の法師請へこむとて、あわたゞしく呼びつくるに、漸して來りぬ。しか〳〵のよしを語れば、此の法師鼻を高くして、これらの蠱物らを捉らむは、何の難き事にもあらじ。必す靜まりおはせとやすげにいふに、人々心落ちゐぬ。法師まづ雄黄をもとめて、藥の水を調じ、小瓶に堪へて、かの閻戻にむかふ。人々鷲隱るゝを、法師嘲わらひて、老いたるも、童も必すそこにおはせ。此の

○筏馬寺（天台宗、山城國愛宕郡にあり。〈京都市の北方〉。

○向岳　眞向の山の意。古訓なり。

○閣者　梵語、阿闍若の略にて、無諍、空閑、閑靜、遠離處などと譯す。寺院、精舍等ないふ。

○蝗――稻を害する蟲にて、種類多し。

○蠱物――妖アヤしき術にて、人を呪ひて害を加ふること。

○雄黄――鑛物、雄延石（ヤイクワンセキ）、赤黄色にして、脂様の光澤あり。本草に「治二鼠瘡蛇蝮毒及疳一、殺二精物惡鬼邪氣百蟲一、能殺二百蟲一避二百邪一」云々」と。

蛇唯今捉りて見せ奉らむとて、すゝみゆく。

通釋　このやうにして夜が明けたので豐雄は、寢室を逃げ出して、庄司に向つて斯様々々の恐ろしい事があるのである。これをどうして逃げようかよく計をめぐらして欲しいと云ふのも、若しや後で聞いては居ないかと思つて、聲を小さくして話した。庄司も妻、もこれを聞いて顏を青くして、悲しみ心配して、これはどうしようかと迷つた　こゝに都の鞍馬寺の僧が、往年熊野にお詣りするが、その僧が昨日から、此の眞間の山寺に宿つて居られる。誠にきゝめのある法師で、凡て流行病、妖怪、和蟲などをよく封じるといふことで、此の里の人は貴んでゐる。この法師をお迎へして來ようと云つて、あわてゝ呼び寄せると、しばらくして牛た。かやうゝといふことを話すと、此の法師は鼻を高くして、これらの妖怪を捕まへるのは、何の雜作もない事だ。どうか靜かにして居られよと容易さうにいふので、人々も安心をした。法師はまづ雄黃を求めて、水藥を調合して、小さい瓶にその藥を一ぱいにして、かの寢室に向つた。人々が驚き恐れて隱れるのを、法師はあざけり笑つて、老人も子供も必ずそこに居られよ。この蛇を唯今捕へてお見せしようと云つて近んで行

く。

閨の戸あくるを遅しと、かの蛇頭をさし出して法師にむかふ。この頭何ばかりの物ぞ。此の戸口に充ち満ちて、雪を積みたるよりも白く、輝々しく、眼は鏡のごとく、角は枯木のごと、三尺餘りの口を開き、紅の舌を吐きて、唯一呑に飲むらむ勢をなす。あなやと叫びて、手にする忍し小瓶をもそこに打すてゝ、たつ足もなく、展轉ころげはひ倒れて、からうじてのがれ來り、人々にむかひて、あな恐し。祟りまします御神にてましますものを、など法師らが祈り奉らむ。此の手足なくば、はた命失ひてむといふ〳〵絶え入りぬ。人々扶け起すれど、すべて面も肌も黒く赤く染めなしたるがごとく、熱き事焚火に手さすらむにひとし。毒氣にあたりたると見えて、後は唯眼のみ

○絶え入りぬ——氣絶する。

はたらきて、物いひたげなれど、聲さへなさでである。水濕ぎなどすれど、つひに死にける。

通釋　寢室の戸を開けるが早いか、彼の蛇は頭をさし出して法師に向つて來た。この頭の大きさは、どれ程のものであらうか。その戸口に充ち滿ちて、雪が積つたよりも白くて、颯々とまばゆく、眼は鏡のやうで、角は枯木の如く、三尺餘りもある口を開き、紅の舌を出して、唯一呑に飲まうとする勢である。法師はこれを見るとあつと叫んで、手に持つて居た小瓶をも其所になげ捨てゝ、足も立たず、轉び倒れて、漸くのことで逃げて來て、人々に向つて、あゝ恐ろしい。あれは祟りをする神で居られるから、どうして私のような者が祈る事が出來よう。この手足がなかつたら、きつと命を失つたのであらうと云ひつゝ息が絶えた。人々が扶け起すけれども、顏も肌も凡て黒く赤く染めたやうで、その身体の熱い事は焚火に手をふれる程に熱い。蛇の毒氣にあたつたと見えて、その後は唯眼ばかりが動いて、物を云ひた相であるが、聲さへも出ない。人々は水をそゝぎかけたりしたけれども、遂に死んだ。

これを見る人、いよ〳〵魂も身に添はぬ思ひして泣き惑ふ。豊雄すこし心を収めて、かく験ある法師だも祈り得ず、執ねく我を纏ふものから、天地のあひだにあらむかぎりは、探し得られなむ。おのが命ひとつに、人々を苦しむるは實ならず。今は人もかたらはじ。やすくおぼせとて、閨房にゆくを、庄司の人々こは物に狂ひ給ふかといへど、更に聞かず顔にかしこにゆく。戸を静に明くれば、物の騒がしき音もなくて、此の二人ぞむかひゐたる。富子、豊雄にむかひて、君何の讐に我を捉へむとて、人をかたらひ給ふ。此の後も仇をもて報ひ給はゞ、君が御身のみにあらじ。此の郷の人々をもすべて苦しきめ見せなむ。ひたすら吾が貞操をうれしとおぼして、徒々しき御心をなおぼしそと、いとけさうじていふぞ、うたてかりける。豊雄いふは、世の諺にも聞ゆることあり。人かならず虎を害する心

○恐ろしく云々　甚しく恐れたる貌。
○執ねく云々　執念ぶかく我にまとひつく以上との意。
○今は人も云々——今はもう、人にも相談すまい。
○けさうじて——媚態をつくりて。

○かりそめ言をだにも——戯れ言にも。
○いとむくつけなり——甚だ気味悪し。

なけれども、虎反りて人を傷る意ありとや。僧人ならぬ心より、我を縊うて、幾度かからきめを見するさへあるに、かりそめ言をだにも、此の恐しき報ひをなむいふは、いとむくつけなり。されど吾が慕ふ心ははた世人にもかはらざれば、こゝにありて人々の歎き給はむがいたはし。此の富子が命ひとつたすけよかし。然我をいづくにも連れゆけといへば、いと嬉しげに點頭をる。

通釋　この法師の死を見た人々は、いよいよ生きた心地がしないで泣き惑った。豊雄は少し心を落ち付けて、このやうに霊験のある法師でさへも、祈ることが出来ない、そんな妖怪が、執念深く自分につけまとふのであるから、この天地の間に居る限りは、探し出されるであらう。自分の一つの爲めに人々を苦しめるのは、誠實なことでない。もう今は人に相談をかけまい、安心せられよと云つて、寝室に行くのを、庄司一家の人々は、これは狂氣したのかと云つて止めたが、少しも聞きいれないで寝室に行つた。戸を靜に開けると、物騒がしい音もしないで、此の二人

が向つて居た。富子が豐雄に向つて、あなたは何の恨で私を捕へようとして人に相談されるのか。此の後も仇を以て私にお報いになるならば、あなたの身だけではなく、此の郷の人々の凡てに、苦しい日を見せよう。ひたすら私の操を嬉しいとお考へになつて、徒な心をお持ちなさるなと、媚をつくつて云ふのも、いとはしい事であつた。豐雄が云ふには、世間の諺にも云つて居ることがある。人が必ず、虎を害する心がなくても、虎は却つて人を害する心があるとか云ふ。汝は人でない心を以て自分をつけまとうて、度々自分に憂い目を見せることさへあるのに、例へ戯れ言にもしろ、此の恐ろしい報いをしようといふのは、非常に氣味が悪いことである。けれども私を慕つてくれる心は又、世の人とも異つて居ないから、汝との約束を守らう、しかし此所に居て多くの人々に數をかけるのは氣の毒であるから、この富子の命を助けよ。そして私を何處へでも連れて行けと云ふと、誠に嬉しさうに點頭いた。

又立ち出でて庄司に向ひ、かう淺ましきものゝ添ひてあれば、こゝにありて、人々を苦しめ奉らむは、いと心なきことなり。唯今暇

給はらば、娘子の命も悲なくおはすべしといふを、庄司更に肯けず。我弓の本末をも知りながら、かくいひがひなからむは、大宅の人々のおぼす心もはづかし。猶計較なむ。小松原の道成寺に、法海和尚とて、貴き新の師おはす。今は老いて室の外にも出でずと聞けど、我が為には、いかにもいかにも拾て給はじとて、馬にて急ぎ出でたちぬ。道遥なれば夜なかばかりに関若に到る。老和尚眠識をゐざり出でて、此の物がたりを聞きて、そは浅ましくおぼすべし。今は老い朽ちて験あるべくもおぼえ侍らねど、君が家の災を默してやあらむ。まづおはせ、法師も即詣でなむとて、芥子の香にしみたる袈裟とり出でて、庄司にあたへ、斎を易くすかしよせて、これをもて頭に打被け、力を出して押しふせ給へ。手弱くあらばおそらくは逃げ去らむ。よく念じてよくなし給へと、實やかに教ふ。庄司よろ

○道成寺——紀伊國日高郡矢田村大字土生にある天台宗の寺。天音山千手院といふ。本尊は千手観音。文武天皇の勅願といふ。僧安珍と清姫との説話によりて名高し。
○法海和尚——和泉國知泉郡紫尾山、旗振寺の僧、行基の弟子。
○眠識——僧の寝室。
○芥子の香——護摩の芥子焼の香気。芥子の實を護摩木に合せて焚く故にいふ。
○袈裟——梵語、法師の、肩にかけて衣の上に被ふもの、大小により五條、七條、九條等三種に別つ。本來の色は、黒茶、赤茶、鼠色、木蘭色等なり。
○すかしよせて——欺き寄せて。

こびつゝ、馬を飛してかへりぬ。

通釋　豐雄は寢室を又出て來て庄司に向つて、こんな淺ましいものがつき纏つて、自分が此所に居て人々を苦しめることは、非常に心のないことであるから、唯今暇を下さらば富子の命も無事であらうと云ふのを、庄司は少しも聞き入れない。そして云ふには、自分は弓の本末を知つた武士でありながら、かうふがひないことでは、大宅の人々がなにと考へられるかそれが恥かしい。なほこの上に考へよう。小松原の道成寺に、法海和尚と云つて、貴い祈の僧が居られる。今は老いて室の外にさへも出られないと聞いて居るが、自分の爲には、なにとかして、捨て置かれはすまいと云つて、馬に乘つて急いで出立した。道が遠いので夜半頃に道成寺に着いた。老和尚は寢所を這ひ出て、庄司からこの話を聞いて、それはあきれ果てたことに思はれよう。自分も今は年老いて靈驗があらうとも思はれないが、あなたの家の災難を默つて見て居る事は出來ない。まづ先に歸られよ、私も直に參らうと云つて、芥子の香の必み込んだ袈裟を取り出して、庄司に與へ、その蛇をうまく欺きよせて、これを以て頭に打ち被らせて、力を出して押しふせられよ。若し力弱く押へると逃げ

去るだらうから、よく心に留めてよく押しふせられよと、丁寧に教へた。庄司は喜びながら、馬を飛ばして歸つて来た。

豊雄を密に招きて、此の事よくしてよとて袈裟をあたふ。豊雄これを懐に隠して、閨房にゆき、庄司今はいとまたびぬ。いざたまへ、出立でなむと、いと嬉しげにてあるを、此の袈裟とり出でて、はやく打被け、力を極めて押しふせぬれば、あな苦し。個何とてかく情なきぞ。しばしこゝ放せよかしといへど、猶力にまかせて押しふせぬ。法海和尚の輿やがて入り来る。庄司の人々に扶けられて、こゝに至り給ひ、口のうちつぶ〳〵と念じ給ひつゝ、豊雄を退けて、かの袈裟とりて見給へば、富子は現なく臥したる上に、白き蛇の三尺あまりなる蟠りて、動きだもせずぞある。老和尚これを提へて、徒弟が捧げたる鐵鉢に納れ給ふ。猶念じ給へば、屏風の背より尺ば

○鐵鉢――僧の用ふる鐵製の鉢。

かりの小蛇這ひ出づるを、是をも捉へて鉢に納れ給ひ、かの袈裟をもてよく封じ給ひ、そがまゝに輿に乗せ給へば、人々掌をあはせ、涙を流して敬ひ奉る。蘭若に歸り給ひて、堂の前を、深く堀らせて、鉢のまゝに埋めさせ、永劫があひだ、世に出づることを戒しめ給ふ。今猶蛇が塚ありとかや。庄司が女子はつひに病にそみて、むなしくなりぬ。豐雄は命恙なしとなむかたりつたへける。

通釋　庄司は家に歸つて、豐雄を密に招いて、この事をよくせよと云つて袈裟を與へた。豐雄は袈裟を懐中に隠して、寢室に行つて、庄司も今は暇をくれた、さあ來給へ立ち出でよっと云ふと、非常に嬉しさうにして居るのに。この袈裟を取り出して、すばやく打ち被せて、力を籠めて押しふせると、ああ苦しい。汝は何故このやうに情がないのか。しばらくこゝを放してくれよと云ふけれども、なほ力まかせに押しふせた。法海和尚の輿もやがて入つて來た。和尚は庄司の家の人々に扶けられて、この空に來られて、口のうちでぶつぶつと小聲にて唱へ祈られながら、豐雄

○永劫　永久。劫は梵語「劫波」の略にて、大時分又は分別時節と譯す。人壽八万四千歳より、百歳毎に一歳を減じ、以て十歳に至り、更に百歳毎に一歳を加し以て元の八萬四千歳に復するを、一小劫とす。

○恙なし　「ツ・ガ」は上古の俗列、苦難なを「タヽミ」といへるより轉じたる語。

を退かせて、かの袈裟を取つて見られると、富子は正氣を失つて臥して居る上に、白い蛇の三尺あまりなのが渦をまいて居て、動きもしないで居る。老和尚はこれを捕へて、弟子が捧げて居る鉄の鉢に入れられた。猶念じられると、屏風の後から一尺ばかりの小蛇が這ひ出たのを、これも捕へて鉢に入れられて、かの袈裟を以てよく封じられて、そのまゝで輿に乘られると、人々は手を合せ、涙を流して敬ひ奉つた。和尚は寺に歸られて、堂の前を、深く堀らせて、鉢のまゝで埋めさせて、永久に、世に出ることを禁じられた。今でも蛇の塚があると云ふことだ。庄司の娘は遂に病氣に犯されて死んだ。豐雄は命が無事であつたと語り傳へて居る。

卷之五

青頭巾

むかし快庵禪師といふ大德の聖おはしけり。總角より敎外の旨をあきらめ給ひて、常に身を雲水にまかせ給ふ。美濃の國の龍泰寺に一夏を滿しめ、此の秋は奥羽の方に住むとて旅立ち給ふ。ゆき〳〵て下野の國に入り給ふ。富田と云ふ里にて、日入りはてぬれば、大きなる家の賑はしげなるに立ちよりて、一宿をもとめ給ふに、田畑よりかへる男等、黄昏にこの僧の立てるを見て、大きに怕れたるさまして、山の鬼こそ來りたれ。人皆出でよと呼びのゝしる。家の內にも騒ぎたち、女童は泣きさけび展轉びて隅々に竄る。あるじ山枌

○快庵禪師——名は妙慶快庵はその字にて、野州大中寺の開山たり。明應二年寂。禪師に法師といふに等し。

○大德の聖——大德は既出(佛法僧寶之見よ)聖は名僧。

○總角——小兒の頭髮を總べ集めて頭の兩端に角の形を造るを「總角(アゲマキ)」といふ。因つて幼時の時代を指す。

○敎外の旨——敎義以外の謂所以心傳心にて、相承する所の禪宗の所訣。

をとりて走り出で、外の方を見るに、年紀五旬にちかき老僧の、頭に紺染の巾を破き、身に墨衣の破れたるを穿て、裏みたる物を背におひたるが、秋をもてさしまねき、檀越なに事にてかばかり備へ給ふや。通衢の僧今夜ばかりの宿をかり奉らむとて、こゝに人を待ちしに、おもひきや、かく異しめられむとは。痩法師の強盗などなすべきにもあらぬを、なあやしみ給ひそといふ。莊主杓を捨て、手を拍つて笑ひ、渠等が愚なる眼より、客僧をおどしまゐらせぬ。一宿を供養して罪を贖ひたてまつらむと、禮まひて奥の方に迎へ、こゝろよく食をもすゝめて褻しけり。

通釋　昔快庵禪師といふ徳のある高僧があつた。幼少の時から禪宗の教義以外の教までも明らめられて、常に身を雲や水と共にして諸國を托鉢して歩かれた。或る年美濃の國の龍泰寺で夏安居を修めて、今年の秋は奥羽の方に行つて暮さうと云ふので出立しられた。道中を続けて下野の國に

○雲水　雲や水に身を委せて行脚することにて、こゝは修する僧、即ち托鉢僧をもいふ。

○一夏―夏（ゲ）は夏安居（アンゴ）のゲにて、僧侶が或日數の間外出せずして坐禪修業を勵むを安居と云ひ、我が國にては陰暦の四月十五日より七月十五日までの間に行ひその夏期なるが故に夏安居又は略して夏ともいふ。

○黄昏―夕暮の時。誰そ彼はと見分け難き夜にして、たそがれ時の略。

○展轉びて―ふし轉びて。

○山杉―山に行くに用ふる杉。杉は頁ふ木にて即ち今の天秤棒。

○檀越―檀那の義にて檀家に等し（夢應の鯉魚注を見よ）本條にては足下といふ程の敬稱の意。

入られた。富田と云ふ里まで來られると、日が暮れてしまつたので、大きな豐かさうな家に立ち寄つて、一夜の宿を求められると、田畑から歸つて來る男等が、夕暮時にこの僧が立つて居るのを見て、大いに恐れた樣子をして、山の鬼が來た、人皆外へ出よと呼び叫んだ。すると家の內でも騷ぎ立てゝ、女の子は泣き叫んで轉びまはりながら、家の隅々に隱れた。その家の主人が山杣を持つて家の外に走り出て、戶外の方を見ると、年のころは五十歲に近い老僧が、頭に紺染の頭布を被つて、身には墨染の衣の破れたのを着て、何かを包んだ物を背に負うて居るが、杖を以て主人をさし招いて、あなたは何事が出來てこんなに用意をなさるのか。諸國を遍歷する僧だが、今夜の一宿をお借りしようと思つて、こゝで人を待つて居たのに、思ひがけもなく、このやうに怪しく思はれようとは。瘦法師の力のないものが强盜などをするべきこともないのに、怪しみなさるなと云ふと、主人は手に持つた杣を捨てゝ、手を拍つて笑ひ、彼等の愚かな目で見誤つたことから、あなたを害した。一夜の宿をお供養して、その罪を許され奉らんと云つて、禮儀を厚くして奧座敷の方に迎へ、心よく食事をすゝめて饗應した。

○遍參　諸國の佛寺を遍く參詣するものの意。

○下等――下賤なる者の意にて、程達といふ程の通語。
○希有――珍らしき。
○妖言――常識を外れたる言葉をたわけた言。
○一宇――一軒に同じ。
○菩提院――今の菩提所といふに同じ。「檀那寺。
○阿闍梨――梵語にて阿闍梨耶、略語、始めは僧の師たる者の尊稱なりしが、後律師の稱號となれり。「アザリ」は古語なり。
○猶子――兄弟親族又は他人の子弟を養子としたる者。宗旨相續の養子にあらず。
○歸依――佛語、佛德に歸し依ることにてたよりとすること。
○うらなく――遠慮なく。心をきなく。
○越の國――今の越前、越中、越後、加賀、の諸國。

莊主かたりていふ、さきに下等が御僧を見て、鬼來りしと、おそれしも、さるいはれの侍るなり。こゝに希有の物がたりの侍る。妖言ながら人にもつたへ給へかし。此の里の上の山に、一宇の蘭若の侍る。故は小山氏の菩提院にて、代々大德の住み給ふなり。今の阿闍梨は何某殿の猶子にて、ことに篤學修行の聞えめでたく、此の國の人は香燭をはこびて、歸依したてまつる。我が莊にもしばし〳〵詣で給うて、いとうらなく仕へしが、去年の春にてありける、越の國へ水丁の戒師にむかへられ給ひて、百日あまり逗まり給ふが、他國より十二三歳なる童兒を具して歸り給ひ、起臥の助とせらる。かの童兒が容の秀麗なるを深く愛させ給うて、年來の事どもゝいつとなく怠りがちに見え給ふ。

通釋　主人が語つて云ふには、先程下男等があなたを見て、鬼が來たと云つて、恐れたのも、然るべきいはれがある。こゝに珍らしい話がある。奇怪な話ではあるけれども、人にも話し傳へられよ。それは此の里の上の山に一つの寺がある。この寺は元は小山氏の菩提所であつて、代々大德のある僧が住んで居られるのである。今の住職は何某殿の養子で、殊に學問も深く修行も積まれたと云ふ評判が高くて、此の國の人々は香や燭燭を持つて行つて歸依したてまつて居た。私の家にも度々來られて誠に遠慮もなくお仕へして居たが、去年の春であつた　越の國へ灌頂會の導師として迎へられて、百日ばかり逗まつて居られたが、彼の國から十二三歳位の子供を連れて歸られて、起臥の世話をさせられた。住職はその子供の容貌が秀でて居るのを深く愛されて、年來の道德堅固であつた事なども、何時とはなく忘られる事が多いやうに見えた。

さるに茲年四月の頃、かの童兒かりそめの病に臥しけるが、日を經ておもくなやみけるを、痛み悲ませ給うて、國府の典藥のおもたゝしきをまで迎へ給へども、其の驗もなく、終に空しくなりぬ。

○水丁――灌頂に同じ。佛道にて初めて受戒の時若しくは修道上昇の時、香水を頂上に灌ぐ式。
○戒師――授戒の導師。
（國府――一國の政廳のある所。國都。
○典藥――公經直屬の醫師をいふ。
○おもたゞしき――名譽ある名、重立つたもの。

○髏の壁――挿頭の花と共に極めて重要なるものを失へりと云ふ形容の句。挿頭は頭にさすかざり。
○院主　住持の僧。
○鬼――佛教にて云ふ夜叉、羅刹などの如き惨悪なるものを云ふ。
○逃忙て騒ぐこと。急に驚き惑ひ
○征し得む　打ち滅し得む。
○近曾――近時。

懐の壁を奪はれ、挿頭の花を嵐に誘はれしおもひ、泣くに涙なく、叫ぶに聲なく、あまりに歎かせ給ふまゝに、火に焼き、土に葬ることをもせで、險に險をもたせ、手に手をとりくみて、日を經給ふが、終に心神みだれ、生きてありし日に違はず、戯れつゝも、其の肉の腐り爛るゝを吝みて、肉を吸ひ骨を嘗めて、はた喫ひつくしぬ。寺中の人々院主こそ鬼になり給ひつれと、連忙しく逃げさりぬる後は、夜々里に下りて人を驚殺し、或は墓を發きて、腥々しき屍を喫ふありさま、實に鬼といふものは、昔物語には聞きもしつれど、耳にかくなり給ふを見て侍れ。されど如何してこれを征し得む。只戸ごとに幕をかぎりて堅く閉してあれば、近曾は國中へも聞えて、人の往來さへなくなり侍るなり。さるゆゑのありてこそ、客僧をも過りつるなれとかたる。

通釋　すると今年の四月頃に、その童兒がちよつとした病氣で寢た處が、日數を經て重病になつたのを、大變悲しまれて、都の典藥の重立つた人までも迎へて療治をさせられたけれども、其の効果もなくて、遂に死んだ。住職は後の玉を取られ、挿頭にした花が風に誘はれて散つたやうな最愛のものを失つた思ひで、泣くにも涙が出ない、叫ぶにも聲が出ないで、非常に歎かせられるあまりに。火に燒いたり、土に葬りもしないで、顏と顏を接し、手と手をとり合つて、日を過されたが、遂に精神が狂つてその童兒が生きて居た時と同じやうに、戲れながらも、その肉が腐つて爛れるのを惜しんで、肉を吸つたり骨を嚙めたりして、遂にその童兒を食ひ盡した。寺中の人々はこれを見て、院主は鬼になられたと云つて、狼狽して逃げ去つた後は、每夜里に下つて來て人をおどし、或は墓を開いて、醜々しい屍體を食ふ樣子は鬼のやうである。誠に鬼といふものは昔物語で聞いたこともあるが、現在このやうな鬼になられたのを見た。けれどもどうしてこれを留める事が出來ようか。只家毎に暮を限りとして門を堅く閉ぢ居るので、この頃は國中に知れて、人の往來さへもなくなつたのである。さう云ふわけがあつたので、あなたをも鬼と見過つたのであると話した。

○不可思議――佛語にて、思ひ議（ハカ）るべからずの音訳したるもの、略して不思議ともいふ。

○佛菩薩――佛は梵語佛陀の略語、元は印度佛教にいふ神の名。菩薩は梵語、菩提薩埵の略語。

○愛慾邪念――愛慾は佛語にて愛情を遂けんとする心。邪心はよこしまなる心。

○業障――佛語、三障又は四障の一。惡業（アクゴフ）即ち罪障のために、正道の敵障せらるゝこと。

○楚王の宮人。王舍が母。

○吳生が妻――何れも出典未詳なれど、支那稗史小説中の傳説ならん。

○わびしさに　難澁なる爲に。

○いも寢られぬ――いは寢ることにて、眠れぬといふこと。

快庵この物語りを聞かせ給うて、世には不可思議の事もある物かな。凡そ人とうまれて、佛菩薩の教の廣大なるをもしらず。思なるまゝ、慳しきまゝに世を終るものは、其の愛慾邪念の業障に捲かれて、或は故の形を現はして悲を報い、或は鬼となり蟒となりて祟りをなすためし、往古より今にいたるまで、算ふるに遑しがたし。又人活きながらにして鬼に化するもあり。楚王の宮人は蛇となり、王舍が母は夜叉となり、吳生が妻は蛾となる。又いにしへ、ある僧聖しき家に旅寢せしに、其の夜雨風はげしく、燈さへなきわびしさに、いも寢られぬを、夜ふけて羊の鳴く聲の聞えけるが、頃刻して僧のねぶりをうかゞひて、しきりに嗅ぐものあり。僧異しと見て、枕におきたる禪杖をもつてつよく擊ちければ、大きに叫んでそこに倒る。この音に主の嫗なるもの、燈を照し來るに、見れば若き女の

打倒れてぞありける。嗚泣々々命を乞ふ。いかがせむ。捨てゝ其の家を出でしが、其の後又使につきて、其の里を過ぎしに、田中に人多く集ひてものを見る。僧も立ちよりて何なるとぞ尋ねしに、里人いふ、鬼に化したる女を捉へて、今土に埋むなりとかたりしとなり。されどこれらは皆女子にて、男たるものゝかゝる例を聞かず。

通釈　快雅禅師はこの話を聞かれて、世の中には不思議な事もあるものだ。すべて人間と生れて仏や菩薩の教の廣大な事も知らないで、心が愚なまゝや、又頑固なまゝで一生を終る者は、その愛欲や邪念の罪障に心をひかされて、或は前世の形をこの世に現はして怒りを報いたり、或は鬼となり、又は蛇となつて人に祟をする例は昔から今に至るまで数多あつて数へ盡せない。又人が生きながらにして鬼となるものもある。楚王の宮人は蛇となり、王舎の母は夜叉となり、異生の妻が蛾となつた等はその例である。又昔、ある僧侶が賤しい家に旅宿をした處が、その夜は雨風が激しくてそれに燈火さへもない佗しさに、寝入れないのに、夜が更け

○禅杖――坐禅の時睡眠を警むる具、一名警策。多く木にて作る。
○嫗――老女。

て羊の鳴く聲が聞へたが、しばらくして僧の眠つてゐる樣子をうかゞつて、しきりに喚ぐものがある。僧は怪しい事と思つて、枕元に置いた杖で以て強く打つた處が、大いに叫んで其處に倒れた。この物音でその家の主の老女が、燈火を點らして來たので見ると、其處に若い女が打倒れて居た。老女は泣きながら命を助けてくれと頼んだ。どうにも仕方もないので打捨てゝ、其の家を出立したが。其の後に又用事があつて、其の里を過ぎた處が、田の中に、人が多勢集つて何ものかを見てゐる。その僧も立ちよつて何事かと尋ねると、里人が云ふには、鬼になつた女を捕へて、今土中に埋めるのであると語つたと云ふことである。然し乍らこれらの話は皆女であつて、男がこのやうに鬼に化した例を聞いた事がない。

凡そ女の性の慳しきにはさる淺ましき鬼にも化するなり。又男子にも隋の煬帝の臣家に、麻叔謀といふもの、小兒の肉を嗜好みて、潜に民の小兒を偸み、これを蒸して喫ひしもあなれど、是は淺ましき爽心にて、主の語り給ふとは異なり。さるにてもかの僧の鬼に

○隋の煬帝――支那隋の開皇文帝の子、隋第二世の主。

○麻叔謀――會稽の麻胡の事か。會稽錄に「會稽有レ鬼號二麻胡一、好食二小兒膸一、近以恐二小兒一云々」とあり。

なりつるこそ、過去の因緣にてぞあらめ。そも平生の行德のかしこかりしは、佛につかふる事に志誠を盡しゝなれば、其の童兒をやしなはざらましかば、あはれよき法師なるべきものを、一たび愛慾の迷路に入りて、無明の業火の熾なるより、鬼と化したるも、ひとへに直くたくましき性のなす所なるぞかし。心放せば妖魔となり、收むる時は佛果を得るとは、此の法師がためしなりける。老衲もしこの鬼を敎化して、本源の心にかへらしめなば、こよひの嬰の報ともなりなんかしと、たふときこゝろざしを發し給ふ。莊主頭を疊に摺りて、御僧この事をなし給はば、此の國の人は淨土にうまれ出でたるがごとしと、涙を流してよろこびけり。山里のやどり、貝鐘も聞えず、二十日あまりの月も出で、古戸の間に洩れたるに、夜の深きをも知りて、いざ休ませ給へとて、おのれも臥戸に入りぬ。

○衆心　野蠻人の心。
○過去の因緣——佛語にて、前世になしたる主因と助緣。因は事物の起原、緣は因を助けて果を結ばしむる作用。
○愛慾の迷路——愛着の慾が人を迷はすを路に喩ふ。
○無明の業火　無明は一切の煩惱にて、永く三界の迷苦にあることなほ長夜の如きをいひ業火は惡業の爲に自身を苦しむるより火に喩へたり。
○佛果——成佛の果。
○老衲——衲は个の刺子のごときもの。袈裟に作るよりこの袈裟を着たる老人の自稱の意。謙遜の自稱。
○敎化——佛敎上の知識にて、人を濟度すること。
○臥戸——寢室。

通釋　凡そ女の性質が心ねぢけしたものは、こんな淺ましい鬼にもなるのである。又男子でも隋の煬帝の臣家に、龐叔謀といふものがあつて、その龐叔謀が小兒の肉を好み食つて、ひそかに人民の小兒をぬすんで、これを蒸して食つたといふこともあるけれども、これは淺ましい野蠻人の心でやつた事で、今御主人の話されるのとは異つて居る。それにしても、その僧が鬼になつたことは、前世の因緣であらう、その平常の行ひに德があつたのは、佛に仕へる事に誠心を盡したのであるから、その兒童を養はなかつたならば、よい僧侶である筈だのに。一度愛慾の迷路に踏み入つて、暗闇に燃える罪の焰が盛な爲めに、鬼となつたのも、ひとしおにその僧の直く淺しい性質がさせたのである。心を放化すると妖魔となり、又心を緊張する時には、佛法の果報を得るといふのは、此の僧侶のやうな例であらう。自分がもしこの鬼を救へ導いて元の心に歸らせたならば、今夜お世話になつた返禮ともなるだらうと、尊い志を發された。主人は頭を盤にすりつけて、貴僧がこの鬼を敎化して下されるならば、此の國の人は極樂に生れ出たやうであると云つて、涙を流して喜んだ山里の宿のことであるから、時を知らす貝や鐘の音も聞えない。しかし二十日過ぎの月も出て、古い戸の間からその光が洩れて來るので、夜が

更けたことを知つて、さあ、休ませられよと云つて、自分も寝室に入つた。

山院人とゞまらねば、樓門は荊棘おひかゝり、經閣もむなしく苔蒸しぬ。蜘蛛網を結びて諸佛を鎖ぎ、燕子の糞、護摩の床を埋み、方丈廊房すべて物すさまじく荒れはてぬ。日の影申に傾く頃、快庵師寺に入りて錫を鳴し給ひ、遍參の僧今夜ばかりの宿をかし給へと、あまたゝびよべども、さらに應なし。眠藏より痩せ槁れたる僧の、漸々とあゆみ出で、咳びたる聲して、御僧は何地へ通るとてこゝに來るや。此寺はさる由緣ありて、かく荒れはて、人も住まぬ野らとなりしかば、一粒の齋糧もなく、一宿をかすべきはかりごともなし。はやく里に出でよといふ。禪師いふ、これは美濃の國を出でて、みちの奥へいぬる旅なるが、この麓の里を過ぐるに、山の靈、

○山院——山寺。
○樓門　樓ある門。
○荊棘　トゲある雜木。
○經閣　經卷を藏する堂。
○護摩　梵語、火の祭の義。我が國の密敎にて、火爐を設け、乳木（ニュウモク）を燒きて佛に祈ること。智惠の火を以て、煩惱の薪を燒き、眞理の性火を以て、冤害を盡す標識とす。
○方丈　寺の長老の居る室。
○廊房　廊は長き廊下、房は僧の居室。
○申——四時四の方角。
○錫——錫杖の略語。錫は上部を塔婆の形になし、これに數箇の鐶（ク

水の流のおもしろさに、思はずもこゝに詣づ。日もなゝめなれば、さとにくだらむもはるけし。ひたすら一宿をかしたまへ。あるじの僧いふ、かく野らなるところは、よからぬこともあなり、強ひて、とどめがたし。強ひてゆけさにもあらず。僧のこゝろにまかせよ。て、復び物をもいはず。こなたよりも一言を問はで、あるじのかたはらに座をしむる。看る〳〵日は入り果てゝ、宵闇の夜のいとくらきに、燈を點げざれば、さのあたりさへわかぬに、唯谷水の音ちかくきこゆ。あるじの僧も又眠藏に入りて音なし。

通釋　この山寺には人も住まないから、楼門には荊棘が茂りかゝつて、經もむなしく苔が蒸して居る。蜘蛛は網を張つて佛と佛の間を繋ぎ、塵糞が多くたまつて護摩を焚く床の上を埋めて居て、方丈や廊下又は僧等すべてすさまじく荒れ果てゝ居た。太陽が西南の方に傾いた頃に、快庵禪師は寺に入つて錫丈を鳴らして、自分は遍歴の僧だが、今夜一晩の

ワンを附けたり。僧侶修驗者等之を携帶す。

(一)眠藏　一個の寢所。

(二)一粒の香料　一些少の食物の意。轉じて僧の正食。

(三)日もなゝめ　日暮に近き意。

○宵闇——陰曆二十日頃即ち望後の夜にて、月が未だ上らずして宵の間の暗きこと。

宿を貸し給へと、度々呼んだが、すこしも應答がない。寢室から痩せ衰へた僧が、ひよろ〳〵歩み出て來て、しはがれた聲をして、貴僧は何處に行かれるので此處へ來られたのか。此の寺はある理由があつて、この通り荒れ果てゝ、人も住まない野邊となつたから、一粒の食物もなく、又一宿を貸す手段もない。早く人里に出でよといつた。禪師が云ふには自分は美濃の國を出て奥州へ行く旅僧であるが、この山の麓の里を通ると、山の靈や、水の流れがおもしろいので、思はずも此處に來た。日もなゝめに傾いてきたので、麓の里に下るのも遠い。どうか一夜の宿を貸し給へと云ふ。主人の僧が云ふには、このやうに荒れた所は、よくないこともある、無理にお止めも出來ないし、又無理に立去れと云ふのでもない。どちらでも貴僧の心にまかせられたがよいと云つて、復び物をも云はない。禪師からも一言をも問はないで、主人の僧の傍に坐つた。見てゐる内に日は没してしまつて、宵闇頃の夜のことで非常に暗いのに、燈火を點けないから、目の前でさへも見分られないで、ただ谷を流れる水の音だけが近く聞える。主人の僧も又寢室に入つてしまつて、物音もしない。

○影玲瓏　月影玉の輝く如くさらめく狀。
○子ひとつ　－子の刻の一點にて、午前零時。
○禿顱――禿頭の坊主の意にて、快庵禪師なさす。
○佛身の肉味　－解脫したる聖僧の肉。
○鬼奈　－餓鬼、畜生の界。
○來迎　佛菩薩の靈の現はれ來り、迎ふること。

夜更けて月の夜にあらたまりぬ。影玲瓏として、いたらぬ隈もなし。子ひとつとも思ふ頃、あるじの僧眠藏を出でて、あわただしく物を討づぬ。たづね得ずして大に叫び、禿顱いづくに隱れけむ。こゝもとにこそありつれと、禪師が前を幾たび走り過ぐれども、更に禪師を見る事なし。堂の方に駈けゆくかと見れば、庭をめぐりて躍りくるひ、遂に疲れふして起き來らず。夜明けて朝日のさし出でぬれば、酒の醒めたるごとくにして、禪師がもとの所に在すを見て、唯あきれたる形にものさへいはで、杜にもたれ、長嘘をつきて默しゐたりける。禪師ちかく進みよりて、院主何をか歎き給ふ。もし飢ゑ給ふとならば、野僧が肉に腹をみたし給へ。あるじの僧いふ、師は夜もすがら、そこに居させたまふや。禪師いふ、こゝにありてねぶる事なし。あるじの僧いふ、我あさましくも人の肉を好め

ども、いまだ佛身の肉味をしらず。師はまことに佛なり。鬼畜のくらき眼をもて、活佛の來迎を見むとするとも、見るべからぬ理なるかな。あなたふと頭を低れて默しける。

通釋　そうするうちに夜が更けて月が出て來た。月影が清く輝いて光がとゞかない隅もない。夜中の零時頃かと思はれる頃に、主人の僧が寢室から出て來て、あれてゝ物を探し求めた。そして探し得ないで大に叫んで、あの禿げ頭は何處に隱れたのか。この邊に居たのだと云つて。禪師の前を幾度も走り過ぎるが、すこしも禪師を見ないで、堂の方に駈けてゆくかと思ふと、庭を走り廻つて躍り狂ひ、遂には疲れ倒れて起き上りもしない。夜が明けて朝日が出ると、酒の醉が醒めたやうな狀態で、門師が元の場所に居られるのを見て、ただ呆れた樣子で、物さへも云はないで柱にもたれて、溜息をついて默つて居た。禪師は近く進み寄つて、あなたは何を歎いて居られるか。もし食に飢ゑて居られるのであれば　私の肉で腹をみたされるがよい、と云ふと、主人の僧が、貴僧は夜通し、そこに居られたかと云ふ。禪師が云はれるに、こゝにゐて眠らなかつたと。

主人の僧が云ふには、自分は淺ましくも人の肉を好んで食ふが、まだ佛に仕へる聖僧の肉の味は知らない。貴僧は誠に佛である。鬼畜生の暗い眼で以て、生佛の來られるのを見ようとしても、見ることが出來ないのは道理である、あゝ尊い方だと云つて頭を下けて默つてゐた。

禪師いふ、里人のかたるを聞けば、汝一旦の愛慾に心神みだれしより、忽鬼畜に墮罪したるは、あさましとも、哀しとも、ためしさへ希なる惡因なり。夜々里に出でて人を害するゆゑに、ちかき里人は安き心もなし。我これを聞きて捨つるに忍びず、わざ〳〵來りて敎化し、本源の心に返らしめむとなるを、汝我がをしへを聞くや否や。あるじの僧いふ、師はまことに佛なり。かく淺ましき惡業を頓に忘るべきことわりを敎へ給へ。禪師いふ、汝聞くとならばこゝに來れとて、簀子の前のたひらなる、石の上に座せしめて、みづから

○墮罪――罪に墮つること。罪人となること。
○惡因――（惡果に對して）惡い原因。前生の因果を云ふ。
○簀子――竹を横に並べ編みたるものにて造りたる床（ユカ）又は緣。
○讃道の歌――讃道は。女犯の眞覺大師、禪の第六祖慧能に會し、つひに禪に歸して作りしものといふ。禪の第一義を詩歌の形式にて表はしたるものにて、紙數々葉に過ざれども文辭流麗なり。

被き給ふ紺染の巾を脱ぎて、僧が頭に被かしめ、證道の歌の二句を授け給ふ。

江月照松風吹。永夜清宵何所爲。

汝こゝを去らずして、徐に此の句の意をもとむべし。意解けぬる則は、おのづから本來の佛心に會ふなるべしと、念頃に教へて山を下り給ふ。本後は里人おもき災をのがれしといへども、猶僧が生死をしらざれば、疑ひ恐れて、人々山にのぼる事をいさしめけり。

通釋　禪師が云ふには、里人の話を聞くと、汝は一度の愛慾の爲に精神が亂れてからは、忽ち鬼や畜生の世界に陷落した事は、淺さしいとも又哀しいとも、そうした例さへも殆んど無い惡因緣である。毎夜里に出て人を害するから、この近くの里の人達は安心する事が出來ない。我はこれを聞き捨てる事が出來ないで、わざ〳〵來て教化をし元の心に歸らせようとして居るのであるが、汝は自分の教を聞くかどうか、と云ふ。主人の

僧が云ふには、貴僧は誠に佛である。このやうに淺ましい惡業を直ぐに忘れることの出來る道を敎へ給へ、と。禪師は、汝が私の話を聞くと、ふならば此處に來いと云つて、絲側の前の平な石の上に座らせて、自ら被つて居られた紺染の頭巾を脫いで、僧の頭に被らせて、證道の歌を一句授けられた。

水江に月の光がさし、松風が吹く、長夜の清らかな宵に何をするか。

汝はこゝを立去らないで、靜かにこの句の意味を考へるがよい。句の意味が解譯出來た時には、自然と誠の佛心に合ふことが出來るだらうと、懇ろに敎へて山を下りられた。この後は里人達は重い災厄を免れたけれども、猶その僧の生死が知れないので、疑ひ恐れて人々は山に登ることを戒めて居た。

一とせ遲くたちて、むかふ年の冬十月の初旬、快庵大德飛路のかへるさに、又こゝを過ぎ給ふが、かの一宿のあるじが莊に立よ、て、僧が消息を尋ね給ふ。莊主よろこび迎へて、御僧の大德により

○遺緣——緣に應じて供養すること。
○還化　佛門の尊宿、佛の死するを云ふ。

て、鬼ふたゝび山をくだらねば、人皆浄土にうまれ出たるがごとし。されど山にゆく事はおそろしがりて、一人としてのぼるものなし。さるから消息を知り侍らねど、など今まで活きては侍らじ。今夜の御泊りにかの菩提をとぶらひたまへ。誰も随縁したてまつらむといふ。禅師いふ、他善果に基きて遷化せしとならば、道に先達の師ともいふべし。又活きてあるときは、わがために、一個の徒弟なり。いづれ消息を見ずばあらじとて、復び山にのぼりたまふに、いかさまにも、人のゆきゝ絶えたると見えて、去年ふみわけし道ぞとも思はれず。寺に入りて見れば、萩尾花のたけ、人よりも高く生ひ茂り、露は時雨めきて降りこぼれたるに、三の經さへわからざる中に、堂閣の戸右左に頽れ、方丈庫裏に縁りたる廊も、朽目に雨をふくみて苦むしぬ。

○道に先達　佛道に進んだ先輩。先達は我より先に道に達せる者の義なり。後に山伏などの敬語として用ひたり。
○善果——善行によりて得たる佛果。
○三の經　——陸道者の庭園をいふ。晉陶淵明の歸去來に「三逕就レ荒、松菊猶存」とあり、
○庫裏——寺院の雑事を取扱ふ室。

通釋　一年は早く經過して、翌年の冬の十月の初に、快庵禪師が奥州からの歸途に、又この土地を過ぎられたが、彼の一夜の宿を借りた家に立よつて、彼の僧の様子を尋ねられた。主人は喜んで迎へて、貴僧の大なる徳によつて、鬼は再び山を下つて來ないから、人々は皆淨土に生れ出たやうである。けれども山に行く事は誰も恐しがつて、一人として登るものもない。であるから様子は知らないけれども、どうして今まで生きて居らうか。今夜の御泊りに彼の僧の後世を弔つて下さい。誰でも御供養申し上けようと云つた。禪師が云ふに、彼の僧が善い果報に遇つて往生したと云ふのであれば、佛道の上で私の先達とも云ふものだ。又また生きて居るなれば、自分の爲には一人の佛弟子である。何れにしてもその様子を知らないでは居られないと云つて、再び山に登つて見られるのに、如何にも、人の往來が絶えたものと見えて、去年踏み分けて登つた道とも思はれない。寺に入つて見ると、萩や尾花の丈が、人の丈よりも高く生へ茂つて、露は時雨のやうに降りこぼれてゐるので、何處が庭かそれさへも解らない中に、堂閣の戸が右や左に倒れ、方丈や庫裏に廻らしてつけた廊下も、その朽ちた所に雨を含んで苔が蒸して居る。

○莽――草の名。
○作麼生――禅宗の用語。本は明清の俗語にて、何事をなすや如何に、等と云ふに同し。
○一喝――人を叱咤して悟らしむる爲めの一叫び。禅家の用語なり。
○初祖の肉云々――初祖に劣らざる話徳の僧の現存するといふ意。
○密宗――眞言宗。
○曹洞の叢席――曹洞宗の叢席、叢場は佛寺ある好き地の稱。

さてかの僧を座らしめたる簀子のほとりをもとむるに、影のやうなる人の僧俗ともわかぬまでに、髭髪もみだれしに、葎むすぼふれ、尾花おしなみたるなかに、蚊の鳴くばかりのほそき音して、物とも聞えぬやうに、まれ〳〵唱ふるを聞けば、

江月照ン松風吹ク。永夜清宵何ノ所爲ノ。

禅師見給ひて、やがて禅杖を拿りなほし、作麼生何所爲ぞと、一喝して他が頭を撃ち給へば、忽氷の朝日にあふがごとく消えうせて、かの青頭巾と骨のみぞ草葉にとゞまりける。げにも久しき念のこゝに消しつきたるにやあらむ。たふときことわりあるにこそ。されば禅師の大徳、雲の裏、海の外にも聞えて、初祖の肉いまだ乾かずとぞ稱歎しけるとなり。かくて里人あつまりて、寺内を清め、修理をもよほし、禅師を推したふとみて、こゝに住ましめけるより、故の

密宗をあらためて、曹洞の霊場をひらき給ふ。今なほ御寺は、たふとく栄えてありけるとなり。

通釋　さて彼の僧を座らせた賣子の邊を探して見ると、影のやうな人が僧侶か俗人か見分けられぬ程に、髭や髪を亂して、雜草が茂り亂れ、尾花が一面に生えて居るなかに蚊が鳴く位の細い聲をして、物を云つて居るとも聞えない程低く、時々口で唱へるのを聞くと、

江月照松風吹。
永夜清宵何所爲。

と云つて居る。禪師はこれを見られて、直に禪杖を取りなほして、作麼生何所爲かと、叱咤して彼の頭を擊たれると、忽ち氷が割目に會つて從けるやうに消え失せて、かの青頭巾と骨だけが草葉の中に殘つた。誠に久しい月日の一念がこゝで消へ盡きてしまつたのであらう。尊い道理があればこそである。であるから、禪師の大なる德の譽は、天上や、海外にまでも聞えて、初祖の肉は未だ乾かないと云つて賞め從へたとぶふことだ。このやうな次第で里人も集まつて、寺内を清め、修理を行ひ、禪師を院主に推し立崇めて、この寺に住ませてから、元の密宗をあらため

て、曹洞宗の霊場を開かれた。今もなほその御寺は、尊く栄えて居ると云ふことである。

貧福論

陸奥の國蒲生氏郷の家に、岡左内といふ武士あり。祿おもく、譽たかく、丈夫の名を關の東に震ふ。此の士いと偏固なる事あり。富貴をねがふ心常の武邊にひとしからず。儉約を宗として、家の掟をせしほどに、年を疊みて富み昌えけり。かつ軍を調練す間には、茶味翫香を娯しまず。廳上なる所に許多の金を布班べて心を和さむる事、世の人の月花に遊ぶに勝れり。人みな左内が行跡をあやしみて、客嗇野情の人なりとて、爪はじきをして悪みけり。家に久しき男に、黄金一枚かくし持ちたるものあるを聞きつけて、近く召していふ、崑山の壁もみだれたる世には瓦礫にひとし。かゝる世にうま

○蒲生氏郷――初め信長に仕へ、後豐臣秀吉に仕へて大功ありしが、石田三成の爲毒害せらる。
○關の東――近江國逢坂關より東を關東と云ひし。後坂東即ち箱根以東の名稱と混じたり。
○偏固――頑固で融通の才なき性質。
○武邊――武家。
○茶味翫香――茶を味ひ香を聞く風流事。
○廳上――室の上段。
○客嗇――物を與ふべき場合にも、與へないこと。俗にいふ「シハンボウ」。

れて、弓矢とらむ軀には、棠谿墨陽の剣、さてはありたきもの財寶なり。されど良剣なりとて、千人の敵には逆ふべからず。金の徳は天が下の人をも従へつべし。武士たるもの漫にあつかふべからず。かならず貯へ蔵むべきなり。儞賤しき身の分限に過ぎたる財を得たるは嗚呼の事なり。賞なくばあらじとて十兩の金を給ひ、刀をも放して召しつかひけり。人これを傳へ聞きて左内が金をあつむるは、長喙にして飽かざる類にはあらず。只當世の一奇士なりとぞいひはやしける。

通釋　陸奥の國の蒲生氏郷の一家に、岡左内といふ武士があつた。食祿も多く、名譽も高く聞えて、勇壯な武士だといふ評判が關東地方に聞えて居た。この左内は誠に頑固な性質があつて、富貴を願ふ心が通常の武家と違つて居た。儉約を第一として家の規則にしたので、年を經て富み榮えた。その上軍卒を調練する間には、茶の湯や香を聞くやうな風流を娯ま

○野情――野卑なる心情。
○爪はじき――人に除外される。
○黄金――大判金の類。
○昆山の璧――昆山は支那の寶玉の名山にて、寶玉なる玉の意。
○棠谿墨陽の劍――棠谿は支那古代名劍を出す地名、墨陽は名劍の名。
○十兩――我が國以前の金貨の兩、十六銖即ち四分、銀十六匁。
○刀なども云々――帶刀をゆるす。
○長喙――貪慾人の相。
（越佚欵に「越王爲レ人長頸烏喙云々」とあり、以て此の相の人は、貪慾にして交を全うし難しとせり。）

ないで、一室に多くの金を敷ならべて心を慰めてゐる事は、世間の人が月や花を賞して遊ぶよりも勝れてゐた。人々は皆、左内の行爲を怪しんで、吝嗇で心情の野卑な人だとして、爪はじきをして交らないで憎んでゐた。その左内の家に年久しく仕へてゐた男の中に、黄金を一枚隠し持つてゐる者があるのを聞きつけて、近くに召し寄せて云ふには、崑山から出る名玉でも、亂世には瓦や礫と同じことだ。このやうな亂世に生れて、弓矢を執る武士には、業鈴で出來た雪陽の劍や、それに又財寶も持ちたいものだ。然しながら良い劍だと云つても、千人の敵には向ふ事が出來ない。金の徳は天下の人をも從へることが出來る。武士たるものはこの貴い金を疎りに取扱つてはならない。必ず貯へて藏つておくべきである。汝が卑賤な身分に過ぎた財を得たのは感心な事である。賞與を與へなければならないと云ふので、十兩の金を與へ、刀を帶びる事も許して召し使つた。人々はこの話を傳へ聞いて、左内が金を集めるのは、貪慾でいくら富むでも飽き足らないと云ふ類ではない。只現代の一奇人であると云つて評判した。

其の夜左内が枕上に、人の來たる音しけるに、目さめて見れば、燈臺の下に、ちひさげなる翁の笑をふくみて坐れり。左内枕をあげて、こゝに來るは誰そ。我に糧からむとならば、力量の男どもこそ參りつらめ。儞がやうの老たる形して、ねぶりを驚ひつるは、狐狸などのたはぶるゝにや。何のおぼえたる術かある、秋の夜の日ざしに、そと見せよとて、すこしも騒ぎたる容色なし。翁いふ、かく參りたるは魑魅にあらず。人にあらず。君がかしづき給ふ黄金の精靈なり。年來篤くもてなし給ふうれしさに、夜話せむとて、推してまゐりたるなり。君が今日家の子を賞し　ふに感でて、翁が思ふこゝろばへをもかたり和さまむとて、假に化を見はし侍るが、十にひとつも益なき閑談ながら、いはざるは腹みつれば、わざとにまうでて眠をさまたげ侍る。

○燈臺——燈明を点す臺にして、今いふ燈臺に非ず。
○惨——貯藏米の義。又旅行に携へし「ほしひ」なりといふ。
○力量　人の力の程度。
○老たる——老年になつて怠り鈍りたる。
○容色　容子。
○魑魅　魑は山神、魅は妖怪
○かしづく　一郷重に奉仕する。
○精靈——佛家にいふ。死者の靈。
○もてなす——取扱ふ。
○腹みつれば——不平堪へ難き意。

通釋　其の夜左内の枕元に、人が來る音がしたので、目が覺めて見ると、燈明濃の下に、小さい老人が笑を含んで座つてゐた。左内は枕をあけて、こゝに來たのは誰れか、我に食糧を借らうと云ふのであれば、もつとも量のある男達が來さうなものだ。汝のやうな老衰した風態をして、私の眠つてゐるのをおそふたのは、狐か狸などが戯れをするのか。何か覺えた術があるだらう。秋の夜長の日さまに、密に見せよと云つて、すこしもあわて騒ぐ様子がない。するとその老人が云ふに、かくして參つたのは妖怪の類ではない、又人間でもない。君が日頃大切にされる黄金の靈である。年來鄭重に取り扱ひ給ふことのうれしさで、夜話をしようと思つて、推して來たのである。君が今日、家來を賞められたのに感心して、私の考へる事をも話して慰まうと思つて、假に形を現したのであるが、十に一つも益のない無駄話ではあるが、いはないで置くのは腹のくれることだから、わざ〳〵來て貴下の眠をさまたげたのである。

さても富みて驕らぬは大聖の道なり。さるを世の惡事（さがなき）ことばに、富めるものはかならず慳（かたに）し。富めるものはおほく愚なりといふは、皆

〔大聖〕――儒教の權威者。
〔惡ことば〕――さがなきは善なきにて、惡の反語。

の石崇、唐の王元寶がごとき、豺狼蛇蝎の徒のみをいへるなりけり。往古に富める人は、天の時をはかり、地の利を察らめて、おのづからなる富貴を得るなり。呂望、齊に封せられて、民に産業を敎ふれば、海方の人利に走りてこゝに來朝ふ。管仲、九たび諸侯をあはせて、身は倍臣ながら、富貴は列國の君に勝れり。范蠡、子貢、白圭が徒、財を鬻ぎ利を逐うて、巨萬の金を疊みなす。これらの人をつらねて、貨殖傳を書し侍るを、其のいふ所、陋とて、後の博士筆を競うて謗るは、ふかく穎らざる人の語なり。恒の産なきは恒の心なし。百姓は勤めて穀を出し、工匠等修めてこれを助け、商賈務めて此を通はし、おのれ〳〵が産を治め家を富まして、祖を祭り、子孫を謀る外、人たるもの何をか爲さむ。

○慳し——既出。

○石崇——晉の南皮の人、海外に航して富を致す、豪者にして資妓を蓄へ客に酒を勸めたりといふ。

○王元寶　春渚記聞に唐の明皇を平貴、王元寶を平福なりといへる事あり。

○豺狼蛇蝎　何れも人に忌み恐れらるゝ動物より殘忍なる性質に喩ふ。

○呂望——周初の賢人、齊の始祖、大公望の本名。

○管仲——齊の桓公を助けて、桓公をして五覇の主たらしめた賢相。

○陪臣——支那上代諸侯の大夫が人に對して云ひし稱、俗にいふ「マタモノ」。

○范蠡——春秋笵の人、越王勾踐に仕へ、勾踐會稽に困しめられし時貨殖の道を講じ遂に吳を滅し、後陶に之き陶

朱公と稱して、巨萬の富を積みたり。

○子貢――孔子の高弟にして、貨殖に長ぜし人。

○白圭――周の人、善く時変を察して貨殖をなす。後世善財の術は皆白圭を祖とす。

○貨殖傳――漢の司馬遷の著はせる史記に貨殖傳あり。

○恒の産云々――孟子梁惠王上篇に「無二恒産一、因無二恒心一」云々」とあり。恒産は今の不動産を指す。

○穀――「タナツモノ」は五穀類の美稱。

通釋　さても富んでゐて、驕らないのは大聖の道である。然るに世間の惡口で、富んで居る者は必ず性質が頑固でねぢけてゐる、富んでゐる人は多く愚だといふのは、彼の支那の昔の石崇や、唐の王元寶等のやうな貪狼蛇蝎の如き性質を持つてゐる人間だけを指していつたのである。古い時代に富んだ人は、天文を考へ、地形の利を明らかにして、自然と富貴を得たのである。周時代の呂望が、齊の大名に封ぜられて、人民に生業を教へると、遠い海邊に住む人達が生業の利益を考へてこゝに集まつた。又管仲が、九度も諸侯を合衙して、自身は又家來でありながら、富貴は列國の王侯に勝つてゐた。范蠡や子貢又白圭等の人達は財寶を賣り利益を逐うて、巨萬の富を積み重ねた。で漢の司馬遷がこれらの人々を列ねて貨殖傳を書いたが、そのいふ所が賤しいといつて、後世の學者が競走してこれを謗ることは、深く悟らない人の話である。一定の生業のない者は心が利慾に走つて、一定の心がないもので、百姓は勤勞をして穀物を産出し、職人達は勤めて耕作の道具を造つてこれを助け、商人は勤めてその産物を供給し、皆各自の産を治めて家を富まして、祖先を祭り、子孫のためを考へ謀る外に、人たるものがするべき事があらうか。

諺にもいへり、千金の子は市に死せず。富貴の人は、王者と樂みを同じうすとなむ。まことに淵深ければ、魚よくあそび、山長ければ、獸よくそだつは、天の隨なることわりなり。只貧うして樂むてふことばありて、字を學び韻を探る人の惑をとる端となりて、弓矢とるますら雄も、富貴は國の基なるをわすれ、あやしき計策をのみ調練て、ものを戕り人を傷ひ、おのが德を失なひて、子孫を絕つは、財を薄んじて名をおもしとする惑なり。顧に名とたからと、もとむるに、心ふたつある事なし。文字てふものに繫がれて、金の德を薄んじては、みづから清潔と唱へて、鋤を揮つて菜てたる人を賢しといふ。さる人はかしこくとも、さる事は賢からじ。金は七のたからの最なり。土に埋れては靈泉を堙へ、不淨を除き、妙なる音を藏せり。かく清よきものゝ、いかなれば、愚昧貪酷の人にのみ集ふべき

○千金の子——官家の子は身を大切にするとの意。史記、越世家に「千金之子、不レ死二於市一。」

○只貧うして云々——論語學而篇に「貧而樂レ道云々」とあり。

○韻を探る人——詩作をする人。

○七ツのたから——「七寶（シッポウ）の訓讀。七種の珍重すべき寶にて、金、銀、瑠璃、頗梨（ハリ）、珊瑚、瑪瑙、硨磲（シャコ）の總稱なれども、種々の說あり。

○靈泉——靈氣ある泉。

○愚昧貪酷——愚昧は智識暗ふ。貪酷は甚だしく貪慾なる人。

やうなし。今夜此の憤りを吐きて、年來の心やりをなし得ることの嬉しさよといふ。

通釋　誰にも、千金のある金滿家の子は市中で倒れ死はしない、富貴の人は王者と同じ樂しみをすると、いつてゐる。實際淵が深いと、魚がよく遊び、山が長く續いてゐると、獸類がよく生育するのは、天の意に隨ふ道理である。たゞ貧乏でゐて樂しむといふ語があつて、學文の說をさがす學者が惑ふ糸口となつて、弓矢を執る武士も、富貴が國の基礎であることを忘れて、不思議な技巧をのみ練習して、物事を破り人を傷つけて、自分の德を失つて、子孫を絕へさすのは、財寶を輕んじて名を重んずるから起る過である。思ふに名譽も財寶も、求める道は一つで、心が二つあるのではない。文字といふものに拘泥して、金を輕んじては、自ら潔白だといつて鋤を棄てゝ貨殖を考へない人を賢人といふ。だがそれをした人は賢しいにしても、そうした行爲は賢い事ではあるまい。金は七寶の中で最も貴いものである。土中に埋れた時は、清らかな泉を湧し、不潔を拂つて妙なる音を藏してゐる。このやうに清らかなものが、どうして、愚かで貪慾な人の許にばかり集まるべき筈があらうか。今夜

この憤りを話して、年來の氣晴らしをすることが出來るのは嬉しいことだといふ。

○さてしも　それ程にも。
○詳に――細しく。
○紙魚――衣服書籍等を蝕する蟲。本條にては書籍を蝕する意によつて學者を罵りて云ふ。
○殘忍の人　堪へ難き行爲ある人。
○俸祿――官より勤勞に依りて受くる祿。

左内與じて席をすゝみ、さてしも、かたらせ給ふに富貴の道のかたき事、己がつねにおもふ所露たがはずぞ侍る。こゝに慇なる問事の侍るが、ねがふは詳に示させ給へ。今ことわらせ給ふは專ら金の德を尙しめ、富貴の大業なる事をしらざるを罪とし給ふなるが、かの紙魚がいふ所もゆゑなきにあらず。今の世に富めるものは、十が八つまではおほかた貪酷殘忍の人多し。おのれは俸祿に飽き足りながら、兄弟一屬をはじめ、祖より久しくつかふるものゝ、貧しきをすくふ事をもせず。隣に栖みつる人のいきほひをうしなひ。他の援けさへなく、世にくだりしものゝ田畑をも、價を賤くして、あながちに己がものとし、今おのれは、村長さうやさはれても、むかしかり

たる人の物を返さず。禮ある人の席を譲れば、其の人を奴のごとく見おとし、たま〳〵舊き友の寒暑を訪らひ來れば、物からむためかと疑ひて、宿にあらぬよしを應へさせつる類、あまた見來りぬ。

通釋　左内は興味をもつて席を進めて、それ程にも深く、語り給ふ富貴の道の重要な事は、自分が平常に考へて居る所と少しも違はない。こゝにつまらない質問があるか、どうか詳細に教へ給へ。今語られたことは一途に、金の徳を輕んじて、富貴が大業である事を知らない事をいけないと云はれたが、彼の學者がいふ所も道理がないでもない。今の世に富んで居る人は、上の中八までは大抵ひどく慾が深く殘酷な人が多い。自分は依祿で十分に足りなから、兄弟や一族をはじめ、祖先から久しい間仕へてゐる者の貧乏を助けてやる事もしない。又隣家に住んだ人が零落して他人の援助さへもなくて、貧困に苦しんでゐる人の田畑をも、價を安くして、無理に自分の所有地にし、現在自分は、村の長と人に尊ばれても昔借りた人の物を返さない。そして禮儀を知る人が席を譲ると、その人を下男のやうに見くだし、たまに舊い友人が、寒暑の挨拶に訪ねてくる

と、物を借る爲めに來たかと疑つて、家に居ないと應答をさすなどの類は、今までに多く見て來た。

又君に忠なるかぎりをつくし、父母に孝廉の聞えあり、貴きをたふとみ、賤しきを扶くる意ありながら、三冬のさむきにも一裘に起臥し、三伏のあつきにも一葛を濯ぐいとまなく、年ゆたかなれども朝に暮に、一椀の粥にはらをみたしむ。さる人は、もとより朋友の訪らふ事もなく、かへりて兄弟一屬にも通を塞れ、交を絕れて、其の怨を訴ふる方さへなく、汲々として一生を終るもあり。さらば、その人は作業にうときゆゑかと見れば、夙に起き、おそくふして、性力を疑し、西に東に走りまどふ蹺蹺、さらに閑なく、その人思にもあらで、才を用ふるに的るは稀なり。これらは顏子が一瓢の味ひをもしらず。かく果つるを佛家には前業をもて說き示し、儒門には

○孝廉——孝は親によく事ふること、廉は正直にて寡慾なるをいふ。
○三冬——冬の三ケ月間。
○一裘——一枚の毛衣。
○三伏——夏の土用をいふ。
○一葛——一枚の麻衣。
○汲々——間斷なく勤勞する狀。
○顏子が一瓢の味ひをもしらず——清貧に安んずる形容なり。論語雍也篇「一簞食、一瓢飲在二陋巷一、人不レ堪二其憂一、回也不レ改二其樂一、賢哉回也」
○前業——前世の宿業。
○來——來世。佛教にていふ、人の死したる先の世、來世。

○荒唐——漠然として取止めなき説。

天命と教ふ。もし未來あるときは、現世の陰徳善功も來世のたのみありとして、人しばらくここにいきどほりを休めむ。されば富貴の道は佛家のみその理をつくして、儒門の教は荒唐なりとやせむ。鬼も佛の教にこそ懲らせ給ふらめ。否ならば詳にのべさせ給へ。

通釋　又君公の爲には忠義の限りを盡し、父母に對しては孝行で正直だとの評判があり、貴いものを尊び、賤しいものを扶助してやる心を持つて居ながら、三冬の寒さが嚴しい時にも一枚の毛皮で起臥し、三伏の暑い折でも一枚の麻衣を洗ふ時間を持たないで、豐年にさへ朝夕、一杯の粥で腹を充たす人がある。そのやうな人は、もとより友人が訪ねる事もなく、まだかへつて兄弟や一族達にも往來をする事を斷られ、交際を絶れても、その恨みを訴へる所さへもなくて、あくせくとして、一生を終る者もある。それならば、その人は生業をなげやりにして居るのかと思ふと、朝は早く起き、夜は遲く寢て、一生懸命に力を盡して、東西に奔走する樣子には、さらに少しの閑もなく、又その人は愚者でもなくて、才を用ひるのだが、それが的中する事は少ない。これらの人は頭子が一瓢を拠へ

て清貧に甘んじた心境も知らないのである。かうして一生を終るのを佛教では前世の因緣だといつて說明し、儒教では天命だと教へる。もし來來があるときは、この世での陰德とか善功も、來世で報はれる樂しみがあるとして、人は少しこゝで怒りを解くであらう。であるから富貴の道は佛教でだけその道理があつて、儒教の教へは取り止めのない說たとしようか。すると神も佛の道にたよられるのであらう、さうでなければ詳しく語り給へ、といつた。

翁いふ、君が問ひ給ふは往古より論じ盡さゞる理なり。かの佛の御法を聞けば、富と貧しきは、前生の修否によるとや。此はあらましなる教ぞかし。前生にありしとき、おのれをよく修め、慈悲の心專らに、他人にも、なさけふかく接りし人の、その善報によりて、今此の生に富貴の家に生れ來り、おのがたからをたのみて、他人にいきほひをふるひ、あらぬ狂言をいひのゝしり、あさましき夷ごころ

○前生——過去の世。
○あらまし——大體。
○名聞利要　名譽と利益。
○尼媼——尼は梵語毗の義。媼は支那にて僕婦を稱する語。我が國の俗に老女を呼ぶ稱。
○蕩かす——人の心を迷はし失はしむること。
○なさ佛法——半佛法にて、佛教に未熟なる者。

○宗廟――帝王諸侯祖先の靈屋。轉じて祖先の靈。
○慳貪――佛教にていふ十惡の一、己が物を吝み他の物を貪ること。

をも見するは、前生の善心かくまでなりくだる事は、いかなる報いのなせるにや。佛菩薩は名聞利要を嫌み給ふとこそ聞きつる物を、など貧福の事にかゝづらひ給ふべき。さるを富貴は前生のおこなひの善かりし所、貧賤は惡しかりし報いとのみ說きなすは、尼嫗を誘かすなま佛法ぞかし。貧福をいはず、ひたすら善を積まむ人は、その身に來らすとも、子孫は必ず幸福を得べし。宗廟これを嬰けて子孫これを保つとは、此の理の細妙なり、おのれ善をなして、おのれその報いの來るを待つは、直きこゝろにもあらずかし。又惡業慳貪の人の、富み昌ゆるのみかは、壽めでたく、その終をよくするは、我に異なることわりあり、委時聞かせ給へ。

通釋　翁が云ふには、君が問はれることは、昔から論じ盡されてゐない理である。彼の佛の教へを聞くと、現世での富貴と貧賤とは、前世の因緣に

よるとか云ふが、これは大體の教へである。前世に居た時に、自分の身をよく修めて、慈悲の心を專一にし、他人に對しても、人情深く交つた人が、そのよい果報に依つて、今この世では富貴の家に生れて來て、自分の持つて居る財寶を力にして、他人に勢力をふるひ。ありもしない空言を云ひのゝしつて、淺ましい野蠻な心を見せることは、前世でもつて居た善心がこれ程までになり下つたのである、このやうになり下つたのは、どうした報がさせたのであらうか。佛や菩薩は名譽や外聞を嫌はれるとこそ聞いて居るのに、どうして貧福等の事に關係をされようか。さうであるのに、富貴は前生の行ひが善かつたからで、貧賤は前生の行ひが惡かつた報いだと說明するのは、尼や女の心を迷はし欺く未熟な佛法である。貧福の事は云はないで、一途に善を行ひ積む人は、報いが自身に來ないでも、子孫に至つて必ず幸福を得るだらう。先祖が善事を積んで子孫がこれを保つと云ふのは、この道理の例である。自分が善事を行つて、自身でその報いが來るのを待つと云ふことは正しい心ではない。又惡業を行ひ慳貪な性質の人が、富み榮えるだけではなく、壽命も長くて、その終りを全うすることについては、私に從つた理由がある。漸くの間聞かれよ。

我今假に化(かたち)をあらはして語るといへども、神にあらず、佛にあらず。もと非情の物なれば、人と異なる慮(こゝろ)あり。いにしへに富める人は、天の時に合ひ地の利をあきらめて、産を治めて富貴となる。これ天の隨(したが)ひ〳〵なる計策なれば、たからのこゝにあつまるも、天のまに〳〵なることわりなり。又卑吝貧酷の人は、金銀を見ては父母のごとく親しみ、食ふべきをも喫(くら)はず、穿(き)べき物をも着ず。得がたきいのちをさへ惜しと思はで、起きて思ひ、臥して忘れねば、こゝにあつまる事、まのあたりなることわりなり。我もと神にあらず、佛にあらず。只これ非情なり。非情のものとして人の善惡を糺し、それにしたがふべきいはれなし。善を撫で、惡を罪するは、天なり。神なり。佛なり。三つのものは道なり。我がともがらの反ふべきにあらず。只かれらがつかへ傳(かしづ)く事の、うや〳〵しきにあつまるとし

○非情の物——意識なきもの、金錢の化身なればいふ。

○三つのもの——天、神、佛。

○善根　諸善を增長せしむる根本。佛敎の語。

るべし。これ金に靈あれども、人とこゝろの異なる所なり。また富みて善根を種うるにも、故なきに恵みほどこし、その人の不義をも察らめず、借し與へたらむ人は、善根なりとも財はつひに散すべし。これらは金の用を知りて、金の徳を知らず、かろくあつかふが故なり。

通釋　自分は今假りに姿をあらはして物語つてゐるが、神でもなければ佛でもない。元來非情のものであるから、人とは異なつた考へがある。往時に富んだ人々は、天の時節に適ふやう又地の利を悟つて、生業をよく治めて富貴となつた。これは天道の理に從つた計畫であるから、財資かこの人に集るのも、天道に順應した理窟である。又吝嗇で貪慾な人は、金銀を扱ふのに父母のごとくに親しんで、食ふべきものをも食はず、着るものも着ないで、二つとは得がたい命さへも惜しいとも思はないで、只金銀のことを起きては思ひ、寝ても忘れないゆゑ、金銀がこの人の許に集ることは、尤もな道理である。自分は元來神でなく、又佛でもない。

たゞ非情のものである。非情の身のものとして人の善悪をたゞして、それに従ふ理由がない。善を愛撫し、悪を罰するのは、天のする所であり。神の行ふ所であり。佛の扱ふ所である。この天、神、佛、の三者は人の守るべき道である。自分等の及ぶべき所ではない。であるから自分達は只人達が金を愛し、大切に守る事が鄭重なる人の許へ集るものであると知り給へ。これは金に霊魂があつても、人と心が異なつてゐる所である。又富んで居て善根をつむのにも、理由もないのに恵み施し、その人の不義なことも覚らないで、借し與へてやる人は、その行為が善根であつても、財産は遂に散失するだらう。これらは金を使ふ事を知つて、金の徳を知らないで、金を軽率に取り扱ふからである。

又身の行もよろしく、人にも志誠ありながら、世に窮られてくるしむ人は、天苷氏の賜すくなく生れ出でたるなれば、精神を労しても、いのちのうちに富貴を得る事なし。さればこそ、いにしへの賢き人は、もとめて益あればもとめ、益なくばもとめず。己がこのむ

○天苷氏——人の神。
○いのちのうちに——一生涯のうちに。
○不肖——悪なる者。
○瓦の云々——瓦解は甚だしく崩る、喩。
○閑人——無用の人。

まに〳〵、世を山林にのがれて、しづかに一生を終る。心のうちいかばかり清しからむとはうらやみぬるぞ。かくいへど、富貴の道は術にして、巧なるものはよく湊め、不肖のものは瓦の解くるより易し。且我がともがらは人の生産につきめぐりて、たのみとする主もさだまらず。こゝにあつまるかとすれば、其の主のおこなひによりて、たちまちにかしこに走る。水のひくき方にかたぶくがごとし。夜に昼にゆき〳〵て休むときなし。たゞ閑人の生産もなくてあらば、泰山もやがて喫ひ盡すべし。江海もつひに飲みほすべし。いくたびもいふ、不徳の人のたからを積むは、これとあらそふことわり、君子は論ずる事なかれ。時を得たらむ人の儉約を守り、つひえを省きてよく務めむには、おのづから家富み人服すべし。我は佛家の前業も知らず、儒門の天命にも拘はらず、異なる境にあそぶなり

○泰山――支那五嶽の一、山東泰安縣の北にある大山。
○不徳の人　人格なき人。
○君子　人格ある善人。
○異なる境――人間世界とはちがつた境地。

といふ。

通釋　又自分の身をよく修め、人に對しては誠の心を持つてゐながら、世の中に容れられないで苦しむ人は、天若氏の惠みが少ない生れつきであるから、心を勞しても、一生涯の內に富貴を得る事が出來ない。であるから、古の賢人は、富貴を求めて益がある時はこれを求め、益がない時は求めない。自分が欲する所に從つて、山林に遁れて生活をして、靜かに一生を終るのである。このやうな事情で山野に遁れたのを、後世の人が、その心の內はどんなにか淸らかであつたらうかとうらやむのである。しかしかうは云ふものゝ、富貴の道は技術であつて、術の上手なものは財寶をよく集め、愚者は瓦が缺け崩れるよりも易く、財を散じるのである。その上に我れ等は人の生業につき巡るので。便りとする主人も定まらない。だからこゝに集るかと思ふと、其の主人の行爲に從つて、直に彼所に走つて行く。丁度その樣子は水が低い方に流れる如きで、日夜の別もなく動いて休むときがない。閑人が生業も無くて、たゞ遊んで居れば、泰山程に積んだ財寶もやがては食ひ盡すだらう、大きな江海も遂には飮み盡すのである。幾度も云ふが、德義のない人が富貴になつたのに

ついて是非を議論することは、人格ある人のするべき事ではない。時節を得た人が儉約を守つて、無駄な費用を省いてよく生業を務めると、自然に家も富み人も敬服するのである。自分は佛法でいふ前世の因緣と云ふ事も知らないし、又儒門の云ふ天命にも拘泥しない、只人とは異つた所で遊んでゐるのである、と云つた。

左内いよ〳〵興に乘じて、靈の議論きはめて妙なり。曾しき疑念も今夜に消じ盡しぬ。試にふたたび問はむ。今豐臣の威風四海を靡し、五畿七道漸しづかなるに似たれども、亡國の義士彼山に潛み窺れ、或は大國の主に身を托せて、世の變をうかゞひ、かねて志を遂げむと策る。民も又戰國の民なれば、未を釋てゝ矛に易へ、農事を事とせず。士たる者枕を高くして眠るべからず。今の體にては長く不朽の政にもあらじ。誰か一統して民をやすきに居らしめむや。又誰にか合し給はむや。翁云ふ、是又人道なれば、我が知るべき所

○五畿七道――日本往古全國の區域を別ちたる稱。五畿內は山城、大和、河內、和泉、攝津。七道は京都より邊境に通ずる國道の名、東海道、東山道、北陸道、山陰道、山陽道、南海道、西海道の七なり。

○たなびて　未は今の「シャベル」のごときもの。其の柄をもといひ、端の刃を指といふ。俗に鋤鍬を拾つるといふに同じ。

○不朽の政　永久に續く政事。

○信玄――武田信玄。

にあらず。只富貴をもて論せば、信玄がごとく智謀は百が百的らずといふ事なくて、一生の威を三國に震ふのみ、しかも名將の聞は世に隠りて賞する所なり、その末期の言に、當時信長は果報いみじき大將なり。我平生に彼を侮りて、征伐を怠り、此の族に禍る。我が子孫も即て他に亡されむといひしとなり。謙信は勇將なり、信玄死しては天が下に對なし。不幸にして遂く死りぬ。信長の器量人にすぐれたれども、信玄の智に及ばず。謙信の勇に劣れり。しかれども富貴を得て、天が下の事一回は此の人に依す。任するものを辱しめて命を殞すにて見れば、文武を兼ねしといふにもあらず。

○百が百云々——百發百中と同じ。史記周紀に「必有二養由基者一、善射者也、去二柳葉一百歩而射レ之、百發而百中レ之云々」とあり。
○三國——甲斐、信濃、越後。
○信長——織田信長。
○果報——前世の善因に依りて得たる幸福。
○謙信——上杉謙信。
○依す——天子より御委任あること。
○任するもの云々——家臣明智光秀を辱しめしを云ふ。

通釋　左内はいよ〳〵興味に乘じて、貴方の議論は大變巧みである。自分の長い間の疑ひも今夜の話で解けて終つた。試にもう一度お浚ねしよう。今は豐臣氏の威光が天下を壓かしてゐて、五畿内や七道はからうじて鎭

まつてゐるやうであるが、國を亡された義士達が、彼所此所に潜んで居て、或は大國の主人に身をよせて、世に變のある時季を窺ひ、豫ての自分の志を遂行しようと計策して居る。又一般の人民も戰國になれた人民であるから、勁鋭を捨てゝ矛と持ちかへて、農業の事は念頭にをかない。であるから武士たる者は安心して眠ることも出來ない。このやうな世の情態では豊臣氏の政治も末長くは續かないだらう。さうすると誰れが天下を一統して人民に安心を與へるだらうか、又貴方は誰れが適合すると思はれるか、と云つた。翁が云ふには、これも又人の道であるから、非情の自分の知つた所ではない。只富貴の道を以て論ずると、信玄のやうに智慧や謀略が確實で的中しないといふ事がないのに、一生の威光をたゞ三國の内に張はすだけであつた、しかも名將だと云ふ風評は天下の人が皆つて賞する所である、そしてその死ぬ時の言に、當時信長は果報のよい大將である。我は平生に彼を恨つて、征伐をする事を怠つてゐる内に此の病氣に罹つた、自分の子孫もやがては彼に亡ぼされるだらうと云つたと云ふことである。謙信は勇將である、信玄が死んだ後は天下に肩をならべるものがないが、不幸にも早く死んだ。信長はその器量は人に勝つてゐるが、信玄の智慧には及ばないし又謙信の武勇にも劣つて居た。

ではあるが富貴を得て、天下の政事も一度はこの人に委任された。しかし後にその信任する家臣を殺しめて、それが為めに命を失つた所を見ると、文事武事兩面を兼ね備へた人とも云へない。

○柴田　柴田勝家。
○丹羽　丹羽長秀。
○蛟蜃　蛟は龍の屬、海中の動物にて、共に未だ龍にならざるもの。
○千秋樂——唐樂の名に千秋樂あり。
○堯舜云々　堯は支那古代盛德の天子。舜は瑞草。草は日の高き時。堯舜日昃とは聖天子の世善く治まりて日影長く、無事太平なりとの意。
○百姓歸家　早く作業を了へて自家に歸るとは生活の安定なるを云ふ。

秀吉の志大なるも、はじめより天地に滿つるにもあらず。柴田と丹羽が富貴をうらやみて、羽柴と云ふ氏を設けしにてしるべし。今龍と化して太虛に昇り、地中をわすれたるならずや。秀吉龍と化したれども、蛟蜃の類なり。蛟蜃の龍と化したるは、いのちわづかに三歲を過ぎずと。これもはた後なからむか。それ驕をもて治めたる世は、往古より久しきを見ず。人の守るべきは儉約なれども、過ぐるものは卑吝に陷る。されば、儉約と卑吝の境よくわきまへて、務むべき物にこそ。今豐臣の政久しからずとも、萬民にぎはゝしく、戶々に千秋樂を唱はむ事ちかきにあり。君が望にまかすべしとて、

八字の句を諷ふ、其の詞にいはく、

　堯　莫　日　果ク　百　姓　歸ン レ家ニ。

數言興盡きて遠寺の鐘五更を告ぐる。夜既に曙けぬ。別れを給ふべし。こよひの長談まことに君が眠をさまたぐと、起きてゆくやうなりしが、かき消えて見えずなりにけり。左内つら〳〵夜もすがらの事をおもひて、かの句を案ずるに、百姓家に歸るの句、粗其の意を得て、ふかくこゝに信を發す。まことに瑞草の瑞あるかな。

通釋　秀吉の志が如何に大きなものであつても、はじめからその志が天地の間に充滿してゐた譯のものでもない。何故なれば、柴田勝家や丹羽長秀等の富貴な身を羨んで、兩氏の姓の一字を合して羽柴と云ふ姓を作つたことに依つてもそれが解る。今は龍に化して空に昇つて居るので、元來住んで居た地中を忘れたのではあるまいか。秀吉は現在龍と化してはゐるが、元は地中に住んで居る蛟蜃の類である。世間で、蛟蜃が龍に化し

○信を發す　信仰の心を發すること。
○瑞草の瑞　天下太平疑ひなしの意。

たのは、寿命が僅かに三年を過ぎないと云ふから、秀吉一族の運命も矢張り永く續かないのであらうか。一體政事家が騙を以て治めた世は、昔から永く續いた事がない。人が守らねばならないものは儉約であるか、その儉約が極端に走つたものは下卑吝嗇になる。それであるから、儉約と吝嗇との境をよく辨別して、よくその中をとつて、務むべきものである。今の豐臣氏の政事が長く續かないでも、天下が太平に治まり、萬民が賑はしく、家毎に千秋樂を唱ふて、世の太平を祝す事が近いうちにある。尚君の望にまかしてと云つて、八字の句をうたつた、その詞は次の如くである。

堯帝の時代に生じたといふ瑞草が生じて、空には日が高く輝いてゐて、世の中はよく治まつて居て無事太平である。このやうに世が太平であるから、百姓達は生活に苦しまないで、毎日の生業を早く了へて家に歸る。

長らくの物語で興味も盡きた頃に、午前四時になつた事を告げる遠寺の鐘の音が聞えた。そして早くも夜が明けた。老人は、お別れをしよう、今夜は長い物語をして、まことに貴方の眠をさまたけたことだ、と云つて、起つて行くやうであつたが、何處へ行つたか姿はかき消されて見え

なくなつた。

左内はつく〴〵夜通しの出來事を思ひ浮べて、彼の何をよく〳〵考へて見ると、百姓家に歸るの何も、大略その意味を悟ることができて、深い信念を持つことが出來た。まことに瑞草の如くめでたい事である。

雨月物語新解　終

昭和九年十月十五日　印刷
昭和九年十月二十日　發行

雨月物語新解

定價壹圓五拾錢

紹著者　杉井一雄

發行者　東京市神田區神保町三ノ一二
奥村銀松

印刷者　東京市神田區錦町三ノ二一
今成温平

發行所　東京市神田區神保町三ノ一三
振替口座東京三一六五七
白帝社

發賣所　東京市神田區神保町三ノ一三
松榮堂

光子所有

CPSIA information can be obtained
at www.ICGtesting.com
Printed in the USA
LVHW061925090622
720903LV00005B/217

This is a reproduction of a book published before 1923 or a book otherwise in the public domain. This book may have occasional imperfections such as missing or blurred pages, poor pictures, errant marks, etc. that were either part of the original artifact, or were introduced by the scanning process. We believe this work is culturally important, and despite the imperfections, have elected to bring it back into print as part of our continuing commitment to the preservation of printed works worldwide. We appreciate your understanding of the imperfections in the preservation process, and hope you enjoy this valuable book.